

法政大學講義録

松原, 一雄 / 山崎, 覺次郎 / 鈴木, 英太郎 / 中村, 進午 /
清水, 澄

(出版者 / Publisher)

法政大學

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

1905-02-05

（明治三十七年十一月十日第三種郵便物認可）
（每月三回 五日、十五日、二十五日發行）

明治三十八年二月五日發行

三十八年度

法政大學講義錄

第十號

法政大學發行



0376

第十號目次

法學通論	(自四一) (至六八)	法學博士 中村 進 午
憲法	(自四八) (至六四)	法學士 清 水 澄
民法債權第一章	(自四〇) (至六五)	法學士 鈴木 英太郎
國際公法(平時)	(自五三) (至八四)	法學博士 中村 進 午
國際公法(戰時)	(自九六) (至一〇〇)	法學士 松 原 一 雄
經濟學	(自七九) (至一二〇)	法學士 山崎 覺次 郎

雜錄 ○大審院判例要旨 ○懸賞討論會 ○法政速成科講義錄

090
1905
1-10

- 五 強制力ヲ有スルコト
- 六 條理ニ適スルコト
- 七 法律又ハ他ノ慣習法ニ背カサルコト
此七箇ノ條件ヲ充スニ由テ慣習法律ト爲ルヘシト定メタルハ英國ノ法律ノ明示スル所ニ非スシテ裁判例ノ定メタルモノナリ獨逸ノ學說トシテ此事ヲ討論シタルモノ極テ多シ其一トシテ「デルンブルヒ」ノ說ク所ヲ舉クレハ左ノ如シ
一 同一ノ行爲アリタルモノナラサルヘカラス
二 多年ノ慣習ナラサルヘカラス而シテ其年數ハ裁判官ノ決定ニ依ルノ外ナシ
三 法律上ノ慣習ナラサルヘカラス
四 此慣習ハ必シモ人民一己ノ慣習ナルコトヲ要セス故ニ團體ノ慣習モ亦慣習法ト爲ルヘシ
五 善良ノ風俗、完全ナル理性ニ反スヘカラス
第二說 裁判所認定說(或ハ法廷承認說) 此說ニ依レハ或慣習ニ關シテ爭ヲ生シ裁判所ノ裁決ヲ請ヒタルトキニ當リ裁判所カ此慣習ヲ法律ナリト認定シタル時ニ始テ慣習ト爲ルヘシト謂フナリ英國ノ學者ハ此說ヲ採ル者極テ多シ「オースチン」「ホルランド」「ベンザム」ノ如キ皆是ナリ殊ニ「ベンザム」ノ如キハ如此法律ヲ名ケテ裁判官制定法ト謂フヘシト唱ヘタリ
第三說 慣習カ永ク繼續スルトキハ法律ト爲ルヘシトノ說 此說ハ所謂永ク繼續スルトノ期間不明ナルカ故ニ竟ニ曖昧ニ陷ルヘシ
第四說 主權者カ默示ニ慣習ヲ認定セハ之ニ由テ法律ト爲ルヘシトノ說 此說ニ依レハ明示ニ認定ス

例ハ成文法ト爲ルヘシト云フナリ然レトモ如何ナル行爲ヲ以テ暗黙ノ認定ト看做スヘキヤ明カラス
例之裁判官カ該慣習ヲ適用シタル時ニ之ヲ暗黙ノ認定アリト看ルヘキカ若クハ人民カ其慣習ニ從フ
コトヲ主權者カ看過シタル者ニ之ヲ暗黙ノ認定ト看ルヘキカ不明ナルヘシ
第五說 人民カ從來慣習トシテ行レタル行爲ヲ法律ナリト確信シテ之ニ從フニ至リタルトキハ慣習法
ト爲ルトノ說 獨逸ノ「サビニー」「フター」等ハ此說ヲ採ル此說ハ少クトモ或法律カ人民ノ意思ヨ
リ出ヅルモノナリトノ論據ヲ認メタルヘカラス隨テ若法律カ人民ノ意思ニ出ヅルモノニ非ストスレ
ハ當然消滅スヘシ尙此說ニ依レハ人民カ慣習ヲ以テ法律ナリト確信シタル時期ノ如何ヲ決定セサル
ヘカラス而シテ此時期ヲ決定センコトハ到底可能ニ非サルヘシ
慣習法モ亦法律ナル以上ハ慣習法カ成文法ト衝突シタル場合ニ其孰ニ重キヲ置クヘキヤノ問題アリ
羅馬時代ニ於テハ或學者ハ慣習法ヲ以テ成文法ヲ變更スルノ力アリト爲シタル然ルニ「コンスタン
チン」帝ハ其「コーデックス」ニ於テ慣習法ヲ以テ成文法ヲ變更スルコトヲ得ストセリ然レトモ慣習法
ト成文法トカ同時ニ存在スル場合ニ於テハ當然成文法ニ勝テ占メシムヘシトハ近來ニ於テ總テノ國
家ノ認ムル所ナリ蓋慣習法ハ裁判官ノ定ムル所ニシテ成文法ノ如ク確定シタルモノニ非サレハナリ
故ヲ以テ今日ニ於テハ慣習法モ成文法モ共ニ法律ナルヲ以テ全ク對等ノ效力ヲ有スルモノナリトノ
說ハ認メラルルコトナシ

裁判官ハ自國ノ法律ヲ知ルノ義務アリ於是裁判官ハ自國ノ慣習法ヲ知ラサルヘカサルヤノ問題ヲ
生ス獨逸ノ「プフター」ノ如キハ慣習法モ亦法律ナルカ故ニ慣習法カ裁判上明白ナラサル場合ニ於テ
ハ裁判官ハ職權ヲ以テ慣習法ヲ調査セサルヘカラスト曰ヘリ然ルニ獨逸民訴訟法第二六五條ニハ

「裁判官ハ獨立シテ慣習法ヲ調査スルノ權利アレトモ裁判官若習慣法ヲ知ラサルトキハ當事者タル
者之ヲ證明セサルヘカラス」ト規定セリ但裁判官ハ當事者ノ證明シタルモノヲ必シモ慣習法ト看サ
ルヘカサルノ義務ナシ予輩ハ日本ノ國內法上ノ解釋ヨリ裁判官ハ慣習法ヲ知ラサルヘカサルモ
ノト思惟ス

第二 學說 學說トハ學者カ法律ニ下シタル法理上ノ見解ナリ法律ニ不明ナル事アルトキハ學者ハ其
缺點ヲ補ヒ法律ヲ解釋セシムカ爲ニ自己ノ見解ヲ下スコト當然ナリ學說カ法律ノ淵源ト爲ルト謂フコト
ハ立法者カ學者ノ見解ヲ參考ニ供スル場合ヲ指スモノナリ然リト雖學說其モノハ決シテ學說トシテ直
ニ法律ノ效力ヲ有スルモノニ非ス國家ノ權力ヲ加ヘテ始テ法律タルノ力ヲ有スルモノナリ例之羅馬ノ
「セオドシヤス」第二世カ五大法律家ノ學說ニ法律タルノ效力ヲ與ヘタルカ如ク又羅馬ノ「ヂャスチニヤ
ン」帝カ三十九大法律家ノ學說ヲ集メテ法典ヲ作り之ニ法律タルノ效力ヲ與ヘタルカ如シ然レトモ近
世ニ於テハ國家カ學者ノ說ヲ認メテ直ニ法律ト爲シタルノ例ヲ見ス故ニ學說ハ唯間接ニ法律ノ淵源ト
爲ルニ過キサルナリ

第三 條理 條理トハ正義公道ト謂フコトナリ正義公道トハ如何ナルモノナルヤニ付テ判斷タル定義
ヲ下スコト能ハス故ニ裁判官カ條理ニ從ヒ又ハ立法者カ條理ニ從フト云フコトハ裁判官又ハ立法者カ
自己ノ見解上正義公道ナリト認メタルコトニ從フコトヲ云フ羅馬ノ古代ニ於テ萬國共通ノ法律ニ從フ
ヘシト謂ヒタルカ如キ我國ノ明治八年ノ布告ニ於テ條理ニ從フヘシト云ヒタルカ如キ英國ニ於テ衡平
法ニ依ルヘシト定メタルカ如キ自然法主義ノ國ニ於テ自然法ニ依ルヘシト云フカ如キ皆是ナリ故ニ條
理カ法律ノ淵源ト爲ルト謂フコトハ立法者カ之ヲ認メ又ハ裁判官カ之ヲ適用シタル後ニ於テ始テ生ス

ルモノナリ
 第四條 條約ハ國家ト國家トノ間ノ契約ニシテ單ニ當事者タル國家ヲ拘束スルニ過キス國家ノ一箇人ハ條約ノ主體ニ非サルカ故ニ條約ヲ遵奉スヘキ義務ヲ負フコトナシ然レトモ若條約ハ國家ノミヲ拘束スルモノナルカ故ニ國民ハ之ニ從フコトヲ要セストセハ締結國ノ一方ハ締結國ノ地方ニ對シテ到底完全ニ條約上ノ義務ヲ履行スルコト能ハサルヘシ故ニ國家ハ外國ト條約ヲ締結スルト共ニ國內ニ向テハ國家カ此條約ヲ遵奉スヘキコトヲ或形式ニ依テ命令スルモノナリ但人民カ條約ニ拘束セラルルハ條約其モノニ拘束セラルルニ非スシテ條約ニ約定シタル同一ノ事項カ國內ニ向テ遵奉ヲ強ヒラレタルカ故ニ其國家の命令ニ服從スルモノナリ故ヲ以テ條約ハ最多ク場合ニ於テ法律ノ淵源ト爲ルモノナリ

第五 判決例 法律ノ明文ニ從テ國民ノ權利義務ハ明確ナルコトヲ得ルモノナリト雖法律ニ疑アルトキハ裁判官ハ自由ナル判決ヲ與ヘテ之ヲ決定スヘキモノナリ如此判決力多ク集リタルトキハ其後ニ於テ制定セララルル法律ノ淵源ト爲ルコト極多シ是猶條理、慣習等カ法律ノ淵源ト爲ルカ如シ裁判官ハ特別ノ規定アル場合ノ外ハ必他ノ裁判所カ前ニ下シタル判決ニ從ハサルヘカラサルノ義務ヲ負フモノニ非ス然レトモ判決例カ法律ノ淵源ト爲テ法律ヨリ認メラレタル場合ニ之ニ從ハサルヘカラサルハ疑ヲ容レス

第六 宗教 法律ヲ以テ神ノ意思ニ外ナラストシタル時代ニ於テハ宗教ト法律トヲ離ルヘカラサルノ關係ヲ有スルノミナラス場合ニ依テハ之ヲ同一視シタルコトアリ例之「モセス」ノ法典「メニエ」ノ法典「マホメット」ノ法典ノ如キ皆然リ近世ニ於テハ宗教ト法律トヲ分離シタリト雖法律カ宗教ノ威化

ヲ受ケ宗教カ法律ノ淵源ト爲リタルモノ極多シ例之我國ノ家督相續ノ規定ノ如キハ祖先教ノ影響ヲ受ケタルモノナリ又西班牙、埃太利等ノ法律ニ於テ離婚ヲ禁スルノ理由ハ等ク宗教ヲ淵源トシタルモノナリ蓋婚姻ハ神ノ結合シタルモノナルカ故ニ人ノ意思又ハ人ノ力ヲ以テ之ヲ解クヘカラスト云フナリ

第七 外國法 各國ノ交通頻繁ナルニ隨ヒ外國法ノ長所ヲ採リテ自國法ノ短ヲ補フコトハ何レノ國家ト雖甘シテ爲ス所ナリ外國法カ自國法ト爲ルト謂フハ外國法其レ自身カ直ニ自國ニ於テ法律タルノ效力ヲ有スト云フコトニ非スシテ外國法ニ規定スル所ヲ內國ノ國家カ採用シ自國ノ主權ノ力ニ依テ自國法律タルノ效力ヲ與ヘ茲ニ始テ自國ノ法律ト爲ルモノナリ故ニ外國法ハ內國法ノ淵源ト爲ルコト極多シ此點ニ付テハ前章ニ述ヘタル固有法及繼承法ヲ參照スヘシ

第九章 法律ノ制裁

法律ノ制裁トハ或行爲ニ對シテ法律カ加フル所ノ惡報ナリ故ニ善報ハ之ヲ制裁ト曰ハス法律ニ制裁ヲ加フルヲ以テ法律ノ執行ヲ安全ニセンカ爲ナリ然レトモ法律ハ制裁アルカ故ニ行ルモノナリト考フルハ誤解ナリ制裁アル法律ト或行爲ヲ爲シタル者カ事實上其法律ニ服從スルコトヲ免レ又制裁ヲ脱スルコトアリ制裁ナキ法律ト雖個人ノ之ニ服從スルコト極多シ
 法律ノ制裁ヲ大別スレハ公法上ノ制裁ト私法上ノ制裁トノ二種ト爲スコトヲ得公法上ノ制裁ノ最多クハ刑事上ノ制裁ニシテ私法上ノ制裁ノ最多クハ民事上ノ制裁ナリ
 第一 公法上ノ制裁

(一) 死刑 死刑トハ人ノ生命ヲ斷ツコトヲ謂フ死刑ノ目的ハ主トシテ將來ニ於テ斯ル暴惡者カ國家ノ秩序ヲ害スルコトヲ妨クルニ在リ死刑ノ方法ハ殘酷ナラザランコトヲ要ス何トナレハ死刑ノ目的カ犯罪者ヲ社會ヨリ遠ナクルコト即殺戮スルニ在リ犯罪者ニ苦痛ヲ與フルニ非サレハナリ古ニ於テハ磔刑、火炙、鋸引、釜煎、車裂等ノ殘酷ナル方法アリタリト雖今日ニ於テハ絞殺、斷首、銃殺、電氣殺等最盛ニ行ル死後ニ於テ屍體ヲ辱シムルノ刑罰例之梟首ノ如キハ今日ニ於テ刑罰ノ目的上不必要ナル故ニ文明國ニ於テハ之ヲ採用セズ

(二) 身體刑 身體刑トハ身體ニ苦痛ヲ與フル刑罰ナリ今日或國ニ行ル笞刑、杖刑ノ如キ是ナリ此等ノ刑罰ヲ加フル趣意ハ苦痛ヲ與ヘテ犯罪者ヲ懲ラシメ又之ヲ一般ニ公示シテ他人ノ如此犯罪ニ傲ハシコトヲ防クト云フニ在リ古ニ於テハ劓刑ノ如キ身體刑アリタレトモ今日ニ於テハ如此モノナシ苦痛ヲ與フルコトヲ目的トセサル身體刑アリ例之蠲ノ如此刑罰ハ初ハ犯罪者カ他人ニ痛苦ヲ與ヘタル反坐トシテ科シタルモノナレトモ後ニ至テハ該犯罪者カ嘗處罰セラレタルコトアリト謂フヲ世ニ公示シ他人ヲシテ其者ノ前ニ自ラ戒ムルコトヲ目的トスルニ至レリ今日ニ於テハ此特徵ヲ附スルコトヲ否認スル學者頗多シ蓋之カ爲ニ犯罪者ヲシテ自暴自棄ニ陥ラシメ自ラ正業ニ就クコト能ハサラシムルノ處アルヲ以テナリ

(三) 自由刑 自由刑トハ人ノ身體上ノ自由ヲ束縛スル刑罰ナリ自由刑ハ同時ニ身體ニ痛苦ヲ與フルコトアレトモ痛苦ヲ與フルコトヲ趣意トセスシテ自由ヲ拘束シテ犯罪者ヲシテ精神上ノ痛苦ヲ受ケシムルコトト危害ヲ一般社會ニ及サラシメンコトヲ目的トスルモノナリ徒刑、流刑、懲役、禁獄、禁錮、拘留、監視等皆是ナリ此中最後ノ監視ハ舊犯罪ヲ爲シタル者ノ舉動ニ注意シ更ニ罪惡ヲ犯サラシメ

以コトヲ金圖スルニ過キス然レトモ其自由刑タルニ至テハ則一ナリ

(四) 財產刑 財產刑トハ犯罪者ハ財產ヲ沒收スルコトヲ謂フ罰金、科料ノ如キ則是アリ其目的ハ等ク之ニ依テ犯罪者ニ苦痛ヲ與ヘントスルニ在リ然レトモ人ノ貧富ノ程度如何ニ依テ少額ノ罰金、科料等ノ爲ニ苦痛ヲ感セサル者アルヲ以テ富者ニ對シテハ財產刑ハ無用ナリト説ク者アリ於是或論者ハ財產刑ハ國家ノ收入ヲ増スモノナルカ故ニ之ヲ存置スルノ利ナルニ如カスト曰ヘリ古ニ於テハ死刑、身體刑等ニ對シテ金錢ヲ出シテ犯罪者ノ罪ヲ免除シタルコトアリト雖今日ニ於テハ斯ル方法ヲ用ヒス

(五) 名譽刑 名譽刑ニハ名譽ヲ中止スルモノト名譽ヲ剝奪スルモノトノ二種アリ剝奪公權、停止公權、華族ノ禮遇停止、位記勳章ノ剝奪、懲戒免官ノ如シ此刑ヲ科スル趣意ハ加害者ヲシテ社會ニ對シ信用ヲ失ハシメ之ニ因テ苦痛ヲ感セシムルコトト併セテ一般社會ヲシテ害毒ヲ受ケサラシメントスルニ在リ

第二 民法上ノ制裁

(一) 損害賠償 損害賠償トハ不法行為ヨリ生シタル損害ニ對シ一定ノ償ヲ爲スモノヲ謂フ損害賠償ニハ金錢ヲ以テスルモノト貨物ヲ以テスルモノトアリ其孰ヲ問ハス凡テ加害者カ判決ノ結果トシテ被害者ニ引渡スモノヲ謂フ故ニ賠償ハ罰金ニ非ス賠償ノ額ハ初ヨリ確定スルモノト不確定ノモノトノ二種アリ後者ハ重ニ名譽毀損ノ場合ニ生スルモノナリ實際上金錢ニ見積ルコトヲ得ヘカラサル名譽ノ毀損例之排毀ノ如キモノニ對シ金錢ヲ以テ賠償ヲ爲サシムルコトハ不當ナリトハ佛蘭西主義ノ採ル所ニシテ英國主義ハ反之金錢ニ見積ルコトヲ得サル損害ト雖金錢上ノ賠償ヲ爲サシムルコトヲ得ヘシセリ損害賠償ノ一種トシテ過急約款ナルモノアリ過急約款トハ契約ノ當事者カ豫賠償ニ關スル取極ヲ爲シ

タル契約ヲ附ア
(二) 復権 復権トハ有權者カ他人ノ爲ニ妨害セラレタル權利行使ノ回復ヲ謂フ例之或物品ノ所有者カ其物品ヲ強盜ヨリ奪ハレタル場合ニ之カ返付ヲ受クルカ如シ不當利得ニ對スル回復、詐害行爲ノ廢罷訴權、原狀回復ノ如キモ亦皆之ニ屬ス
(三) 直接履行 直接履行トハ義務者ヲシテ義務ノ履行ヲ爲サシムルコトヲ謂フ直接履行ハ損害ノ賠償ヲ爲スモ救済ヲ受クルコト能ハサル性質ノモノニ對シテ爲スモノナリ例之書家カ揮毫ノ約束ヲ爲シナカラ之ヲ履行セザリシトキノ如キ俳優カ演劇ヲ爲スノ約定ヲ爲シナカラ之ヲ履行セザリシトキノ如キハ金錢ヲ以テスルモ償フコト能ハサルヲ以テ直接ノ履行ヲ爲サシムルナリ
(四) 或行爲ノ中止又ハ廢止並ニ或行爲 或行爲ノ中止トハ例之隣家ノ井ヨリ水ヲ引カントスル工事ヲ中止セシムルカ如シ廢止トハ既ニ築キタル塙ヲ撤去セシムルカ如シ終ニ或行爲ヲ爲サシムルコトハ新聞紙ニ謝罪ノ廣告ヲ爲サシムルカ如シ廣ク行爲ト言フ中ニハ勿論行爲ヲモ含ムモノナリ例之或商賈ヲシテ或顧客ニ商品ヲ賣ラサシムルカ如シ
(五) 無効 無効トハ或行爲ニ法律上ノ效力ヲ發生セシメサルコトヲ謂フ詳言スレハ法律上該行爲ノ存在ヲ認メサルモノナリ法律ノ禁シタル行爲ヲ爲シタル場合ノ如キハ多クハ之ヲ無効トス例之有夫ノ婦カ爲シタル婚姻ノ如キ強暴ヲ加ヘテ他人ヨリ金錢ヲ借入レタル場合ノ如シ
(六) 取消 取消トハ或行爲カ取消權ヲ有スル者ニ依テ取消サレタル以後ハ法律上ノ效力ヲ有セサルモノナリ謂フ即成立ヨリ取消ニ至ル迄ハ有效ナレトモ取消ヨリ以後ハ法律上ノ效力ノ存セサルモノナリ例之父母ノ承諾ナクシテ爲シタル婚姻カ父母ノ取消ニ因テ其效力ヲ失フカ如シ

第十章 法律ノ變更及廢止

法律ノ變更及廢止ハ本家法律ノ效力ノ問題ナリ故ニ茲ニハ唯法律カ效力ヲ失フコトニ付テ説明ヲ加フルノミ廢止トハ其法律ヲシテ全ク效力ヲ失ハシムルモノヲ謂ヒ變更トハ廢止シテ後ニ直ニ之ニ代ル所ノ法律ヲ出スモノヲ謂フ故ニ嚴格ニ論スレハ變更モ亦狭キ意義ニ於ル廢止ナリ
法律ノ廢止ヲ大別スレハ國家ノ意思ニ依ラサルモノト國家ノ意思ニ依ルモノトアリ國家ニ廢止ノ意思ナキモ法律ニ定メタル事項カ消滅シタルトキハ之ヲ定メタル法律ハ當然其效力ヲ失フ例之臺灣ニ關シテ定メタル法律ハ臺灣カ地震ノ爲ニ海中ニ陷落スルト同時ニ消滅スルカ如ク戰時ヲ限トシテ制定シタル法律ハ戰爭ノ終了ト共ニ消滅スルカ如ク鼠買上ノ法律カ鼠ノ悉跡ヲ絶テタルト共ニ消滅スルカ如シ

國家ノ意思ニ因ル廢止ニハ有効期間ヲ定メタルモノト然ラサルモノトアリ前者ハ其期間ノ經過ト共ニ當然消滅スルモノナレトモ後者ハ國家カ廢止スルノ意思表示ヲ爲ササルトキハ永久ニ有效ナルモノナリ有効期間ヲ定メタルモノノ例ヲ舉グレハ一定ノ年限間地租ヲ増加スル法律ノ如シ
法律ノ廢止スル方法ニ二種アリ一ハ明示ノ廢止ニシテ他ハ暗黙ノ廢止ナリ明示ノ廢止トハ國家カ法律ヲ廢止スルコトヲ或形式ニ依テ表示スルコトヲ謂ヒ暗黙ノ廢止トハ前法ヲ廢止ストノ意思表示ヲ爲ササルモ前法兩立セザル新法ヲ發布シタル場合ニ生スルモノナリ此場合ニ於テ「後法ハ前法ニ勝ツ」トノ原則ニ依リ前法ハ廢止セラレタルモノト看ルヘシ而シテ其相兩立セザル部分カ單ニ一部分ニ過キザルトキハ前法ノ一部分ノミノ暗黙廢止ト爲リ前法ノ全部ニ涉ルトキハ全部ノ暗黙廢止ト爲ル但後ノ普通

法ハ前ノ特別法ノ廢止ヲ當然ニ來スモノニ非ス

第十一章 法律ノ執行

憲法第六條ニ「天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス」トアルカ故ニ執行カ天皇ノ權内ニ在ルコト極テ明ナリ然リト雖天皇自ラカ執行ヲ爲スモノニ非スシテ天皇ハ行政官及司法官ナル機關ニ依テ執行ヲ爲サシムルモノナリ而シテ行政官ト司法官トハ法律ヲ執行スルコトニ關シテ互ニ特ニ委任セラレタル權限ヲ有スルカ故ニ此權限ヲ侵スコトナキヲ必要トス此權限ヲ侵サザラシメンカ爲ニ權限爭ノ裁決ヲ爲ス機關ヲ設ケル國家多シ

裁判官カ法律ヲ執行スルトハ法文ノ規定ニ基キテ當事者ノ爭ヲ決シ又犯罪者ヲ處罰スルコトナリ故ニ如何ナル爭ヲ決スヘキヤ又如何ナル犯罪ヲ處罰スヘキヤハ悉法文ノ規定ニ一任セザルヘカラス裁判官カ裁判ヲ爲スニ關シテ守ルヘキ原則ハ左ノ如シ

第一 裁判ハ裁判官カ自己ノ名ヲ以テスルコトヲ得ルモノニ非スシテ天皇ノ名ニ於テ行フヘキモノナリ(憲五七條)而シテ其裁判ヲ爲スニハ一定ノ形式ヲ踐マサルヘカラス例之合議裁判ノ場合ニ於テハ必ス合議ヲ以テ裁判セザルヘカラサルカ如シ又判決ニ一定ノ書類ヲ要スルカ如ク書記ノ立會ヲ要スルカ如シ

第二 裁判官ハ請求ナクシテ裁判ヲ爲スコトヲ得ス、民事ニ付テハ原告、刑事ニ付テハ檢事ノ請求ヲ待タ始テ裁判ヲ爲スヘキモノナリ(刑訴一八四條)裁判官ハ又請求ナクシテ裁判ヲ爲スコトヲ得サルノミナラス請求セラレサル事ニ付テ裁判ヲ爲スコトヲ得ス加之請求セラレタル事件ノ一部分ニ付テモ亦裁

判ヲ爲スコトヲ得ス

第三 裁判官ハ法律カ不正ナリトノ理由ニ依テ裁判ヲ下スコトヲ拒ムコト能ハス、凡テ國家カ適法ニ制定シタル法律ハ悉法律ナリ「惡法モ亦法ナリ」ト謂フハ即是ナリ若惡法ナルカ故ニ裁判官ハ之ヲ適用セスト言ハハ是裁判官ヲシテ立法權ヲ侵サシムルモノナリ裁判官ハ法律ヲ執行スルコトヲ任務トスルモノナルカ故ニ惡法ナリトノ理由ヲ以テ裁判ヲ下スコトヲ拒ムコト能ハス

次に裁判官ハ或法律カ違法ナリトノ理由ニ依テ之ヲ適用ヲ拒ムコト能ハス何トナレハ法律ノ實質カ違憲ナルヤ否ヤ違法ナルヤ否ヤハ立法權ヲ以テノミ之ヲ決スルコトヲ得ルモノニシテ若裁判官ニ法律ヲ審查シテ其適法ナルヤ否ヤヲ決スルノ權ヲ與フトセハ是則裁判官ヲシテ其權限ヲ超エテ立法權ニ容喙セシムルモノナレハナリ然レトモ或法律カ法律タルノ形式ヲ踐マザリシトキハ之ヲ法律ト看ルコト能ハサルヘキカ故ニ裁判官ハ當然之カ適用ヲ拒ムコトヲ得ヘシ蓋斯ル法律ハ之ヲ法律ト稱スルコトヲ得サルモノナレハナリ形式ニ違ヒタル法律トハ例之國務大臣ノ副署ヲ要スヘキモノニ是ナカリシカ如キ御名御璽ヲ捺スヘキモノナルニ之ナカリシカ如キ議會ノ協賛ヲ經ヘキモノナルニ之ヲ經サリシモノノ如キ即是ナリ此事ニ關シテハ形式ニ違ヒタル場合ニノミ法律ノ適用ヲ拒絶スルコトヲ得ヘシト云フ

ニ歸ナルナリ

第四 裁判官ハ法律ニ明文ナキヲ理由トシテ裁判ヲ爲スコトヲ拒絶スヘカラス、若明文ナキヲ理由トシテ裁判ヲ拒絶スレハ之カ爲ニ人民ノ權利ヲ妨害シ生命、身體、財産ノ安固ヲ缺クノ虞アリ此事ハ獨民事ニ於テ然ルノミナラス刑事ニ付テモ亦同一ナリ刑法第二條ニ「法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖

モ罰スルコトヲ得ス」トアルハ罰スルコトヲ得タルモノニシテ裁判スルコトヲ得スト規定シタルモノニ非ス故ヲ以テ裁判官カ若法律ニ明文ナシトノ事ヲ理由トシテ刑事ニ付テモ民事ニ付テモ裁判ヲ爲スコトヲ拒絶シタルトキハ必一定ノ制裁ヲ受クルモノナリ我刑法第二百八十三條ノ規定ノ如キハ即是ナリ

次に行政官ノ法律ヲ執行スル事ニ關シ原則ト爲スヘキモノヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 行政官ハ法律ノ執行ヲ拒否スルノ權利ヲ有セス是裁判官カ裁判ヲ拒ムノ權利ヲ有セサルト同一ナリ

第二 行政官ハ請求ノ有無ニ拘ラス法律ヲ執行スヘシ何トナレハ主權者ハ國民力之ヲ守ルコトヲ欲スルト否トヲ問ハス法律ノ執行ヲ爲スヘキコトヲ行政官ニ命令シタルモノナレハナリ

此他一國ノ法律又ハ裁判ヲ他國ノ行政官カ執行スヘキヤ否ヤハ國際法ノ問題ニ屬スルヲ以テ茲ニ説カス

第十二章 法律學ノ分類

法律學ヲ分類スルニ土地ヲ基トスルコトヲ得ヘク又時ヲ基トスルコトヲ得ヘク又法律現象ノ範圍ヲ基トスルコトヲ得ヘク又研究ノ主義、方法ヲ基トスルコトヲ得ヘシ

第一 土地ヲ基トシタル分類

此分類法ニ依レハ法律ヲ一般法學、局地法學ノ二種ト爲スコトヲ得一般法學トハ世界萬國ニ通スル法律ノ學問ヲ謂ヒ局地法學トハ一國又ハ一地方ニ限ル法律ノ學問ヲ謂フ此區別ハ英國ノ學者「ベンザム」

「オースチン」等ノ採リタル所ニシテ各國ノ法律ニ共存スル通素ヲ見出シテ法律學ヲ研究スルニ極テ必要ナルモノナリ

第二 時ヲ基トシタル分類

此分類ニ依レハ法律ヲ現行法學、非現行法學ノ二種ト爲スコトヲ得「ベンザム」ノ所謂古代法學現在法學ノ區別是ナリ此分類ハ依テ以テ將來ニ於ル立法ヲ爲スニ極テ重要ナルモノナリ左レハ此分類ニ依リテ管現在及過去ノ法律ヲ論究スルニ止マルノミナリト考フルハ不當ナリ

第三 法律現象ノ範圍ヲ基トシタル分類

此分類ニ依レハ法律學ヲ普通法學、特別法學ノ二種ト爲スコトヲ得普通法學トハ法律現象ノ總テヲ基トシテ研究スルモノナリ例之法學通論、法律哲學ノ如キ即是ナリ反之特別法學トハ特別ノ法律現象ニ付テノミ研究スルモノヲ謂フ例之刑法上ノ權利カ如何ナル性質ヲ有スルモノナルカ行政法上ノ義務カ如何ナル性質ヲ有スルモノナルカ民法ノ賣買カ如何ナル性質ヲ有スルモノナルカヲ研究スルカ如シ

第四 法律研究ノ主義ニ依ル分類

(甲) 自然法學

自然法學說ヲ採ル者ハ宇宙ノ間ニ先天的ニ法律上ノ原理原則ナルモノ存在シ立法者カ法律ヲ制定スルト謂フハ自然法ノ命スル所ニ從テ之ヲ制定スルニ限ルト云フナリ隨テ學者ハ自然ニ存在スル原理原則ヲ研究スヘシト謂フニ在リ尤自然法學ヲ説ク者ト雖必シモ同一ニ非ヌ之ヲ分テハ大體ニ於テ左ノ三種ト爲スコトヲ得ヘシ

(イ) 純粹自然法學說 純粹自然法學說中ニモ種種ノ細派アリ例之神學派ノ如キハ其一ニ屬ス此學派ノ

唱フル所ハ立法者ハ神ノ意思ヲ承ケテ法律ヲ制定スルモノニシテ神ノ意思以外ニ法律ナシト謂フナリ
神學派ニ反對スル純粹自然法學說ハ法律カ神ノ命令ニ由ルモノナリト謂フコトヲ認スレテ唯漠然自然
法ナルモノアリト云フナリ要スルニ純粹自然法學說ハ人間ノ意思、身體等以外ニ自然ニ法律カ存在ス
ルモノナリト謂フナリ

(ロ) 理性學說 此學說ニ依レハ人間ニ理性ナルモノ存在シ是非曲直ヲ分ツカ故ニ理性ノ命スル所ニ從
ヒテ行フヘキハ之ヲ行ヒ行フヘカサルモノハ之ヲ行ハサルヘシト謂フナリ

(ハ) 人性學說 此說ニ依レハ人間ノ性質ハ先天的ニ法律ヲ左右シ得ヘキモノト謂フナリ故ニ此說ノ理
性說ト異ナル所ハ人性カ總テ法律ヲ左右シ得ヘキモノト云フノ點ニ在リ

(乙) 註釋法學

註釋法學トハ或法律ノ文字意義ヲ解釋シテ之ニ依テ其間ニ法律ノ原理原則ヲ發見セントスルモノナリ
古代ヨリ現時ニ至ルマテ荷法律ノアラン限リ註釋法學ハ常ニ存在スルモノナレトモ單ニ註釋ノミヲ力
メテ他ノ方面ヨリ解釋スルコトヲ怠ルハ不當ナリ日本ニ於テモ徳川時代ニ於テ解釋法學ヲ專トシタル
コトアリ百箇條ノ解釋ニ汲汲タラシトキノ如キ即是ナリ歐羅巴ニ於テ註釋法學ノ最盛ナリシハ第十世
紀ノ初ヨリ第十二世紀ノ末ニ至ル迄ニテアリキ註釋法學ノ缺點ヲ舉ケレハ徒ニ文字ノ末ノミニ拘泥シ
テ法律ノ原理原則ヲ研究スルヲ怠ルコト及法律ノ實質の價值如何ヲ批評スルコトヲ忽ニスルコトニ在リ其
他法律ノ歷史のニ研究スルヲ怠ルカ如キモ亦註釋法學ノ一ノ缺點ナリ要スルニ註釋法學ノ盛ナルハ法
律ノ進歩ヲ妨タルモノナリ例之佛蘭西ニ於テ那破翁一世カ那破翁法典ヲ作リタル結果トシテ學者モ人
民モ一般ニ法理ノ研究ヲ怠リ唯法文ノ解釋ノミヲ力メタルカ爲ニ却テ法律學ノ進歩ヲ妨ケタルノ形跡

アリ

(丙) 分析法學

分析法學トハ法律ノ要素ヲ取テ之ヲ分析シ其原理ヲ見出シテ法律ヲ研究スルモノナリ例之賣買トハ如
何ナルモノナルカラ研究セシカ爲ニ賣買ヲ分析シテ當事者タル賣主ト目的物トアリテ一方ノ當事者タ
ル賣主カ他方ノ當事者タル買主ヨリ金錢ノ支拂ヲ受ケテ目的物ノ所有權ヲ移スル意思アルコトヲ要ス
ルカ如シ

(丁) 歷史法學

歷史法學トハ法律上ノ現象ヲ沿革のニ調査シテ之ニ依テ法律ノ原理原則ヲ究メントスルモノナリ蓋現
在ノ現象ノミヲ觀テ或事ヲ判定スルトキハ偏頗ニ流レ易キカ故ニ之ヲ既往ノ事實ニ徴シテ研究セハ始
テ完全ナル原理原則ヲ見出シ得ヘシト云フナリ此說ヲ唱ヘタル者英吉利ノ「ペーコン」、佛蘭西ノ「ボ
ーダン」、獨逸ノ「ライプニッツ」等ナリ獨逸ニ於テ法典編纂ヲ爲スヘキヤ否ヤニ關シ嘗テ起リタルハ即
歷史法學說ト非歷史法學說トノ衝突ニテアリシナリ

(戊) 比較法學

比較法學トハ世界各國ニ在存スル法律或ハ一國內ニ在ル各地方ノ法律ヲ對照シ依テ以テ法律ノ原理原
則ヲ研究セントスルモノヲ謂フ例之憲法ヲ研究セントスル者カ支那及露西亞ノ如キ專制君主國ノ憲法
ト日本及英吉利ニ於ルカ如キ立憲君主國ノ憲法ト佛蘭西及亞米利加合衆國ノ如キ共和國ノ憲法トヲ比
較シテ其各者ニ通スル原理原則ヲ見出サントスルカ如シ比較法學ノ研究ヲ唱ヘタル者ハ伊太利ノ「ビ
コー」ニシテ之ヲ實際ニ行ヒタル者ハ佛蘭西ノ「モンテスキエ」ナリ古ニ於テ法律ノ比較的研究ノ行レ

サリシ原因ハ交通ノ不便ナリシカ爲ナリ然ルニ汽車、汽船等ノ發明アリシヨリ内外ノ往來頻繁ト爲リ通商貿易隆盛ナルニ至リ其他ノ學問等ク法律學ノ比較的研究モ亦漸盛ナルニ至リ比較法學會ノ如キモノスラ設ケラルルニ至リタリ

比較法學ヲ別テ左ノ三種トス

(イ) 法系別比較法學 法系別比較法學トハ世界各國ノ法律ノ發生シタル源ニ遡リ其各系統ニ如何ナル法理上ノ差異アルヤヲ對照シテ研究スルモノヲ謂フ

(ロ) 國家別比較法學 國家別比較法學トハ各國特有ノ風俗、慣習、氣候等ノ差異ヨリ觀テ研究スルモノヲ謂フ

(ハ) 人種別比較法學 人種別比較法學ハ獨逸ノ學者「ボスト」、英吉利ノ學者「メイ」等ノ盛ニ唱道シタル所ナリ古ノ法律ハ多クハ屬地主義ニ非スシテ屬人主義ナリ所謂屬人トハ國家ニ屬スルモノニ非スシテ人種ニ屬スルモノナリシカ如シ然ルニ生存ノ必要上國家カ形作ラルルニ至テ「メイ」ノ言フカ如ク法律ハ人種法ノ界ヲ脱シテ國家法ニ移リタルモノナリ故ヲ以テ法律ノ最遠キ本源ヲ探ラント欲セハ須法律ノ根本タル人種ニ遡テ之ヲ比較的研究セサルヘカラス

第十三章 法律ト道德及宗教トノ關係

古ニ於テハ法律ト道德トノ間ニ區別ヲ設ケス兩者共ニ國家及其他ノ國體又ハ商人ノ存在ヲ安全ニシテ國家ノ秩序ヲ維持センカ爲ニ必要ナルモノト認メラレタリ故ニ例之古ノ羅馬ニ於テ「プラト」シセロ」ノ如キ哲學者ハ兩者ノ間ニ何等ノ區別ヲモ認メサリキ此區別カ漸學者間ニ認識セラルルニ至リタ

ルハ「スピノザ」ブ「フエンドルフ」以後ニ在リ今兩者ノ關係如何ニ付テ重ナル學說ヲ舉ケレハ左ノ如シ

第一說 此說ニ依レハ法律ト道德トハ全ク別物ナリ法律ハ總テ主權者ノ意思ヨリ來ルモノナレトモ道德ハ則然ラス道德ニ適シタル法律モ道德ニ背キタル法律モ共ニ法律タルヲ失ハス法律カ道德ニ適合スルコトアルモ之ヲ以テ兩者カ同一ノモノナリト稱スルコト能ハスト謂フニ在リ

第二說 此說ハ等ク兩者ノ發生シタル本源ヨリ觀察シテ以テ兩者ノ相異ル所ヲ示スモノナリ即法律ハ人ノ作リタルモノニシテ隨テ人ノ意思ヲ以テ其存廢ヲ自由ニスルコトヲ得ヘシト雖道德ハ自然ニ存在スルモノナルカ故ニ人間ノ意思又ハ人間ノ力ヲ以テ之ヲ左右スルコトヲ得スト謂フニ在リ

第三說 此說ニ依レハ道德ハ内部ノ強制ニシテ法律ハ外部ノ強制ナリト謂フニ在リ蓋人ノ考ヲ抑制スルモノハ道德ニシテ行爲ヲ抑制スルモノハ法律ナリト謂フノ意味ナリ故ニ此說ニ依レハ他人ノ物ヲ盜マサルヘシトノ考ヲ起サシムルモノハ道德ニシテ他人ノ物ヲ盜ムコトナカラシムルモノハ法律ノ力ナリ

第四說 此說モ亦兩者ノ目的ヨリ區別ヲ立ツヘシトシタルモノニシテ法律ハ消極的ノ目的ヲ有シ道德ハ積極的ノ目的ヲ有スルモノナリ即法律ハ人ヲ危害セサルコトヲ趣意トシ道德ハ人ヲ益スルコトヲ目的トスルト謂フナリ然レトモ法律ニモ積極的ノモノアリ道德ニモ消極的ノモノアルカ故ニ此說ハ必シモ正確ニ非ス

第五說 此說ハ法律カ何人ニ對シテ效力ヲ有シ道德カ何人ニ對シテ效力ヲ有スルカノ點ヨリ區別シタルモノニシテ法律ハ神ヨリ一箇人ニ下シタル命令ニシテ道德ハ神ヨリ公衆ニ下シタル命令ナリト謂フ

ナリ然レトモ法律ニモ公衆ノ守ルヘキモノアリ道徳ニモ一箇人ノ從フヘキモノアルカ故ニ此區別ノ標準モ亦正鵠ヲ得タルモノニ非ス

第六說 法律ハ人ヲ國民トシテ支配シ道徳ハ人ヲ箇人トシテ支配ストノ說ナリ此說ノ缺點ハ道徳ニモ或國家ヲ限リ或社會ヲ限リタルモノアルコトヲ忘却シタルノ點ニ存ス道徳ト雖箇人ニ對シ國民トシテ支配スルモノアリ又法律ト雖何レノ國ノ國民ナルヤヲ問ハス一般ニ支配スルモノアリ例之民法ノ如キハ人ヲ國民トシテ支配スト謂フヨリハ人ヲ箇人トシテ支配スト云フノ優レルニ如カサルナリ

第七說 此說ハ法律ハ時ト場所トニ依テ變更スルモノナレトモ道徳ハ永久ニ又何レノ處ニ於テモ一定不易ナリト謂フニ在リ

第八說 此說ハ法律及道徳ノ行ル理由ヨリ區別ヲ立テタルモノニシテ法律ハ強制力ニ依テ行ルモノナレトモ道徳ハ強制力ニ依テ行ルモノニ非スト謂フナリ然レトモ人民カ法律ニ服從スルハ多クハ強制ヲ受クルカ爲ニ非シテ其他ノ理由ニ由テ然ルモノナリ加之法律ト雖時トシテ強制力ヲ加フルモ實際行ルルコト能ハサル場合アルモノナリ是故ニ「イーリング」ノ如キハ法律ハ或場合ニ於テ強制シ得ヘキモノナリト曰ヘリ

卑見ヲ以テスレハ法律、道徳共ニ其目的ハ同一ニシテ團體ノ秩序ヲ保タンカ爲ナリ然レトモ兩者ノ異ル所ハ唯其發生スル所ノ形式ノ點ニ在リ再言スレハ國家カ法律ヲ發布スルニ必要ナル條件ヲ定メ此條件ヲ充シテ法律トシ發布シタルモノハ法律ナレトモ道徳ニハ發布ノ形式ヲ履ムコトヲ要セス故ニ其實質ニ至テハ法律カ道徳ト相一致スル場合アリ又相一致セサル場合アリ隨テ道徳トシテ定リタルコトヲ國家カ法律タルノ形式ヲ備ヘテ制定シタルトキハ直ニ法律ト爲ルモノナリ

宗教ハ信仰ヲ基トスルモ法律ニハ信仰ノ分子ナシ是兩者ノ異ル所ナリ古ニ於テハ宗教一致ナルコトアリテ宗教ト政治、法律トヲ混淆シタルコトアリシモ今日ニ於テハ宗教ハ政治及法律ト相離ルニ至レリ又古ニ於テハ宗教モ法律モ共ニ神ヨリ出テタルモノト考ヘタレトモ今日ニ於テハ法律ハ神ノ作リタルモノニ非ストノ說一般ニ行ル古ニ於テ法律ハ神ヨリ作ラレタルモノト言ヒシハ多クハ法律ヲ永久ニ遵奉セシメントスル立法者ノ政策ニ出テタルニ過キス

第十四章 權利

權利ハ法律ノ製作物ナリ法律ナキ所ニ權利ナシ自然ノ權利ト謂フカ如キ天賦人權ト謂フカ如キ男女同權ト云フカ如キハ法律上ヨリ觀察シタル權利ニ非ス抑權利ト法律トハ全ク同時ニ生スルモノナリ何トナレハ法律カ或事ニ付テ或人ニ保護ヲ與フルトキニ於テ始テ之ヲ或人ノ權利ト稱スルコトヲ得ルモノハナリ故ニ外國ノ語ニ於テハ多クハ權利ナル文字ト法律ナル文字ト同一ナリ而シテ權利ト義務トハ亦同一ナリ唯權利ハ主觀的ノ觀察ヨリ生シタルモノニシテ義務ハ客觀的ノ觀察ヨリ生シタルモノナリ

權利ノ實質ニ付テハ從來異リタル三箇ノ學說アリ

第一說 權利自由說 此說ニ依レハ權利トハ法律カ人ノ自由ニ行動スル所ノ限界ヲ定タルモノナリトシ人カ與ヘラレタル自由ノ範圍内ニ於テ行動ヲ爲スハ即權利ニシテ此範圍ヲ超エテ行動ヲ爲スハ即非權利ナリトスルニ在リ

第三說 權利利益說 此說ハ英國ノ多數ノ學者ノ唱フル所ニシテ權利トハ法律カ保護スル利益ナリト

謂フナリ然レトモ利益トハ何ヲヤト云フコトニ關シ疑ナキ能ハス於是或ハ精神上ノ快樂ヲ得ルヲ以テ利益ナリト謂ヒ或ハ物質上ノ快樂ヲ得ルヲ以テ利益ナリト云フモ利益ノ本質ヲ明ニスルコト能ハサルナリ

第三說 權利ハ力ナリト説 此説ニ依レハ法律ハ或團體中ノ強者ノ作リタルモノニシテ強者カ其力ニ由テ與ヘタルモノ即權利ナリト謂フナリ權利カ或人ノ力ヲ制限スルコトモ亦力ナリ事實上ノ暴力ヲ排斥スルコトモ亦力ニシテ其力自身カ一箇ノ權利ナリト云フナリ權利カ力ナリト云フ説ヲ更ニ小分シテ權利ハ神ノ與ヘタル力ナリト謂フ説ト主權者ノ與ヘタル力ナリト謂フ説ト人民ノ總意ヨリ出テタル力ナリト謂フ説トノ三箇ト爲ス

第一節 權利ノ意義

權利トハ法律ノ保護ニ因テ生スル所ノ行為、不行爲ノ強制ノ本源ニシテ、自己以外ノ人又ハ團體ニ對抗スルモノナリ今此定義ヲ分解シテ説明スレハ左ノ如シ

第一 權利ハ法律ノ保護ニ因テ生スルモノナリ 法律以外ノ權利ハ茲ニ所謂權利ニ非ス

第二 權利ハ強制ナリ 是權利カ法律ノ保護ニ因テ生スルノ結果ナリ

第三 權利ハ行為又ハ不行爲ノ強制ナリ 行為及不行爲ニハ多クハ意思アルコトヲ要スレトモ意思ノ附帶セサル行為又ハ不行爲ヲモ強制スルコトアリ

第四 權利ハ自己以外ノ人又ハ團體ニ對スルモノナリ 故ニ權利ハ物自身ニ對スルモノニ非ス而シテ權利カ人ニ對スル關係ハ或特定ノ人ニ對スルモノト一般ノ人ニ對スルモノトヲ問フコトナシ古キ説ニ

從ヘハ權利ハ人ニ對スルモノト物ニ對スルモノトノ二種アリテ之ヲ對人權、對物權ト稱タリ然レトモ人ト物トノ關係ハ權利ノ關係ニ非ス或人カ物ニ對シテ所有權ヲ有スト謂ヒ賃借權ヲ有スト謂ヒ特許權ヲ有スト謂フカ如キハ其物其レ自身ニ對スル權利ニ非シテ他ノ人ニ對スル權利ヲ意味スルモノナリ 權利ヲ保護スル手段ハ普通ノ場合ニ於テ訴訟ナリ訴訟トハ權利ノ侵害ニ對シ裁判所ノ力ニ依リテ權利ノ力ヲ喚起スルコトヲ謂フ 權利ヲ保護スルニハ法律ノ力ヲ籍ルコトヲ例トスルモ時ニ自助ノ力ヲ用フルヲ許スコトアリ但自助ノ力ヲ用フルモ亦法律ノ力ニ依リタルノ結果ナラスンハ非ス

第二節 權利ノ種類

第一 主たる權利、從たる權利 主たる權利トハ獨立ニ存在スル權利ニシテ從たる權利トハ他ノ權利ニ附帶シテ生スル權利ナリ此區別ヲ設クルノ必要ハ權利ノ效力如何ヲ見ルノ點ニ在ス例之債權ハ主たる權利ニシテ質權ハ從たる權利ナリ官吏ト爲ルノ權利ハ主たる權利ニシテ官吏カ俸給ヲ受クル權利ハ官吏タルニ附帶スル從たる權利ナリ從たる權利カ消滅スルモ主たる權利ハ之カ爲ニ當然消滅スルモノニ非ス然レトモ主たる權利ノ消滅スルト其ニ從タル權利ハ當然消滅ス

第二 公權、私權 此區別ハ何人カ公權ヲ有シ又私權ヲ有スルコトヲ得ルヤノ實益ノ必要ヨリ出ツルモノナリ例之民法カ外國人ニ私權ヲ享有スルコトヲ規定スルモ或權利カ公權ナリヤ將私權ナリヤ區別スルコト能ハサレハ之ヲ外國人ニ與ヘテ至當ナリヤ否ヤニ判然タル決定ヲ與フルコト能ハサルカ如シ於是公權、私權ヲ區別スル標準ニ關シテハ由來數箇ノ學說アリ今其最重要ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

(甲) 公法ニ於テ規定シタル權利ハ公權ニシテ私法ニ於テ規定シタル權利ハ私權ナリト説 此説ニ依
レハ例之民法上ノ權利ハ公權ニシテ民法上ノ權利ハ私權ナリト云フナリ然レトモ何カ公法ニシテ何カ
私法ナリヤ決定セザレハ此學說ハ成立スルコト能ハサルヘシ尙此區別ノ標準力甚當ヲ得サルノ點ア
リ何トナレハ憲法ノ如キ公法ニ於テ人カ所有權ヲ侵サレタルノ權利、居宅ヲ侵サレタルノ權利ノ如キ
私權ニ關スル事ヲ定ムルモノアリ又破産法ノ如キ私法ニ於テ詐欺破産ヲ爲シタル者ニ公權ノ停止又ハ
剝奪ヲ命スルコトヲ規定スルコトアレハナリ

(乙) 公權トハ國家ト人民トノ間ノ權利ニシテ私權トハ人民相互間ノ權利ナリト説 然レトモ人民ト
國家トノ間ノ關係ニシテ私權ニ關スルモノアリ又人民相互間ノ關係ニシテ公權ニ關スルコトアルカ故
ニ未タ此説ヲ以テ完全ナル區別ノ標準ナリト謂フコトヲ得ス

(丙) 此説ニ依レハ公權トハ國家カ人民ニ對シ國家ノ一員トシテ生活スルコトニ關シテ與ヘタル權利ニ
シテ私權トハ國家カ如何ナル國ノ人タルニ拘ラス平等ニ與ヘタル權利ヲ謂フ詳言スレハ私權トハ何國
ノ人民ナリト謂フコトヲ特別ノ條件トシテ與ヘタル權利ニ非ス

第三 特定人ニ對スル權利 一般人ニ對スル權利(或ハ對人權、對世權トモ云フ) 例之賣主カ代價ヲ買
主ヨリ受タルノ權利ノ如キハ特定人ニ對スル權利ナリ反之自己ノ所有權ヲ侵サシメタルノ權利、自己
ヲ侮辱セシメタルノ權利ノ如キハ總テ一般人ニ對スル權利ナリ特定人ニ對スル權利ハ同時ニ一般人ニ
對スル權利ト爲ル然レトモ一般人ニ對スル權利ハ必シモ特定人ニ對スル權利ト爲ルモノニ非ス此區別
ヲ設クルノ實益ハ人カ何人ニ對シ或行爲又ハ不行爲ヲ強フルコトヲ得ルヤノ點ニ在リ

第四 普通權、特別權 普通權トハ一般ノ法律ニ由テ總テノ人ニ與ヘラレタル權利ニシテ特別權トハ

特定ノ法律ニ由リ或人ヲ限テ與ヘラレタル權利ナリ例之何人モ自己ノ生命ヲ害セラレタル權利ヲ有ス
ルカ如キハ普通權ニシテ或學生ハ徵兵猶豫ノ權利ヲ有スト謂フカ如キ、或爵位アル者ハ一定ノ手續ヲ
履ミタル後ニ非レハ拘引セラルルコトナシト謂フカ如キハ皆特別權ナリ

第五 箇別權、共同權 箇別權トハ單獨ナル人ニ屬スル權利ニシテ共同權トハ唯一ナル目的物ニ對シ
テ多數ノ人カ同時ニ有スル權利ナリ例之或人カ鉛筆ヲ所有スルカ如キハ箇別權ナリ甲ト乙トカ一箇ノ
家屋ノ上ニ共有權ヲ有スルカ如キ、著者ト書店トカ共通ニ或書籍ノ版權ヲ有スルカ如キハ共同權ナリ
此區別ハ或權利ヲ如何ニ行使シ如何ニ處分スヘキヤノ實用上ヨリ觀テ必要ナルモノナリ

第三節 權利ノ主體

權利ノ主體ハ人ナリ如何ナル者ニ權利ヲ享有セシムルヤハ國家ノ任意ナリ故ニ人トハ國家カ認メテ權
利ノ主體ト爲シタルモノナリト謂フヲ至當トス此點ヨリ觀テ人トハ何ン、何時ヨリ人ナリヤ何處ニ於
テ人ナリヤ研究セサルヘカラス

人ヲ分テ自然及法人トス自然人ハ必シモ常ニ法律上ノ人ニ非ス古ニ於テ認メラレタル奴隸ノ如キ即是
ナリ又古ニ於テハ外國人ハ自然人ナルニ拘ラス內國ニ於テ之ヲ人ト視サリシカ如キコトアリキ最今日
ノ法律ニ於テハ自然人ヲ權利ノ主體トセサルコトナシ

次ニ胎内ニ在ル者ハ人ニ非ス但各國ノ法律ニ於テ或特種ノ事項ニ關シ胎内ノ子ヲ既ニ生レタルモノト
看做シテ之ニ人タルノ權利ヲ與フルコトアリ例之我民法第七百二十一條ニ「胎兒ハ損害賠償ノ請求權
ニ付テハ既ニ生マレタルモノト看做ス」トアルカ如キ、第九百六十八條ニ「胎兒ハ家督相続ニ付テハ既

ニ生レタルモノト看做ス」前項ノ規定ハ胎兒カ死體ニテ生マレタルトキハ之ヲ適用セスト規定セルカ如キ是ナリ

何處ニ於テ人ナリヤハ法人ニ關シテ趣味アル問題ナレトモ自然人ニ關シテハ問題ト爲ラス苟一國ニ於テ自然人タル者ハ他國ニ在ル當然之ヲ權利ノ主體ト爲ササルヘカラス外國人ヲ奴隸トスルカ如キハ今日ノ法律ノ禁スル所ナリ

法ハトハ人ノ集合又ハ物ノ集合カ法律ノ規定ニ依テ權利ノ主體タルコトヲ許可セラレタルモノナリ如何ナルモノヲ法人ト爲スカハ各國國法ノ定ムル所ニシテ法人ハ法律ノ擬制ニ因テ人ト看做サレ之カ爲ニ始テ權利ノ主體タルニ過キス

法律ハ國境內ヲ限トシテ行ルル原則ト爲スカ故ニ一國ニ於テ法人タルコトヲ認許セラレタルモノ他國ニ赴キテ亦當然法人ナリト謂フコト能サルハ自明ノ理ナリ尤國內法ニ於テ外國人ト爲スモノヲ法人トスヘシトノ事ヲ規定スルモノアリ又條約ニ由テ外國法人ヲ內國法人ト爲スヘシト約定スルモノアリ

人ハ法律上能力ヲ有スルモノナリ能力トハ人カ權利ヲ享有シ又ハ行使スル法律上ノ資格ナリ能力ヲ別テ權利能力及行使能力ノ二種トス權利能力トハ人カ權利ヲ享有シ義務ヲ負フノ法律上ノ資格ニシテ行為能力トハ適法ノ行為ナルト不法ノ行為ナルトヲ問ハス其行為ニ法律上ノ效果ヲ得セシムル資格ヲ謂フ人ノ存在ト權利能力トハ法律上必シモ一致スルモノニ非ス然レトモ法人ニ在テハ苟其存在スル以上ハ當然權利能力ヲ有スルモノナリ

自然人ハ其生理上ノ必要其他百般ノ狀態ニ依テ法律上ノ效果ニ影響ヲ及スモノナリ例之年齢ニ依テ成

年者ト未成年者ト權利義務ニ關スル區別ヲ爲シ未成年者ニハ後見人ヲ附スルカ如ク又ハ兵役ニ服スルノ義務ヲ負ハシメサルカ如ク又婚姻シタルト否トニ依テ權利義務ヲ異ニシ有夫ノ婦ハ夫ノ許可ヲ得テハ財產ノ取得及讓渡ヲ爲スコトヲ得サルカ如ク又夫婦雙方ハ婚姻ノ解消セサルニ拘ラス他者ト婚姻スルコトヲ得サルカ如ク其他心神ノ耗弱ナルヤ健全ナルヤニ依リ又ハ嫡出子ナルヤ私生子ナルヤニ依テ權利義務ヲ異ニスルモノナリ而シテ此等ハ皆行為能力ノ問題ニシテ權利能力ノ問題ニ非サルナリ人ニ內國人ト外國人トアリ我國ニ於テハ憲法第一八條ニ「日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル」ト規定シ明治三十二年ノ國籍法ヲ以テ日本臣民タルノ要件ヲ定メタリ外國人トハ日本人以外ノ總テノ人ヲ謂フ故ニ此意味ニ於テハ何國ノ國籍ヲ有セサル者即無國籍人モ亦外國人ナリ內國人ト外國人トヲ區別スルノ實用ハ如何ナル權利カ內國人ニ屬スルニ拘ラス外國人ニ屬セサルヤヲ判別スルノ點ニ在リ

第四節 權利ノ客體

權利ノ客體ハ即物ナリ我民法ニ於テハ物トハ有體ノモノハ限ルコトヲ規定セリ然レトモ如何ナル法律カ規定スル所ノ「物」ヲモ全ク同一ノ謂ナリト解釋スルコトヲ得ス法律ノ解釋上民法ニ於テ物トセサルモノヲ刑法ニ於テ物トスト論スルコトヲモ得ヘキモノナリ

物ニハ左ノ如キ重ナル區別アリ
第一 動產、不動產 動產トハ其所在ヲ變更スルコトヲ得ヘキ物ヲ謂ヒ不動產トハ一定ニシテ動カスヘラサル物ヲ云フ例之筆ハ動產ニシテ土地ハ不動產ナリ家屋其他ノ建物ノ如キハ其所在ヲ變更スルコ

トヲ得ヘキ物ナリト雖土地ニ附著シテ離ササルコトヲ目的トスルモノナルカ故ニ通常之ヲ不動産ノ中ニ算入ス

第三 融通物、不融通物 融通物トハ何人ノ權利ノ下ニモ立ツコトヲ得ル物ニシテ不融通物トハ何人ノ權利ノ目的物ト爲ルコト能ハサル物ヲ云フ例之羅馬法ニ於ル「レス、サクレ」ノ如キ日月ノ如キ海洋ノ如キ空氣ノ如キ道路ノ如キ皆不融通物ナリ反之機、筆ノ如キハ皆融通物ナリ法律カ官ノ許可ナクシテ賣買、贈與スルコトヲ禁スル物アリ、毒藥、爆發物ノ如キ是ナリ然レトモ此等ハ絕對ノ不融通物ニ非ス風俗ヲ混亂スルノ虞アル猥褻ノ圖畫、器具ノ如キハ制限ヲ加フルモ取引ノ目的物トスルコト能ハサル物ナルカ故ニ不融通物ナリ

第三 主タル物、從タル物 主タル物トハ獨立シテ用ヲ爲ス物ヲ謂ヒ從タル物トハ他ノ物ニ附帶シテ始テ用ヲ爲ス物ヲ云フ例之筆筒ハ主タル物ニシテ筆筒ノ鍵ハ從タル物ナリ蚊帳ハ主タル物ニシテ蚊帳ノ釣手ハ從タル物ナリ瓶ハ主タル物ニシテ「コップ」ハ從タル物ナリ此二者ヲ區別スルハ實用ハ主タル物ニ關スル法律行爲ハ特別ノ合意ナキ限ハ從タル物ニ及フトノ點ニ在リ(民八七條二項)主タル物ト從タル物トハ必ス異ナリタル物ナラサルヘカラス一ノ物ノ中ニ包含セラルル物ハ從タル物ニ非ス例之櫻ノ花ハ櫻ニ對シテ從タル物ニ非ス元金ノ利子ハ元金ニ對シテ從タル物ニ非サルナリ

第四 代替物、不代替物(又ハ不特定物、特定物) 數量及種類ノ同一ヲ目的トスル物ハ代替物ニシテ然ラサル物ハ不代替物ナリ例之漢然ト米一升、麥一斗ト言ヘハ代替物ナレトモ現ニ此米糧ノ中ニ在ル米ト云ヘハ不代替物ト爲ルヘク又祖先ノ系圖、名將ノ甲冑ノ如キハ決シテ他ヲ以テ之ニ代フルコト對ハサル物ナルカ故ニ即不代替物ナリ故ニ物ノ此區別ハ契約ノ履行ノ場合ニ於テ實用ヲ見ルモノナリ

第五 可分物、不可分物 分割シテ獨立物トシ得ヘク又其價格ヲ減殺スルコトナキ物ハ可分物ナリ例之酒、醬油ノ如シ分割シタルカ爲ニ其物ノ本質ヲ失ヒ又價格ヲ減殺スル物ハ不可分物ナリ例之寫眞、生牛、生馬ノ如シ故ニ此兩者ノ區別ハ物質上ヨリ觀テ分ツヘキト否トニ依テ立テタルモノニ非スシテ用途ノ如何ヨリ觀タルモノナリ

第六 消費物、非消費物 消費物トハ一時ノ消費ニ因テ消費シ又ハ變形スル物ヲ謂フ例之果物、飲食物、煙草等ノ如シ非消費物トハ一時ノ費消ニ因テ消滅シ又ハ變形セサル物ヲ云フ例之家屋、銃砲、船舶等ノ如シ

第七 有體物、無體物 有體物トハ空間ニ存在シテ人目ニ觸ルル財産ノ目的物ヲ謂ヒ(財産トハ金錢上ノ價ヲ有スル權利ノ總體ナリ)無體物トハ然ラサルモノヲ云フ例之益、皿ノ如キハ有體物ニシテ瓦斯、電氣ノ如キハ無體物ナリ

第八 有主物、無主物 有主物トハ或人ノ權利ノ下ニ立ツ物ヲ謂ヒ無主物トハ何人ノ權利ニモ現在ニ於テ屬セサルモノヲ云フ故ニ此兩者ノ區別ハ物ノ體質上ノ區別ニ非シテ或狀態ノ下ニ於ル區別ナリ隨テ無主物ト雖其狀態ヲ變シテ或人ノ權利ノ下ニ立ツニ至リタルトキハ有主物ト爲ルモノナリ例之空中ニ飛行スル鳥、海中ニ游泳スル魚ハ無主物ナルモ若獵師、漁夫等カ之ヲ捕獲シタルヤハ有主物ト爲ルカ如シ

第十五章 義務

義務トハ法律ノ強制ヲ受ケテ行爲又ハ不行爲ヲ爲スヘキコトヲ謂フ此定義ハ義務ヲ單獨ニ觀察シタル

ニ因テ生スルモノナリ若シ義務ヲ權利ニ係ハラシメテ定義スルトキハ義務トハ權利ニ服従スル強制ナリト謂フコトヲ得ヘシ

各論

第一章 憲法

我國ニ於テハ天皇ハ統治權ノ總攬者ナリ天皇ハ自ラ天皇タルモノニシテ或人ノ命令又ハ委任ヲ受ケテ天皇タルニ非ス天皇ノ意思ハ憲法ノ範圍内ニ於テ國家ノ意思ト同一視セラレ外國ニ於テハ君主議會トカ共同シテ統治ヲ爲スコトアリト雖我國ノ憲法ハ此種ノ主義ヲ絕對ニ否認セリ天皇ハ神器ニシテ侵スヘカラサルモノナルカ故ニ天皇ハ如何ナル行爲ニ付テモ何等ノ責任ヲモ負ハス又國法ニ依テ處罰セラルコトナシ

天皇ノ缺ケタル場合ニ之ヲ充タスコトヲ皇位繼承ト謂フ我國ノ皇位ハ男系ノ男子ニ依テ繼承セラルモノナリ

天皇ハ議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フノ外大權ヲ有ス議會ノ協賛ヲ經スシテ爲スコト即大權ノ範圍ニ屬スル事ナリ約言セハ天皇ノ大權トハ天皇ノ親裁權ナリ天皇ノ大權ニ屬スル事項ハ憲法第六條以下ニ列記スル所ニシテ即左ノ如シ

- 第一 宣戰講和ノ權
- 第二 陸海軍ノ統帥權
- 第三 戒嚴ノ宣告權

ヲ常トス故ニ領土保護ノ場合ニハ選擇ヲ以テ國籍取得ノ一原因タルナリ我最近ノ例ハ臺灣ニ住居シタル清國人カ我國籍ヲ選擇スルコトニ依テ我國民ト爲リタルカ如キ是ナリ

第二款 國籍ノ喪失

第一 認知 日本人ニシテ外國人タル父又ハ母ニ依テ認知セラレ且其認知ニ因テ父又ハ母ノ國籍ヲ得タルトキハ我國籍ヲ喪フモノトス然レトモ日本人ノ妻又ハ入夫ト爲リタル者或ハ養子ト爲リタル者ハ妻、入夫、養子タル身分ニ因テ我國籍ヲ取得シ得ルモノナルニ由リ外國人ノ認知アルモ我國籍ヲ喪フコトナキナリ

第二 婚姻、離婚及離縁 外國人ト婚姻シタル女ハ我國籍ヲ喪フ又外國人ニシテ我國民ノ妻、養子又ハ入夫ト爲リタルトキハ我國籍ヲ得ルモ其者ニシテ離婚又ハ離縁アリタルトキハ我國籍ヲ得ルノ原因消滅シタルニ由リ我國籍ヲ喪フモノトス然レトモ此場合ニハ無國籍人ヲ生スルコトヲ避クルカ爲メ外國ノ國籍ヲ再得ルトキニ限り我國籍ヲ喪フモノト爲セリ若又外國人カ一旦我國民ニ嫁シテ我國籍ヲ得ルモ其婚姻無効ナルトキハ我國籍ヲ喪フコト勿論ナリ

第三 他國ノ國籍ヲ得タルコト 一人ニシテ二國以上ノ國籍ヲ有スルコトハ避クヘキ事項ナルニ由リ他國ノ國籍ヲ得タル者ニ對シテハ我國籍ヲ喪ハシムルモノト爲ス

第四 夫若クハ父母カ他國ノ國籍ヲ得タルコト 妻及子タルカ爲メ夫及父母ト共ニ他國ノ國籍ヲ得タルトキハ我國籍ヲ喪フモノトス

右ニ舉ゲタル四箇ノ場合ハ總テ我國籍ヲ喪フノ原因ヲ爲スモノナリト雖文武官及現役ノ軍人タルモノ

ニ對シテハ例外トシテ此原則適用サルルコトナシセラレタリ(國籍法二四條)

第二節 臣民ノ義務

第一款 服從ノ義務

服從ノ義務トハ統治者ノ命令ニ服從スル義務ヲ稱スルモノナリ臣民ノ服從ノ義務ヲ有スルハ其臣民タルノ地位ノ上ニ於テ當然ノ事ニ屬ス何トナレハ臣民ニシテ服從ノ義務ヲ有セサルトキハ國家ノ統一ヲ保ツコトヲ得サルヘク臣民ニシテ何人ニ對スルモ平等ナルニ於テハ國家ナルモノノ存在ヲ認ムルコト館ハサルニ至ヘケレハナリ外國人モ亦我領土内ニ來ルトキハ統治者ニ對シテ服從ノ義務ヲ負フト雖臣民ノ有スル服從義務ト外國人ノ有スル服從義務トハ差異アリ即臣民ノ有スル服從ノ義務ハ無限ノモノナリト雖外國人ノ有スル服從ノ義務ハ有限ノモノナルコト是ナリ抑臣民ハ其領土内ニ在ルト領土外ニ在ルトヲ問ハス即何レノ土地ニ在ルトヲ問ハス服從ノ義務ヲ有スルモノナリト雖外國人ハ單ニ領土内ニ留ル場合ニ於テノミ服從ノ義務ヲ有スルモノトスは一ハ無限ノモノニシテ他ハ有限ノモノナルニ由ルナリ

又官吏ハ上官ノ命令ニ對シテ服從スルノ義務ヲ有スレトモ此服從ノ義務ト臣民ノ服從ノ義務トハ其性質ヲ異ニス即官吏關係ハ官吏ノ自由意思ニ基クモノニシテ其有スル服從義務ハ自己ノ自由意思ノ結果ニ外ナラスト雖臣民ノ服從義務ハ絕對固有ノモノニシテ自己ノ意思ニ基キテ生シタル義務ニ非サルナリ是兩者ノ間ニ存スル性質上ノ大ナル差異トス或ハ專制國ニ於ル臣民ノ服從義務ト立憲國ニ於ル臣民ノ服從義務トヲ區別シテ後者ハ法律ニ依テ始ラ生シタルモノナルモ前者ハ然ラスト爲ス者アリト雖臣民

ノ義務ハ法律ニ依テ始ラ發生シタリト爲スハ其當ラ得タルモノニ非ス如何トナレハ法律アリテ始ラ臣民アルニ非ス國家アリ臣民アリテ始ラ法律ナルモノヲ生スルモノナレハナリ或ハ又專制國ニ於ル臣民ノ義務ト立憲國ニ於ル臣民ノ義務トヲ區別スルニ後者ノ場合ニハ臣民義務ノ範圍ハ法律ノ規定ノ外ニ出テス然ルニ專制國ノ臣民ノ義務ノ範圍ハ無限ナリト説ク人アリト雖是亦當ラ得ス何トナレハ立憲國ニ於テ憲法ニテ法律ニ依ラサレハ課スルコトナシト保證セラレタル臣民ノ義務ハ法律ノ範圍ヲ有スルモ然ラサルモノニ付テハ命令ヲ以テ命セラルルモ服從スルノ義務アレハナリ唯專制國ニ於ル臣民ノ服從義務ト立憲國ニ於ル臣民ノ服從義務トノ間ニ於ル差異ハ立憲國ニ於テハ總テ統治者ノ行爲ニ付一定ノ形式ヲ有スルノ結果臣民ニ服從ヲ命スルモ亦形式ヲ須ヒサルコトヲ得シテ若其形式ヲ缺クトキハ縱令統治者ノ命令トシテ出ツルモ之ニ服從スルノ義務ヲ有スルコトナシ蓋統治者ノ眞ノ命令ト認ムルヲ得サルヲ以テナリ反テ之專制國ニ於テハ統治者ノ行爲ニ一ノ定リタル形式ヲ有セサルカ故ニ如何ナル形式ニ依テ命セラルルモ臣民ハ之ニ服從セサルヘカラサルナリ例之我國ノ如キ立憲國ニ於テハ憲法上ノ納稅及兵役ノ義務ハ法律ニ依ルヘキコトヲ定タルカ故ニ若法律ニ依シテ納稅ヲ命セラレ若クハ兵役ニ就クコトヲ命セラルルモ之ヲ遵奉スルコトヲ要セサルモノトス

前ニ述ヘタル如ク服從ノ義務トハ廣ク統治者ノ命令ニ服從スルノ謂ナルカ故ニ「ゴオルク、マイヤー」氏力服從ノ範圍ヲ明示セント欲シテ或ハ法律ニ服從スルノ義務或ハ行政官廳ノ命令ニ服從スルノ義務或ハ裁判所ノ判決ニ服從スルノ義務等ト列舉セシコトヲ力メタリト雖到底網羅スルコトヲ得ヘキニ非サルナリ然レトモ服從ノ義務ヲ明ナラシムルカ爲メ或ハ之ヲ行爲ノ義務ト不行爲ノ義務トニ分テ而シテ行爲ノ義務ヲ努力ヲ供給スルノ義務ト物品ヲ供給スルノ義務トニ區別シ所謂努力ヲ供給スル義務ノ

著キモノハ兵役ノ義務ニシテ物品ヲ供給スル義務ノ著キモノハ納税ノ義務ナリトナスハ必シモ不可ナリト爲ササルナリ

第二款 忠實ノ義務

忠實ノ義務トハ消極的ノ意義ヲ有スルモノニシテ統治者及國家ニ對シ有害ナル行爲ヲ避ケクハ之ヲ防止スルコトヲ意ラサルノ義務ヲ總稱スルモノトス此義務ト服從ノ義務トノ異ル所ハ服從ノ義務ハ命令ヲ受クルニ由リ始テ存在スルモノナレトモ忠實ノ義務ハ命令ヲ受ケサルモ存在スルコト及服從ノ義務ハ外國人ト雖領土内ニ留ル間ハ之ヲ負フモノナリト雖忠實ノ義務ハ外國人ニ對シテハ絕對ニ存在セサルコト是ナリ故ニ等ク刑法ノ國事犯ニ觸ルル場合ニ於テモ外國人ノ處罰セラルルハ忠實義務違反ノ爲ニ非スシテ一國ノ秩序ノ爲ニスルモノナルモ臣民ノ處罰セラルルハ忠實義務違反ノ制裁ニ出ツルモノトス

第三節 國民ノ權利

第一款 臣民ノ權利ノ分類

臣民ノ權利ヲ分類シテ或ハ自由權若クハ公權及參政權ト爲ス者アリ行爲請求權、自由權及自勵權若クハ參政權ト爲ス者アリ又其自由權ニ付テハ果シテ權利ナルヤ否ヤニ付疑問ナキニ非サルナリ而シテ之ハ權利ニ非スト爲ス者ニ二種アリ其第一種ノ說ニ曰ク權利ハ法律ニ由リ生ス法律ハ國家ノ何時ニテモ變更シ得ルモノナルカ故ニ臣民ハ其國家ニ對シテ權利ヲ有スルコトナシ隨テ自由權ナルモノモ存在ス

ルコトナシト第二種ノ說ニ曰ク行爲請求權及參政權ノ如キハ臣民ノ權利ナリト雖自由權ハ唯行政官廳ニ對スル制限ノ反射ニ因ルモノニシテ權利ト稱スヘキモノニ非スト然レトモ普通一般ノ觀念ニ從フトキハ權利トハ法律ヲ以テ保護セラルル利益ナルカ故ニ臣民ノ自由權ナルモノモ亦一種ノ權利ナリト爲スコトヲ妨ケサルヘシ何トナレハ行政官廳ニ對スル制限ハ之ヲ臣民ヨリ觀ルトキハ臣民ノ一ノ利益ニ屬スル事項ナルヲ以テナリ又第一種ノ論者ノ如ク總テノ公法上ノ臣民ノ權利ヲ非認セントスルハ其論理一貫セサルノ點アリ何トナレハ此論者ト雖私權ハ之ヲ認ムルコト勿論ナルヘク然ルニ若ク公權ヲ統治者ノ隨意ニ變更シ得ルモノナルカ故ニ權利ニ非スト爲ストキハ私權ニ付テモ同一ノ斷定ヲ下スコトヲ得ヘケレハナリ故ニ予ハ一般ノ學說ノ如ク私權ニ對立シテ亦公權ヲ認ムルヲ可ト信スルナリ

第二款 憲法ニ依テ保障セラレタル權利

前款ニ於テ予ハ公法上臣民ノ權利ヲ有シ得ルコトヲ説キタリ然レトモ總テノ臣民ノ權利ヲ説明スルハ憲法講述ノ範圍ニ非サルヲ以テ茲ニハ憲法ニ於テ保障セラレタル權利ニ付テノミ聊説明ヲ爲サント欲ス

第一項 均ク公務ニ就クノ權

憲法第一九條ニ曰ク「日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應ジ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得」ト故ニ日本臣民ハ法律命令ニ定ムル所ノ資格ヲ具フル以上ハ同等ニ公務ニ就クコトヲ得ルモノニシテ門閥ニ因リ藩閥ニ依リ血統ニ依リ人種ニ依リ之ニ等差ヲ付スルコトヲ得ス例之

或官吏ヲ世襲ニスルカ如キ或ハ藩閥ノ者ニ限テ大臣ト爲スカ如キ皆違憲ナリ然レトモ之ニ例外ヲ爲スモノトモ認ムヘキ疑問アリ即左ノ如シ

(一) 歸化人ハ國籍法第一六條ニ依リ國務大臣又ハ帝國議會ノ議員等ト爲ルコトヲ得スト制限セラレタリ是憲法第一九條ニ牴觸セザルモノナリヤ否ヤ此疑ノ生スル所以ハ縱令歸化人ト雖亦日本臣民タルコト疑ナク唯生來ノ日本人ニ非シテ其歸化ニ因テ我國籍ヲ取得シタルノ故ヲ以テ之ニ或公務ニ就クヲ禁スルハ憲法第一九條所謂均クノ文字ニ牴觸スルノ嫌ナキニ非サレハナリ固ヨリ憲法第一九條ニハ法令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ云ト規定シタルモ此資格トハ學術、年齡等ニ關スルモノニテ門閥、出生地、人種等ノ如キ絕對ニ變更シ得ザルモノニ關スルモノニ非サルナリ若反之歸化人ニ對スル國籍法第一六條ノ規定モ憲法第一九條ノ法律ニ定ムル資格ニ關スル條項ナリトセハ是憲法ノ規定ヲ以テ官職ヲ世襲ニシタル專制時代ノ慣習ヲ破ルノ精神ニ副ハサルコトト爲ルナリ

(二) 公、侯爵ノ者ハ或年齡ニ達シタルトキハ當然貴族院議員ノ職務ヲ取得ス

是亦憲法第一九條ニ牴觸セザルヤ否ヤ憲法第一九條ニ依レハ日本臣民ハ均ク公務ニ就クコトヲ得ルニ拘ラス單ニ特別ノ門閥ニ生レタルカ爲メ當然或地位ヲ專有スルハ是亦「均ク」ノ文字ニ牴觸スルコト前段所述ト同一ノ疑ヲ生スルナリ

本條ニ關聯シテ一言スヘキハ普滿西ノ憲法第四條ヲ始シ多クノ國ノ憲法ニ於テハ臣民ノ平等ナルコトヲ規定シ且閥族ノ特權ナルモノ將來存在スルコトナシト規定シタルニ拘ラス我憲法ニハ如此廣ク平等ナル語ヲ規定シタルノ法條ヲ缺クト是ナリ是我國ニ於テハ憲法第一九條ノ場合ニ關スルノ外ハ總テ平等ナルコトヲ得ルヲ認ムルカ爲メ非シテ我國從來ノ制度ノ上ニ於テ臣民ハ總テ平等ナルコトヲ

認メラルルニ由リ特ニ之ヲ憲法ニ掲グルノ必要ナシトシテ其規定ヲ爲サザリシモノト信ス

第二項 居住及移轉ノ自由權

憲法第二條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス」ト故ニ臣民ノ居住及移轉ノ自由ヲ制限セントスルトキハ必法律ニ依ラサルヘカラサルナリ而シテ其制限ハ直接タル間接タルトヲ問フコトナシ間接ニ制限スルトキハ他ニ移轉スル者ニ對シテ特別ニ多額ノ金圓ヲ出サシメ或ハ一定ノ場所ニ居住スル者ニ對シテ(特ニ或苦痛ヲ與フルカ如キ是ナリ)又移轉ハ唯ニ國內ニ止ラスシテ海外ニ移轉スル場合モ亦包含ス外國ニ移住スル者ニ對シテハ普滿西憲法第一一條ニ「外國移轉ノ自由ハ其兵役ニ關セザル場合ニ於テハ政府ハ絕對ニ之ヲ制限スルコトヲ得ス移住ヲ海外ニ爲ス者ニ對シテハ移住稅ヲ徵收スルコトヲ得ス」トノ規定アリト雖我國ニ於テハ憲法中如此明文ヲ存セザルニ由リ法律ヲ以テスル以上ハ移住稅ヲ課スルモ敢ナキモノトス然レトモ此移住稅ト混同スヘカラサルハ海外ニ旅行セントスル者ノ旅行券ヲ請求スルニ方リ徵收スルモノナルカ故ニ之ヲ一種ノ海外旅行者ニ對スル租稅ト看ルコトヲ得ス是海外旅行券ノ手数料カ法律ヲ以テ定メラレサル所以ナリ

次ニ居住及移轉ノ自由權ト官吏トハ關係ヲ一言セシニ官吏ハ職務ヲ執行スル場所ニ居住セザルヘカラサルノ義務ヲ有スルモノナリ其職務ヲ執行スルノ場所トハ必シモ其官廳所在地ノ行政區畫ト一致スルコトヲ要セスト雖職務ヲ執行スルニ妨ナキ場所ニ居住スルヲ必要ト爲ス如此義務ノ法律ノ規定ニ依ラシテ官吏ノ職務トシテ定メラレタリト雖官吏ハ其官吏トシテ如此居住ノ制限ヲ受クルモ憲法第二二

條ノ適用ノ範圍内ニ非ナルニ由リ法律以外ノモノヲ以テ其制限ヲ爲スモ憲法違反ニハ非サルナリ如何
トナレハ官吏タル身分ヲ得ルハ自己ノ意思ニ基キモノニシテ居住ノ制限ヲ受クルハ官吏ナル身分ヲ得
タルノ結果ナルヲ以テ畢竟居住ノ制限ヲ受クルハ自己ノ意思ニ原因スルモノト爲スコトヲ得ヘキヲ以
テナリ

軍人モ亦一般官吏ト同ク或一定ノ場所ニ居住セサルヘカラサルノ制限ヲ受ケ而モ此制限ハ法律ノ規定
ニ依ルコトナキモ軍人ニ關シテハ憲法第二二條ノ存在スルカ爲ニ違憲トハ爲ラサルナリ

猶刑法附則ノ行政執行法、傳染病豫防法、豫戒令、官吏職務規律、陸軍服役條例、海軍下士卒服役條例、民
法第八八〇條等ヲ參照スヘシ

右ニ關シテ猶一言スヘキハ法律ヲ以テスル以上ハ臣民ヲ追放スルコト即其領土内ノ居住ヲ禁止スルコ
トヲ得ルハ否ヤノ點ナリ或ハ曰ク外國人ハ之ヲ追放スルコトヲ得ルモ自國ノ臣民ハ追放スルコトヲ得
スト此說ヲ立ツル者ハ多クハ國際法ノ學者ニシテ其理由トスル根據ハ自國民ヲ追放スルトキハ他國ニ
類累ヲ及スニ至ルモノニシテ若他國カ更ニ之ヲ追放スルトキハ其追放セラレタル人民ハ遂ニ居住ノ場
所ヲ失フニ至ルヘク是甚不當ナリト云フニ在リ然レトモ憲法上ヨリ之ヲ論スルトキハ法律ヲ以テ絕對
ニ臣民ノ領土内ニ居住スルコトヲ禁止スルモ憲法第二二條ニ抵觸スルモノニ非ス又之ヲ國法上ヨリ廣
ク觀察スルモ其之ヲ國外ニ追放スルハ恰モ之ヲ死刑ニ處スルニ均ク二者共ニ自國ノ國家組織ノ團體員
タルノ資格ヲ喪ハシメ其領土内ノ存在ヲ許ササルモノタルハ一ナリ唯異ルハ其生命ヲ奪フト奪ハサル
タルノ區別ヲ存スルノミ故ニ死刑ニシテ之ヲ認ムル以上ハ到底追放ヲ不可能ナリト爲スコトヲ得サルナ
リ

又之ト少シク例ヲ同クスルハ獨逸ニ於テハ永ク外國ニ居住スルカ爲メ若クハ或制裁ノ爲メ自國民ノ
國籍ヲ喪ハシムルコト少カラサルコト是ナリ而シテ國籍ヲ喪ハシムルコトハ追放ト其性質均クスル
ニ由リ若自國民ノ追放ヲ以テ不法、不當ナリトセハ自國民ノ國籍ヲ喪ハシムルモ亦不法、不當ナリ
ト論決セサルヲ得サルニ至ルヘシ

第三項 身體ノ自由權

第一 處罰 憲法第二三條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ……處罰ヲ受クルコトナシ」ト
故ニ法律ニ基カスシテ臣民ヲ罰スルコトヲ得サルハ當然ナリ然レトモ其處罰ノ範圍ニ關シテハ種種ノ
學說アルカ故ニ左ニ處罰ノ主義ニ關シテ少シク學說ヲ試ムヘシ

通常罰ナル文字ヲ附シタルモノハ刑罰、警察罰、懲戒罰及行政執行罰若クハ強制罰ニシテ處罰ノ範圍ヲ
廣ク解スル者ハ此文字中ニ總テ四箇ノ罰ヲ含ムモノナリト爲ス然レトモ此四者中刑罰、警察罰ト懲戒
罰、行政執行罰トハ大ニ其性質ヲ異ニスルコトヲ注意セサルヘカラス刑罰ト警察罰トハ其間輕重ノ別
アリト雖共ニ刑事上ノ制裁トシテ之ヲ課スルモノニシテ廣キ主義ニ於ル刑罰ナリ然ルニ懲戒罰ト行政
執行罰トハ制裁トシテ之ヲ課スルモノニ非スシテ一ハ官吏ノ職務ヲ履行セシムルカ爲ニ之ヲ課シ他ハ
行政命令ノ執行ヲ目的トシテ之ヲ課シ共ニ或一定ノ目的ノ遂行ヲ期スルモノナリ故ニ刑罰及警察罰ト
懲戒罰及行政執行罰トノ間ニ左ノ區別ヲ存ス

(一) 刑罰及警察罰即廣義ニ於ル刑罰ニ付テハ一事不再理ノ原則行ルルモ懲戒罰及行政執行罰ニ付テハ
如此原則存在スルコトナク隨テ其執行ノ目的ヲ達スルニ至ル迄ハ一事ニ對シ幾回ニテモ之ヲ課スルコ

トヲ得ルモノトス

(二) 廣義ノ刑罰ハ犯罪行為アリタルトキハ必之ヲ課セサルヘカラス即刑罰ハ犯罪ニ隨伴スト雖他ノ二者ハ然ラサルナリ懲戒罰及行政執行罰ハ若之ヲ課セサルモ其目的ヲ達スルコトヲ得ト認ムル場合ニハ義務違反ノ官吏ニ對シ若クハ行政命令違反ノ人民ニ對シテモ必シモ之ヲ課スルコトヲ要セサルモノトス

如此刑罰、警察罰ト懲戒罰、行政執行罰トハ各其性質ヲ異ニスルニ由リ之ヲ混同シテ均ク憲法第二三條所謂處罰中ニ含著セシムルモノト爲スハ解釋ノ妥當ナルモノニ非サルナリ尙憲法第二三條ノ沿革ニ遡リテ之ヲ考フルモ本案所謂處罰トハ其刑事上ノ罰ノミヲ指稱スルモノナルコトヲ明ニスルコトヲ得ヘキニ由リ予輩ハ憲法第二三條所謂處罰ノ範圍ニ屬スルモノハ刑罰及警察罰ノ二ナリト斷言セント欲ス而シテ亦是文官懲戒令等ノ法律ヲ以テ定メラレサル所以ナリ

第二 逮捕、監禁及審問ハ如何ナル範圍迄ヲ稱スルモノナリヤト謂フニ前ニ處罰ニ關シテ述ヘタルト同一ノ目的ニ出ツル場合ノ逮捕、監禁及審問ノミヲ指スモノナリ即刑事上ノ目的ニ出ツル逮捕、監禁、審問ノミニ關シ憲法第二三條ノ適用ヲ受クルモノナリ故ニ懲戒處分ヲ爲スカ爲ニ審問シ或ハ親カ其子ヲ懲戒スルカ爲ニ一室ニ入置クカ如キハ此第二三條ノ審問及監禁中ニ包含セラレサルモノナリ(刑訴五八條乃至八五條、行執一條、三條一項、監則等)

第四項 法定ノ裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權

憲法第二四條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルルコトナシ」ト故

ニ日本臣民ニシテ行政官廳ノ裁判ヲ受ケ或ハ臨時ニ設ケラレタル委員ノ裁判ヲ受クルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ルモノナリ蓋法定ノ裁判官トハ憲法第五八條ニ定メタル法律ニ定メタル資格ヲ具フル裁判官ヲ指スモノナレハナリ然ラハ裁判トハ如何ナルモノヲ指スヤト謂フニ「裁判」ナル文字ヲ附スルモノニ付テハ司法裁判ノ外行政裁判、懲戒裁判等ノモノアリト雖此憲法第二四條ノ裁判トハ司法裁判即民事、刑事ノ裁判ヲ指スモノニテ行政裁判及懲戒裁判ノ如キハ此中ニ含まレサルナリ然ラハ領事裁判及軍法會議ニ於ル裁判ハ此中ニ包含セサルヤト謂フニ領事裁判、軍法會議ノ裁判其他警察官廳ノ爲ス所ノ違刑罪ノ裁判モ其ニ其性質司法裁判ニ屬スルカ故ニ此第二四條ノ裁判ノ中ニ入ルヘキモノナリ然ルニ領事裁判ヲ爲ス所ノ領事、軍法會議ノ裁判官及違警罪ノ判決ヲ爲ス所ノ行政官廳ノ官吏ハ其ニ法定ノ資格ヲ具フル所ノ裁判官ニ非ス於是領事裁判、軍法會議及違警罪ノ判決ニ關スル制度ハ憲法第二四條ニ抵觸スルコトナキヤノ疑ヒ生スルナリ仍テ此三者ヲ是ヨリ各別ニ說明セント欲ス

第一 領事裁判 領事裁判トハ外國ニ駐在スル領事官自國ノ臣民ニ關係スル所ノ民事、刑事ノ訴訟ヲ條約ノ認ムル所ニ從ヒ裁判スルコトヲ謂フ故ニ領事官ノ裁判スル目的物カ民事、刑事ニ關スル所ノ司法上ノ訴訟ナルコト明ナリ而シテ領事官ノモハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任スルコトナク其任用ニ關スル規定モ全ク勅令(二六六年勅令一八七號外交官領事官及書記生任用令及二六六年勅令一八八號領事官特別任用令)ノ定ムル所ニ係ルモノナリ隨テ之ヲ法定ノ裁判官ト稱スルコトヲ得サルナリ以是此領事裁判ノ制度ハ憲法ニ抵觸スルコト疑フヘカラサルモノナリ但之ヲ辯護スル說ナキニ非サルニ由リ參考ノ爲メ其辯護說ヲ二三左ニ掲ケント欲ス

第一說 憲法ノ領土外ニ其效力ヲ及スモノニ非ス隨テ領土外ニ於テ爲ス所ノ領事ノ裁判ハ憲法ニ抵觸

スルノ理由ナキモノナリト然レトモ前ニ述ヘタル如ク憲法ハ土地ニ關シテ領土全體ニ其效力ヲ及シ人民ニ關シテ臣民タルノ身分ヲ有スル者全體ニ對シ其領土内ニ在ルト領土外ニ在ルトヲ問ハス總テ其效力ヲ及スモノナルカ故ニ臣民ハ外國ニ居住スルモ此憲法第二四條ヲ援用シテ法定ノ裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權利ヲ主張スルコトヲ得ヘク隨テ此說ヲ以テ領事裁判ノ制度ヲ辯護スルコトヲ得サルナリ

第二說 領事裁判ノ制度ハ憲法發布以前ヨリ存在スルモノニテ其效力ハ判例所構成法ニ於テモ認メラルモノナリ故ニ憲法ニ牴觸スルモノニ非スト然レトモ憲法第七六條ニハ「法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用ヒタルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ違由ノ効力ヲ有ス」ト規定シ憲法發布前ノモノハ憲法ニ牴觸セサル部分ニ於テノミ效力ヲ有スルコトヲ認メタルモノナリ而シテ此領事裁判ノ制度ハ憲法ノ條文ニ觸ルルコト明ナル以上ハ憲法第七六條ヲ以テ之ヲ辯護スルノ限ニ在ラス又裁判所構成法ニ於テ此制度ヲ認メタリトスルモ法律ヲ以テ憲法違反ノモノヲ憲法ニ牴觸セサルモノト爲スノ效力ヲ生ズヘキモノニ非サルナリ

第三說 裁判トハ法定ノ裁判官ノ爲ス裁判ヲ名クルモノニテ領事裁判ノ如キ法定ノ裁判官ニ非サル者カ爲ス所ノ裁判ハ之ヲ憲法第二四條ノ裁判ト稱スヘキモノニ非ス隨テ領事カ民事、刑事ノ裁判ヲ爲スモ憲法ニ牴觸スルモノニ非サルナリト然レトモ此說ハ裁判ノ意義ヲ誤リタルモノナリ憲法ニ謂フ「司法」若クハ「裁判」ナル文字ハ如此形式ノ意義ヲ有スルモノニ非ス若如此形式ノ意義ニ於テ之ヲ解スルトキハ憲法第五章及憲法第二四條ハ無意義ノ規定ト爲ルモノナリ蓋臣民ノ權利ヲ保護スルノ目的ヲ達セサルハナリ

第四說 法定ノ裁判官トハ法律ニ由テ其資格ヲ定メタル裁判官ト云フ意味ニ非ス又法律ニテ其資格ヲ

定メタル裁判官ヲ法定ノ裁判官ナト解スルモ法律ニテ其資格ヲ定ムルトハ裁判官ト爲ルノ資格、要件ヲ法律ニテ悉定ムルヲ必要トスルニ非ス或者ニ對シ法律ヲ以テ裁判ヲ爲スヘキ權限ヲ與ヘラレタルトキハ其者ヲ法定ノ裁判官ト稱シテ誤ナキナリ然ルニ領事ニ關シテハ法律ヲ以テ裁判ヲ爲スヘキモノナルコトヲ定メタルカ故ニ領事モ亦法定ノ裁判官ト稱セラルヘキモノナリ（三二年法律第七〇號領事官ノ職務ニ關スル件參照）故ニ領事裁判ノ制度ハ憲法ニ牴觸スルモノニ非スト然レトモ此法定裁判官ノ意義ハ法律ニ定メタル資格ヲ有スル裁判官ヲ指スモノナリトコトハ憲法第二四條ト第五八條ト之ヲ對照スレハ明ナル事ニテ又法律ニ定メタル資格ヲ有スルトハ裁判官ト爲ルヘキ資格要件ヲ法律ヲ以テ定メタルモノナルコトハ普通ノ解釋トシテ當然ノ事ナリ單ニ法律中ニ其權限ヲ與ヘタルノ故ヲ以テ之ヲ法律ニ定メタル資格ヲ有スル裁判官ト解シ得ルモノニ非サルナリ故ニ此說ヲ以テモ領事裁判ノ制度ヲ辯護スルニ足ラサルコト疑フヘカラスト雖今日ノ現在ニ於テ此制度ヲ辯護スルニハ此說ニ依ルノ外ナキモノナリ

第二 違警罪ノ即決裁判

警罪ニ關スル裁判ヲ爲スル謂フ此違警罪ノ性質刑事事件タルコト明ニシテ而モ之ヲ裁判スル所ノ警察官ハ現行制度ニ於テ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ニ非サルナリ於是違警罪即決ノ憲法違反ニ非サルヤノ疑問ヲ惹起スモノナリト雖違警罪ニ付テハ之ニ關シ裁判ヲ受クル者カ正式ノ裁判ヲ仰クコトヲ得ルヲ認メタルカ故ニ憲法第二四條ノ法定ノ裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルモノト名クルコトヲ得サルナリ即違警罪ノ裁判ヲ受クル者カ警察官ノ即決ニ由テ満足セサルトキハ何時ニテモ法定ノ裁判官ノ裁判ヲ受クルコトヲ得ルカ故ニ此制度ハ憲法第二四條ニ牴觸セサルモノナリ

第三 軍法會議 軍法會議ノ制度カ若軍人ノミヲ裁判スルモノト爲ストキハ憲法第三二條ノ規定アルカ爲ニ憲法ニ牴觸スルヲ免ルモノナリ然ルニ若軍法會議ノ權限ニシテ軍事ニ關係アル犯罪ニ付テモ普通人民ニ及フコトアルトキハ此制度モ亦憲法ニ違反スルノ嫌ヲ生スルモノナリ何トナレハ軍法會議ハ司法事件ヲ裁判スルモノニシテ其裁判官ハ所謂法定ノ裁判官ニ非サレハナリ(陸海軍治罪法第二章)

第五項 住所ノ安全權

憲法第二五條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラルルコトナシ」ト此規定ハ住所ノ安全ヲ絕對ニ保障スルモノナルカ故ニ如何ナル目的ニ出ツルモ其住所ノ安全ヲ害スルトキハ法律ノ規定ニ基カサルヲ得サルナリ即犯罪搜索、租税ノ徵收、戸籍ノ調査等ノ目的ニ出ツル場合ハ勿論衛生警察其他廣ク警察ノ目的ニ出ツル場合モ亦此規定ノ適用ヲ受クルモノニシテ尙進テ其住所内ノ人民ヲ救護スル目的ニ出ツル場合ニ於テモ亦此憲法第二五條ノ規定ノ結果トシテ法律ノ規定ニ依ラサルヲ得サルナリ或ハ此規定ニ關シ侵入ノ事實ナクシテ搜索ヲ爲スコトヲ得サルカ故ニ此第二五條ノ場合ハ搜索ノ目的ノ爲ニ侵入スル場合ノミヲ指スモノナリト説ク者アリト雖其規定ノ目的ハ住所ノ安全ヲ保護スルニ在ルカ故ニ其精神ヨリ推ストキハ搜索ノ目的ニ出ツル侵入ノミナラス漫然目的ナクシテ侵入シタルトキモ亦此規定ノ範圍ニ屬スヘキモノナリ蓋如何ナル目的ニ因テ若クハ如何ナル目的モ有セスシテ侵入スルモ住所ノ安全ヲ害スル點ニ於テハ同一ナレハナリ又此說ニ從フトキハ「侵入セラレ」ノ文字無用ニ歸スレハナリ故ニ此說ヲ採ルコトヲ得サルナリ茲ニ特ニ注意スヘキハ「住所」ノ文字ナリ此住所ハ民法ノ所謂住所ノ意義ニ非スレテ廣ク人民ノ居住

スル場所ヲ指スモノナリ民法ノ住所ハ生活ノ本據ヲ指スモノナリト雖此憲法第二五條ノ住所ハ單ニ一時居住スルノ場所タル旅宿ノ一室ト雖其人カ居住ノ場所ト定メタル間ハ憲法第二五條ノ住所ノ中ニ包含スルモノナリ
尙此條文ニ關シ一言スヘキハ「許諾ナクシテ」ノ文字ナリ許諾ナクシテハ明ニ承諾ヲ唱ヘタル場合ノミナラス承諾ヲ與ヘタル場合ヲ總テ含ムモノナリ蓋何人モ他人ノ問ニ對シ答ヲ爲スノ義務ヲ有セザレハナリ

今住所ノ安全ニ關スル現行法規ノ重ナルモノヲ舉クレハ刑事訴訟法第七八條、第四百四條、行政執行法第二條、民事訴訟法第五三六條、第五三七條、戒嚴令第一四條第六號、府縣制第一一六條第一項、酒造稅法第一九條、醬油稅則第一八條等はナリ

第六項 信書ノ秘密ヲ保ツノ權

憲法第二六條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ秘密ヲ侵サルルコトナシ」ト故ニ信書ノ秘密ヲ侵ストキハ必法律ノ規定ニ依ルヘキモノナリ但信書ノ秘密ノ範圍ニ對シ異說ナキニ非サルニ由リ茲ニ其主義ヲ一言セント欲ス

「ラバンド」ノ「リユニング」等ノ憲法學者及行政法學者ハ信書ノ秘密ノ文字ヲ廣ク解釋シテ郵便局ニ於テ取扱フ所ノ總テノ事項ニ關シ信書ノ秘密ナルモノハ存スルモノト爲セリ故ニ此說ニ從フトキハ管ニ封書、端書等ノ内容及表書ノミナラス小包郵便送達ニ關シ若クハ郵便爲替ノ往復ニ關シ其事實ヲ洩ストキハ總テ信書ノ秘密ヲ害スルコト爲ル然ルニ之ニ反對スル學者ハ多ク刑法學者及刑事訴訟法學者

ニシテ此等ノ學者ハ信書ノ秘密ノ範圍ヲ甚狹ク解シ信書ノ秘密ヲ侵スコトハ封書ノ内容ニ關スル秘密ヲ侵スコトニ限ルモノト爲シ其他郵便局ニ於テ扱フ事項ニ關シ之ヲ他ニ洩スコトヲ得サルハ官吏カ秘密ヲ守ルノ義務ヲ有スルカ爲ニシテ憲法ノ保障シタル信書ノ秘密ヲ侵スカ爲ニ非スト爲スナリ此第二ノ說ハ信書ノ秘密ノ文字ヨリ論スルコトキハ當ヲ得タルモノト信スルナリ何トナレハ秘密トハ秘密ニセントスルノ意思アルニ基クモノニテ信書ニ關スル秘密ハ發信者カ之ヲ公ニスルヲ欲セサルノ意思ヲ有セサル場合ニ限リ存スルモノニテ其秘密ニスルノ意思ハ封書ノ場合ニ於テノミ存スルモノナルコトヲ推定シ得レハナリ固ヨリ封書ノ内容ニ付テモ之ヲ秘密ニスル意思ナキ場合ニ存スルコトナキニ非スト雖反對ノ證據ナキ限ハ一應秘密ニスルノ意思アルコトヲ推定シ得ルモノナリ然ルニ反之端書等ヲ用フルハ封書ノ方法アルニ拘ラス精ニ之ヲ用フルモノナルヲ以テ秘密ニスルノ意思ナキコトヲ想像セサルハカラサルナリ然ラハ封書トハ如何ナルモノハナルヤト云フニ余、護謄等其如何ナル物ヲ以テスルヲ問ハス之アルカ爲メ特別ノ開封ノ行爲ヲ執ルニ非サレハ其内容ヲ見ル能ハサルニ至リタルモノヲ謂フ然ラハ電信、電話ニ關シ信書ノ秘密存スルヤ否ヤト云フニ先電信ニ付テ言ヘハ電信ハ之ヲ發スル人カ其文ヲ認メ郵便局ノ受付ニ差出シ郵便局ノ受付ノ官吏ハ接手ヲシテ其文ヲ發信セシムルモノナルニ依リ通常ノ場合ニ於テハ之ニ關シ秘密ナルモノ存スルコトナシ尤發信者カ特ニ暗號ヲ用ヒタル場合ニ於テハ秘密ニスルノ意思存スルコトヲ推定スヘキニ由リ此場合ハ憲法ノ所謂信書ノ秘密ノ範圍ニ屬スルモノト信ス又電話ニ關シテハ一見信書ノ文字中ニ入ラサルカ如シト雖均ク意思ヲ一方ヨリ他ニ通スルノ用ニ供セラルルモノナルヲ以テ電信、郵便ト等ク其秘密ヲ憲法ニ依テ保障セラルルノ精神ナリト考フヘキナリ而シテ電話ハ對話的ノモノニテ他人ニ聞カスコトヲ欲セサルヲ常ト爲スニ由リ反證ナキ限

ハ之ニ關シ秘密存スルモノト論定スヘキナリ(郵便法及電信法)

第七項 所有權不可侵權

憲法第二七條ニ曰ク「日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルルコトナシ」公益ノ爲メ必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ルト故ニ處分ヲ以テ所有權ヲ侵ス場合ニハ必法律ノ規定ヲ要ス然レトモ其處分ハ公益ノ爲メ必要ナルコトヲ條件トスルモノニシテ若公益ノ爲メ必要ナラサル場合ニ於テハ絕對ニ所有權ヲ侵スコトヲ得サルナリ於是此條文ニ關シ左ノ二箇ノ疑問ヲ生ス

(一) 命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルハ憲法第二七條ニ牴觸セサルヤ否ヤ、此問ニ答フルニハ先命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルコトハ所有權ヲ侵スコトナリヤ否ヤヲ論定セサルヘカラス然ルニ所有權ナル觀念ハ民法上ノモノナルニ由リ民法ニ就テ其主義ヲ究ムルニ民法第二〇六條ニハ「所有權ハ法令ノ制限内ニ於テ自由ニ其所有物ノ使用、收益及ヒ處分ヲ爲ス權利ヲ有ス」トアルニ由リ所有權ナルモノハ法律、命令ノ制限内ニ存在スルモノト謂フヘキナリ於是命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルモノ所有權ヲ侵スモノト爲ラサルナリ或ハ民法第二〇六條ノ法令ナル文字ハ法律及法律委任ニ因ル委任命令ヲ指スモノニシテ法律ニ根據ナキ命令ハ此中ニ包含スルコトナシト爲ス者アリト雖法令ナル文字ノ普通ノ主義ハ廣ク法律、命令ヲ指スモノニシテ民法第二〇六條ノ場合ニ限リ特ニ然ラスト論スルトキハ其反證ヲ必要トスルナリ如此命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルハ所有權ノ侵害ニ非ストスルトキハ憲法第二七條ニ牴觸スルコトナク隨テ命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルハ自由ニ爲シ得ルモノナリト答フルコトヲ得ルナリ命令ヲ以テ所有權ヲ制限スルノ一二ノ例ヲ上クレハ埋葬地ニ近ク土地ヲ有スル者ハ之ヲ距ル一定ノ距離内ニ

於テ自由ニ井戸ヲ穿ルコトヲ得ス又ハ一定ノ區域内ニ家屋ヲ有スル者ハ燃燬物ヲ以テ家屋ヲ蓋クコトヲ得ス等ノ制限ヲ命令ニ依テ受クルカ如シ

(二) 公益ノ爲メ必要ナル處分トハ如何ナル範圍ヲ有スルモノナリヤ 我憲法第二十七條第二項ニ該ル所ノ他國ノ憲法ノ規定及其憲法ノ條文ヲ沿革のニ週テ其基礎ト爲リタル規定ヲ見ルニ殆總テ所有權ヲ侵シ得ルノ處分ハ公益ノ爲メ必要ナルコトト賠償ヲ與フルコトヲ其要件ト爲スモノニシテ其處分ノ範圍ハ明言スルト否トヲ問ハス公用徵收ノ場合ナルコト明ナリ 例之普瀋西憲法第九條、白耳義憲法第一一條、奧地利憲法第五條、伊太利憲法第二十七條、葡萄牙憲法第八條、佛蘭西ノ人權宣言第一七條ノ如シ故ニ我憲法第二十七條第二項ノ場合ヲ解釋スルニ公用徵收ノ事ヲ指スモノナリト斷定スル人ナキニ非ナリナリ然ルニ我憲法第二十七條ニハ單ニ「公益ノ爲メ必要ナル處分」ト規定シテ公用徵收ノ事ナルコトヲ明言セザルノミナラス賠償ノ事ヲモ定メサルカ故ニ其處分ノ範圍ハ公用徵收ノ場合ノミニ非サルヤ明ナリ故ニ勿論警察ノ目的ニ出ヅル處分モ此中ニ包含スルモノナリト謂ハサルヲ得サルナリ蓋警察ノ目的モ其實公共ノ利益ヲ目的トスルモノナレハナリ或ハ此第二十七條第二項ノ處分中ニハ警察ノ目的ニ出ヅル處分ヲ包含セス警察ノ目的ニ出ヅル處分ニ付テハ法律ノ根據ヲ要セシテ當然所有權ヲ侵シ得ルモノナリト説ク者ナキニ非ス而シテ其説ノ根據ヲ見ルニ警察權ナルモノハ國家ノ成立上固有ニ存在スルモノニテ法律ノ根據ヲ俟テ始テ存立スルモノニ非サルナリ故ニ警察上ノ目的ニ出ヅル場合ハ法律ノ規定ニ依ルノ限ニ在ラスト云フニ在リ然レトモ憲法第二十七條第二項ハ如何ナル目的ヲ以テスルモ法律ニ依ラサル處分ヲ以テ所有權ヲ侵ス場合ヲ認メサルノミナラス殊ニ我國ノ如キ憲法ヲ以テ法律ノ規定ニ依ラサルヘカラサルモノヲ一方ニ列舉シ又他ノ一方ニハ憲法第九條ニ君主ノ警察命令權ヲ定ムルモ

其但書ニハ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得スト定メタルカ如キ國ニ於テハ適用スルヲ得サルモノトス(土收三二年法律七二號、行執二條、四條、戒嚴令、徵發令、傳染病豫防規則、一七年太政官八二號違幕地及埋葬取締規則違背者處分法、同年內務省乙四〇號違幕地及埋葬規則細則標準、衆議院議員選舉法一三條)

第八項 信教ノ自由權

憲法第二八條ニ曰ク「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」ト故ニ日本臣民タルモノハ安寧秩序ヲ妨ケス臣民タルノ義務ニ背カサル以上ハ信教ノ自由ヲ有スルモノナリト雖此第二八條ニハ法律ノ定ムル所ニ由リ若クハ法律ノ範圍内ニ於テノ文字ヲ存セサルカ故ニ命令ヲ以テ安寧秩序ヲ妨ケ若クハ臣民ノ義務ト抵觸スル宗教ハ之ヲ信奉スルコトヲ臣民ニ對シ禁スルコトヲ得ルナリ而シテ此信教ノ自由ハ如何ナル主旨ヲ包含スルモノナリ終リニ此條文ニ關シ注意スルコトヲ得ルナリ而シテ此信教ノ自由第四、禮拜ノ自由ヲ包含スルモノナリ終リニ此條文ニ關シ注意スヘキハ「臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」ノ文字ナリ臣民ハ一般ニ法律、命令ニ服從スルノ義務ヲ有シ若如何ナル命令ニ背クモ此臣民タルノ義務ニ背クモノナリト解釋スルトキハ信教ノ自由ノ保障ハ成立セザルコトト爲ルニ由リ此第二八條ノ「臣民タルノ義務ニ背ク」ノ中ニハ信教ノ自由ヲ制限スル命令ニ服從ヲ拒ム場合ヲ含マサルモノト解釋スヘキナリ

第九項 意思發表ノ自由權

憲法第二九條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行……ノ自由ヲ存ス」ト此言論トハ口頭ヲ以テ意思ヲ發表スルヲ稱シ著作トハ文書、圖書ヲ以テ意思ヲ發表スルヲ稱シ印行トハ器械的若クハ化學的方法ヲ以テ文書、圖書ヲ複製シ之ヲ頒布スルコトヲ稱ス即此三者ハ共ニ意思發表ノ方法ヲ指スモノニシテ總令文書、圖書ヲ以テ意思ヲ發表スルモ意思ヲ發表スルノ用ニ供セザレバトキハ此中ニ含ルモノニ非サルナリ例之文書、圖書ヲ書寫シタル陶器若クハ漆器ノ如シ又憲法ニ保障スル所ノ意思發表ノ自由ハ言論、著作、印行ノミニ關スルモノニシテ其以外ノ方法例之動作ヲ以テ意思ヲ發表スル場合ノ如キハ憲法ノ保障スル所ニ非サルナリ此中印行ノ自由ニ關シテハ多クノ憲法ニ於テ「檢閱主義ヲ用フルヲ得ス」ト定ムルノ例アリト雖我憲法ニ於テハ之ニ關シ何等ノ規定ナキニ由リ法律ヲ以テスル以上ハ檢閱主義ヲ執ルモ憲法ニ背クモノニ非サルナリ（我現行制度ハ届出主義ニ依リ檢閱主義ヲ執ラス）檢閱主義トハ警察官廳又ハ其他ノ官廳ノ檢閱ヲ經且其許可ヲ得ルニ非サレハ總テ出版物ヲ頒布スルコト能ハサルノ主義ヲ指スモノナリ蓋歐洲ニ於テハ專政時代ニ於テ此檢閱主義ヲ執リタル結果ヨリ生シタル弊害少カラサリシヨリ之ヲ禁止スルコトヲ憲法ニ掲ケタリト雖我國ニ於テハ此弊ヲ受ケタルコト少キヨリ憲法ノ明文ニ特ニ此趣意ノ禁止ヲ掲ケサリシモノナリ

第十項 集會及結社ノ自由權

憲法第二九條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ……集會及結社ノ自由ヲ有ス」ト是亦單ニ「法律ノ範圍内」ト規定シ其取締ノ方法ニ關シ何等ノ明文ヲ憲法ニ有セサルニ由リ法律ハ集會、結社ニ關シ許可主義ヲ執ルモ届出主義ヲ執ルモ全く其自由ニ屬スルモノナリ尤我現行ノ制度ハ届出主義ヲ執

債權者ノ遲滯ハ之ヲ嚴格ニ言ヘハ債權ノ效力トシテ論スキモノニ非ス寧債務ノ效力トシテ研究スヘキモノノ如シ然レトモ其性質ヨリ謂フトキハ債務者ノ遲滯ニ類似スル所アリ是民法ニ於テモ債權ノ效力ノ部分ニ規定シタル所以ナリ故ニ予モ亦便宜上茲ニ之ヲ説明スヘシ

債權者ノ遲滯トハ債務者カ債務ノ本旨ニ從ヒタル履行ハ提供ヲ爲シタルニ拘ラス債權者カ其履行ヲ受

タルコトヲ拒ミタルカ又ハ之ヲ受タルコト能ハサル場合ヲ謂フ故ニ債權者ノ遲滯ニ付テハ左ノ要件ヲ具備スルコトヲ要ス

具備スルコトヲ要ス

(ロイ) 債權ハ存在スルコト、債權者ノ遲滯ノ要件トシテ債權ノ存在スルコトヲ要スルコトハ言フ俟タス

債務者カ其債務ノ本旨ニ從ヒ履行ノ提供ヲ爲シタルコト、債務者カ債務ノ本旨ニ從テ履行ノ提供

ヲ爲ストハ債務者カ正當ノ時期正當ノ場所ニ於テ正當ノ目的ヲ債權者ニ給付スルヲ謂フ又履行ノ提

供ハ債務ノ本旨ニ從テ現實ニ之ヲ爲スコトヲ要ス即債務者ハ債務ノ履行ニ付自己ノ爲スヘキ總テノ行為ヲ完了スルコトヲ要ス但債權者カ其受領ヲ拒ミ又ハ債務者ハ履行ニ付債權者ノ行為ヲ要スル

キハ履行ノ準備ヲ爲シタルコトヲ通知シテ其受領ヲ催告スルヲ以テ足ルモノトス（四九三條）

債權者カ債務ノ履行ヲ受タルコトヲ拒ミ又ハ之ヲ受タルコト能ハサルコト、債權者ノ遲滯ノ場合

ニ於テモ債務者ノ遲滯ノ場合ノ如ク遲滯者ニ故意又ハ過失ノ存在スルコトヲ要スル立法例及學說ナ

キニ非ス然レトモ我民法ニ於テハ如此要素アルコトヲ要セス債權者ハ如何ナル事情ニ基テ拘ラス

履行ヲ受タルコトヲ拒ムカ又ハ之ヲ受タルコト能ハサルトキハ常ニ遲滯ノ責任ニ任スヘキモノナリ

（四二三條）

債權者ノ遲滯ノ效力ノ重ナルモノヲ舉ゲレハ……其……

- (イ) 損害賠償 債權者カ空ク債務ノ履行ヲ提供シ又ハ其提供後債權ノ目的物ヲ保管スル等ニ因テ損害ヲ生シタルトキハ其損害ハ債權者ノ行為ニ因テ生シタルモノナレハ債權者ニ於テ之ヲ賠償スヘキモノナリ(四二條)
- (ロ) 不履行ノ責任免除 債務者カ其債務ノ本旨ニ從テ履行ノ提供ヲ爲シタルニ拘ラス債權者カ其受領ヲ遲滞シタルトキハ債務者ヲシテ其提供ノ時ヨリ不履行ニ因テ生スル一切ノ責任ヲ免レシム(四九二條)
- (ハ) 供託 債權者カ債務ノ履行ヲ受クルコトヲ拒ミタルカ又ハ之ヲ受クルコト能ハサルトキハ債務者ハ債權者ノ爲ニ履行ノ目的物又ハ其代價ヲ供託シテ其債務ヲ免ルコトヲ得(四九四條、四九五條、四九七條)
- 右ニ列舉シタル效力中不履行ノ責任免除及供託ハ後ニ辨濟ノ規定ヲ説明スルニ當リテ之ヲ述フル所アル可シ

第四章 強制履行

既ニ述ヘタル如ク債務者カ債權者ノ命スル所ニ從ヒ債務ノ本旨ニ從ヒタル履行ヲ爲ササルトキハ債權者ハ或ハ強制履行ヲ求メ或ハ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得先強制履行ニ付述フヘシ

強制履行ニ關スル事情ハ民法第四一四條ニ規定セリ故ニ茲ニ同條ノ規定ヲ説明スルコトヲ要ス然レトモ予ノ信スル所ニ據レハ同條ノ解釋ハ民事訴訟法ト對照シテ考フルトキハ頗難問ニ屬ス

強制履行トハ抑何ヲ謂フヤ現今ノ法律制度ニ據レハ債務ノ履行ニ付通常當事者カ裁判所ニ請求スル所

ノモノハ訴ヲ以テ債務ノ履行ヲ請求スルカ若クハ強制執行ノ方法ニ依テ債務ノ履行ヲ請求スルコトアルノミ勿論此他支拂命令ノ申請又ハ競賣法ニ依ル不動産競賣ノ申請ト謂フカ如キモノ存在スルモ普通ノ場合ニテハ右ニ述ヘタル二ノ場合ニ限ル然ラハ第四一四條ニ所謂強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得ト謂フハ訴ヲ以テ債務ノ履行ヲ請求スルコトヲ謂フヤ或ハ亦強制執行ノ方法ニ依テ債務ノ履行ヲ請求スルコトヲ謂フヤ新民法ニ所謂強制履行ハ舊民法ノ所謂直接履行ト謂フ語ヨリ來ルカ如シ舊民法ニ於テ直接履行ト稱スルハ訴ヲ以テ債務ノ履行ヲ請求スルコトヲ謂フモノナルコト明ナリト信ス(財三三八三條一項、二項)然ルニ我新民法草案ノ理由書ヲ見ルトキハ「直接履行ナル用語ヲ改メテ強制履行トセリ蓋直接履行ハ通常間接履行即不履行ノ場合ニ於ル損害賠償ノ如キモノニ對スル用語ナリト雖間接履行ハ既ニ義務ノ履行ニ非サルニ依リ之ニ對シテ特ニ直接履行ナルモノヲ區別スヘキ理由ナキノミナラス本條ノ趣旨ハ債權者ヲシテ強制ノ方法ニ依テ債務ノ履行ヲ得セシムルニ存スルモノナレハ強制履行ナル用語ハ其趣旨ヲ表ハスニ最其當ヲ得タルモノナレハナリ」ト記載セラレタリ其文意明瞭ナラサルハ強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得ト云フ民法ノ規定ノ趣旨ハ強制執行ノ方法ヲ以テ債務ノ履行ヲ請求スルノ意ニ非サルカ如シ何トナレハ民法第四一四條ハ其性質ヨリ言フモ強制執行ニ關スル事項ヲ規定スル理由存在セズ加之民事訴訟法ノ規定ニ據レハ強制執行ハ原則トシテ裁判所ノ行為ニ非シテ執達吏ノ行為ナレハナリ(民事訴訟法五三二條)故ニ予ハ新民法第四一四條ニ所謂強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ謂フハ舊民法ノ直接履行ト同一ニ訴ヲ以テ債務ノ履行ヲ請求スルモノナリト信ス然レトモ特ニ之ヲ強制履行ト稱スルノ理由ハ債務者ノ任意ニ履行スル場合ヲ謂フニ非シテ判決ニ依テ債務ノ履行ヲ命スルカ爲ナリト信ス

債務ノ強制履行ハ何レノ國ニ於テモ認メラレタル主義ニ非ス昔羅馬法ニ於テハ此強制履行ヲ許サスシテ債務者カ債務ヲ履行セサルトキハ債權者ハ單ニ其不履行ニ因テ生シタル損害賠償ヲ請求シ得タルニ過キサリシカ如シ今日ニ於テモ尙英國ニ於テハ債務不履行ノ場合ニ於テハ債權者ノ救済方法ハ損害賠償ヲ以テ原則トス強制履行ハ單ニ其例外トシテ之ヲ認ムルニ過キス然レトモ近世ノ歐羅巴諸國ニ於テハ債務不履行ノ場合ノ救済法トシテ損害賠償ト強制履行トノ二ノ方法ヲ認メタリ我國ニ於テモ舊民法ハ此主義ニ依テ規定セリ新民法モ亦同一ノ主義ヲ採用シタリ

債務者カ任意ニ債務ノ履行ヲ爲ササルトキハ我民法ニ於テハ其強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得(四一四條一項)故ニ債務ノ強制履行ヲ爲スニハ先第一ノ要件トシテ債務者カ任意ニ債務ノ履行ヲ爲ササルコトヲ必要トス尙債務ノ強制履行ヲ裁判所ニ請求スト謂フハ既ニ述ヘタルカ如ク訴ヲ以テ其履行ヲ請求スルコトヲ謂フ例之甲カ乙ヨリ馬一頭ヲ買受ケタル場合ニ於テ乙カ其債務ヲ履行セサルトキハ甲ハ裁判所ニ對シテ訴ヲ提起シ其馬一頭ノ引渡ヲ請求シ得ルカ如シ

右ノ如ク新民法ニ於テハ債務不履行ノ場合ニ於テハ債權者ハ其救済法ノ一トシテ強制履行ノ請求ヲ爲スコトヲ得ルモ如何ナル債務ヲモ總テ其強制履行ノ請求ヲ爲シ得ルモノニ非ス舊民法ニ依レハ強制履行ヲ請求シ得ル場合ヲ債務者ノ身體ヲ拘束セスシテ履行セシムルコトヲ得ル場合ニ限ル(財産編第三八二條第一項)然レトモ此規定ハ一方ヨリ之ヲ謂ヘハ元來債務ハ總テ債務者ノ身體即其自由ヲ多少拘束スルモノナリ債務ノ種類ニ依テ拘束ノ程度ニ輕重ノ差異アルモ少シモ債務者ノ身體ヲ拘束セスシテ債務ノ強制履行ヲ爲スコトヲ得ルモノニ非ス亦他ノ一方ヨリ之ヲ謂ヘハ最初ニ債務者カ債務ヲ負擔シタルハ特ニ法律行為ニ因ル場合ノ如キハ自ら進テ身體ノ自由ヲ制限シタルモノナリ故ニ例之強制履行

ニ依リ多少身體ヲ拘束セラルルコトアルモ之カ爲ニ不當ニ自己ノ身體ヲ拘束セラレタリト謂フコトヲ得ス故ニ舊民法カ債務者ノ身體ヲ拘束スルト否トニ依リ強制履行ヲ許ス場合ト否ヲササル場合ヲ區別セントシタルハ適當ナラスト信ス新民法ハ是ト異ナリ債務ノ性質上ヨリ之ヲ區別シ其債務カ性質上強制履行ヲ許ス場合ニ於テハ強制履行ヲ許スモノトセリ(四一四條一項)債務ノ性質カ強制履行ヲ許ササル場合トハ事實強制履行ヲ許ス能ハサル場合ヲ云フ例之畫ヲ描ク債務ノ如キ又ハ家屋ノ取除キ地所ヲ明渡ス債務ノ如シ如此場合ニ於テハ債務者カ任意ニ債務ヲ履行スルニ非サレハ到底其強制履行ヲ請求スルコトヲ得サルモノナリ

右ノ如ク我民法ニ於テハ裁判所ニ對シ強制履行ノ請求ヲ爲スニハ債務者カ任意ニ履行セサルコト、債務ノ性質カ強制履行ヲ許スモノナルコトノ二ノ要件ヲ具備スルコトヲ要ス而シテ債務ノ性質カ強制履行ヲ許ササル場合ノ債權者ノ救済方法ハ果シテ如何ナルモノナルヤ此點ニ付テハ場合ニヨリテ異ナルコトアリ債務ノ性質カ強制履行ヲ許ササル場合ニ於テハ其債務カ作爲ノ目的トスルトキハ債權者ハ訴ヲ提起シテ債務者ノ費用ヲ以テ第三者ニ之ヲ爲サシムルコトヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得例之甲カ乙ニ對シテ家屋ヲ取除キ地所ヲ返還スル債務ヲ負擔スル場合ニ於テ甲カ任意ニ其債務ヲ履行セサルトキハ乙ハ訴ヲ提起シテ甲ノ費用ヲ以テ第三者ヲシテ家屋ヲ取除カシムルコトヲ得ル旨ノ判決ヲ求ムルコトヲ得但作爲ノ目的トスル債務アルモ第三者ヲシテ之ヲ爲サシムル能ハサルモノハ右ノ方法ニ依テ救済ヲ求ムルコトヲ得ス如此場合ニ於テハ債權者ハ損害賠償ノ請求ヲ爲スヨリ他ノ救済法ナシト信ス然レトモ彼ノ法律行為ノ目的トスル債務ノ如キモノハ是亦第三者ヲシテ爲サシムル能ハサルモノナルモ此ノ場合ニ於テハ特別ノ明文ニ依リ裁判ヲ以テ債務者ノ意思表示ニ代フルコトヲ得ルモノ例之甲カ乙ニ

對シテ一定ノ意思ヲ表示スル債務ヲ負擔スル場合ニ於テ甲カ任意ニ其意思表示ヲ爲ササルトキハ乙ハ訴ヲ提起シテ甲ニ對シテ意思表示ヲ爲スヘキ旨ノ判決ヲ受ケタルトキハ甲カ任意ニ其意思表示ヲ爲シタルトキト同一ノ效力ヲ生ス(四一四條二項民訴七三六條)債務ノ性質カ強制履行ヲ許ササル場合ニ於テ其債務カ不作爲ノ目的トスルトキハ債權者ハ訴ヲ提起シテ債務者ノ費用ヲ以テ其爲シタルモノヲ除却シ且將來ノ爲メ適當ノ處分ヲ爲スヘキコトヲ請求スルコトヲ得例之甲カ乙ニ對シテ或土地ニ建物ヲ建築セサル債務ヲ負擔スル場合ニ於テ甲カ建物ノ建築ヲ爲シタルトキハ乙ハ訴ヲ提起シテ甲ノ費用ヲ以テ其建築物ヲ除却セシムルコトヲ得且將來ニ於テ甲カ更ニ建物ヲ建築シタルトキハ一定ノ金額ヲ支拂フコトヲ要スル旨ノ判決ヲ求ムルコトヲ得(四一四條三項)

如此新民法ニ於テハ債務者カ任意ニ其債務ヲ履行セサルトキハ強制履行ヲ請求スルコトヲ得而シテ其債務ノ性質カ之ヲ許ササルトキハ作爲ノ目的トスル債務ニ付テハ債務者ノ費用ヲ以テ第三者ニ之ヲ爲サシムルコトヲ得又不作爲ノ目的トスル債務ニ付テハ債務者ノ費用ヲ以テ其爲シタルモノヲ除却シ且將來ノ爲メ適當ノ處分ヲ爲スコトヲ請求スルコトヲ得然レトモ若債務ヲ履行セサルニ因リ債權者ニ損害ヲ生シタルトキハ債權者ハ右ニ述ヘタルモノノ外向損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得(四一四條四項)

以上ハ予カ我民法第四一四條ノ解釋トシテ正當ナリト信スル所ヲ述ヘタルモノナリ若民法ノ精神カ果シテ予ノ信スル所ノ如キモノナルトキハ民事訴訟法ノ規定ト少シク異ナリタル所アリト思考ス民事訴訟法ノ規定ニ依レハ債權者ハ債務ノ性質カ強制履行ヲ許スト否トヲ問ハス如何ナル場合ニ於テモ訴ヲ以テ強制履行ヲ請求スルコトヲ得而シテ債務者カ敗訴ノ判決ヲ受ケタルニ拘ラス其債務ヲ履行セシム

債務ノ性質カ強制履行ヲ許ササルトキハ債權者ハ強制履行ノ方法トシテ作爲ノ目的トスル債務ニ付テハ債務者ノ費用ヲ以テ第三者ニ之ヲ爲サシムルコトヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得亦不作爲ノ目的トスル債務ニ付テハ債務者ノ費用ヲ以テ其爲シタルモノヲ除却シ且將來ノ爲メ適當ナル處分ヲ請求スルコトヲ得尙此場合ニ於テ裁判所ノ裁判ハ判決ニ非スシテ決定ナリ是大ニ民法ト異ナル所ナリト信ス(民訴七三三條)故ニ若予ノ解釋カ正當ナリトセハ民法ト民事訴訟法トハ其規定カ正ニ相抵觸セルモノト信ス

第五章 損害賠償

第一節 損害賠償ノ觀念

債務不履行ノ場合ニ於テ債權者ハ其救済方法トシテ或ハ強制履行ヲ求メ或ハ亦損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得ルモノナルコトハ屢述ヘタル所ノ如シ而シテ此損害賠償ノ請求ト謂フモノハ強制履行ヲ求ムルコトヲ得サル場合ニ之ヲ爲スル通例トス然レトモ或場合ニ於テハ強制履行ノ請求ト損害賠償ノ請求ト並立スル場合アリ例之債權者カ一方ニ於テハ強制履行ノ請求ヲ提起シ他ノ一方ニ於テハ債務履行ノ遅延ノ爲メ生シタル損害賠償ヲ請求スルカ如シ

損害トハ法律上ノ利益ノ喪失ヲ謂ヒ損害賠償トハ其利益ノ喪失ヲ填補スルヲ謂フ元來損害ハ種種ノ原因ニ依テ生ズ即或ハ天災ニ因リ損害ヲ蒙ルコトアリ或ハ他人ノ行爲ニ因テ之ヲ受クルコトアリ而シテ各人ノ損害ハ通常自己ノ負擔スヘキモノニシテ他人ヲシテ之ヲ賠償セシム得ヘキモノニ非ス故ニ他人ヲシテ損害ヲ賠償セシムルニハ必ス特別ナル原因アルコトヲ要ス法律上其原因ノ重ナルモノヲ舉クレ

ハ左ノ如シ

一 法律行為 當事者ノ意思表示ニ因リ他人ノ損害ヲ賠償スル場合アリ例之保險契約ノ如シ
二 不法行為 或人カ故意又ハ過失ニ因リ他人ノ權利ヲ侵害シタルトキハ之ニ因テ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任スヘキモノナリ(七〇九條)

三 債務ノ不履行 債務者カ其債務ニ從ヒタル履行ヲナササルカ又ハ其責ニ歸スヘキ事由ニ因リ履行不能トナリタルトキハ之ニ因テ生シタル損害ヲ賠償スヘキモノナリ(四一五條)

四 權利行使 權利ヲ行使スルカ爲ナルモ之カ爲ニ他人ニ損害ヲ蒙ラシメタルトキハ其損害ヲ賠償スルコトヲ要スル場合アリ(四二〇九條一項)

右ニ述ヘタル四ノ場合ノ中第一ハ民法ノ規定スル所ニ非ス亦第四ノ場合ニ於テハ民法ハ損害賠償ト謂フ語ヲ用ヒス特ニ賠償金ト云フ語ヲ用ヒタリ故ニ我民法上損害賠償ト謂ヘハ通常不法行為又ハ債務ノ不履行ニ因テ生シタル損害ノ填補ヲ謂フモノト解スルコトヲ得

右ノ如ク民法上損害賠償ハ不法行為ニ因ル場合トアリ然シテ我民法ニ於テハ此ノ二ノ場合ヲ區別シテ規定シタリ即不法行為ニ因ル損害賠償ハ不法行為ノ事ニ於テ規定シ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ハ債權ノ效力ノ部分ニ之ヲ規定セリ是民法ノ系統上已ムヲ得サル結果タルノミナラス二ノモノノ間ニハ法理ヲ異ニスルモノ在ルカ爲メナリト信ス故ニ予カ此章ニ述フル所ハ單ニ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ノミニ限ルモノナリ

損害賠償ノ請求權ノ性質ニ付テハ學者間ニ議論ノ存スル所ナリ或學者カ債務ノ不履行ニ因リ原債權ハ消滅シテ損害賠償請求權新ニ發生スルモノト爲ス彼ノ英美法カ違約ヲ以テ債權消滅ノ原因トナシタル

モ此ノ法理ニ基クモノト信ス然レトモ予ノ考フル所ニ依レハ我民法上不法行為ニ因ル損害賠償ノ請求權ハ不法行為ニ因テ原債權消滅シテ損害賠償ノ請求權新ニ發生スルモノト謂フコトヲ得ヘシ然レトモ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ニ於テハ債務者ノ不履行ニ拘ラス債權依然トシテ存在シ債權者ハ其強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ不法行為ノ場合ト同一ニ論スルコトヲ得サルモノト信ス彼ノ「デルンブルヒ」ハ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ノ場合ヲ説明スルニ債務者ノ不履行ノ場合ニ於テ損害ノ賠償ヲ爲スハ始ヨリ債權ノ目的中ニ包含スルモノニシテ損害賠償ハ原債權ノ目的ノ一ナリト予ハ我民法ニ於テ債務者ノ不履行ニ因ル損害賠償ノ效力ノ所ニ規定シタル趣旨ヨリ考フルモ右ノ「デルンブルヒ」ノ説ハ我民法ノ解釋上適當ナリト信ス

法律上廣ク制裁ト言フトキハ管ニ民法上ノ損害賠償ノミナラス刑法上ノ刑罰ヲモ包含ス乍併二者異ナル所ハ刑罰ハ行為者ニ苦痛ヲ與フルヲ主眼トスルニ反シ損害賠償ハ被害者ノ損害ヲ填補スルニ重キヲ置クニ在リ古代ノ法律ニ於テハ損害賠償ニモ一種ノ懲戒的ノモノヲ認ムルモノナキニ非スト雖我民法ニ於テハ固ヨリ懲戒的ノ損害賠償ヲ認メス

第二節 損害賠償ノ原因

前ニ述ヘタル如ク予カ茲ニ述フルハ債務者ノ不履行ノ場合ニ限リ不法行為ニ因ル損害賠償ニ及ハス故ニ其損害賠償ノ原因ハ何ナリヤト云フニ債務者ノ不履行是ナリ然ルニ民法ノ規定ニ據レハ其不履行ニ二ノ場合アリ即債務者カ其債務ノ本旨ニ從テ履行ヲ爲ササルトキト債務者ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因テ履行ヲ爲スコト能ハサルニ至リタルトキト(四一五條)

ノ如シ

法律行為 當事者ノ意思表示ニ因リ他人ノ損害ヲ賠償スル場合アリ例之保險契約ノ如シ
不法行為 或人カ故意又ハ過失ニ因リ他人ノ權利ヲ侵害シタルトキハ之ニ因テ生シタル損害ヲ賠
ルノ責ニ任スヘキモノナリ(七〇九條)

債務ノ不履行 債務者カ其債務ニ從ヒタル履行ヲナササルカ又ハ其責ニ歸スヘキ事由ニ因リ履行
トナリタルトキハ之ニ因テ生シタル損害ヲ賠償スヘキモノナリ(四一五條)

權利行使 權利ヲ行使スルカ爲ナルモ之カ爲ニ他人ニ損害ヲ蒙ラシメタルトキハ其損害ヲ賠償ス
トヲ要スル場合アリ(二〇九條一項)

語ヲ用ヒス 特ニ債金ト云フ語ヲ用ヒタリ故ニ我民法上損害賠償ト謂ヘハ通常不法行為又ハ債務ノ不
履行ニ因テ生シタル損害ノ填補ヲ謂フモノト解スルコトヲ得

如ク民法上損害賠償ハ不法行為ニ因ル場合ト履行ニ因ル場合トアリ然シテ我民法ニ於テ
此ノ二ノ場合ヲ區別シテ規定シタリ即不法行為ニ因ル損害賠償ハ不法行為ノ事ニ於テ規定シ債務ノ
履行ニ因ル損害賠償ハ債權ノ效力ノ部分ニ之ヲ規定セリ是民法ノ系統上已ムヲ得サル結果タルノミ

ノスニモノノ間ニハ法理ヲ異ニスルモノ在ルカ爲メナリト信ス故ニ予カ此章ニ述フル所ハ單ニ債
權ノ不履行ニ因ル損害賠償ノミニ限ルモノナリ

損害賠償ノ請求權ノ性質ニ付テハ學者間ニ議論ノ存スル所ナリ或學者カ債務ノ不履行ニ因リ原債權ハ
滅シテ損害賠償請求權新ニ發生スルモノト爲ス彼ノ英美法カ違約ヲ以テ債權消滅ノ原因トナシタル

此ノ法理ニ基キモノト信ス然レトモ予ノ考フル所ニ依レハ我民法上不法行為ニ因ル損害賠償ノ請求
權ハ不法行為ニ因テ原債權消滅シテ損害賠償ノ請求權新ニ發生スルモノト謂フコトヲ得ヘシ然レトモ

履行ニ不履行ニ因ル損害賠償ニ於テハ債務者ノ不履行ニ拘ラス債權依然トシテ存在シ債權者ハ其強制
行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ不法行為ノ場合ト同一ニ論スルコトヲ得サルモノ

信ス彼ノ「デルンブルヒ」ハ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ノ場合ヲ説明スルニ債務不履行ノ場合ニ於
テ損害ノ賠償ヲ爲スハ始ヨリ債權ノ目的ニ包含スルモノニシテ損害賠償ハ原債權ノ目的ノ一ナリト

ハ我民法ニ於テ債務ノ不履行ニ因ル損害賠償ヲ債權ノ效力ノ所ニ規定シタル趣旨ヨリ考フルモ右ノ
「デルンブルヒ」ノ説ハ我民法ノ解釋上適當ナリト信ス

律上廣ク制裁ト言フトキハ當ニ民法上ノ損害賠償ノミナラス刑法上ノ刑罰ヲモ包含ス乍併二者異ナ
ルハ刑罰ハ行為者ノ苦痛ヲ與フルヲ主眼トスルニ反シ損害賠償ハ被害者ノ損害ヲ填補スルニ重キヲ

於テハ固ヨリ懲戒ノ損害賠償ヲ認メス

第二節 損害賠償ノ原因

前ニ述ヘタル如ク予カ茲ニ述フルハ債務ノ不履行ノ場合ニ限リ不法行為ニ因ル損害賠償ニ及ハス故ニ
其損害賠償ノ原因ハ何ナリヤト云フニ債務ノ不履行是ナリ然ルニ民法ノ規定ニ據レハ其不履行ニ二ノ
場合アリ即債務者カ其債務ノ本旨ニ從テ履行ヲ爲ササルトキト債務者ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因テ履行
爲スコト能ハサルニ至リタルトキトノ二ナリ(四一五條)

一〇九條正誤表
一〇九條

0407

五五

スヘシ然レトモ此論結ハ少クトモ我民法ノ不法行為ニ因ル損害賠償ノ規定ト合セサルコトハ前ニ述ベタル所ニ由テ明ナリ予ノ考フル所ニ依レハ等々金錢ヲ以テ損害ヲ賠償スル場合ニ於テモ二異ナル場合ヲ區別シ得ヘシト信ス即金錢ヲ支拂フコトカ直接ニ債權ノ目的タル場合ト然ラサル場合ト之ナリ金錢ニ見積ルコトヲ得ル債務ノ損害ヲ賠償スル場合ニ於テハ金錢ヲ支拂フコトカ直接ニ債權ノ目的ナリ反之金錢ヲ以テ見積ルコトヲ得サル債務ノ損害ヲ賠償スル場合例之不法行為ニ因テ慰謝金ヲ支拂フ場合ニ於テハ其金錢ヲ支拂フコトカ直接ニ債權ノ目的ニ非シテ金錢ヲ支拂フニ因テ債權者ヲ慰藉スルコトカ直接ニ債權ノ目的タリ故ニ此意義ニ於テ金錢ヲ以テ不法行為ニ因ル財産以外ノ損害ヲ賠償スルコトヲ得ルモノナリト思惟ス而シテ予ハ債務不履行ニ因ル財産以外ノ損害ノ場合ニ於テモ亦同様ニ論スルコトヲ得ヘシト信ス即金錢ニ見積ルコトヲ得サル債務不履行ニ因ル財産以外ノ損害ヲ賠償スル場合ニハ金錢ヲ支拂フコトカ直接ニ債權ノ目的ニ非シテ債權者ヲ満足セシムルコトカ直接ニ債權ノ目的ナリト此意義ニ於テ不履行ニ因ル財産以外ノ損害ハ金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ得ト思考ス以上述ヘタル所ハ予カ債務ノ不履行ニ因ル損害ヲ金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ得ト謂フ我民法ハ解釋上及法理上ハ見解ナリ尙立法上ヨリ見ルモ民法ニ於テ金錢ニ見積ルコトヲ得サルモノト雖債權ノ目的ト爲シ得ルコトヲ認メタル以上ハ普通ノ債權ノ如ク是ヲ履行セサル場合ニ於テハ債權者ヲシテ或ハ強制履行ヲ請求シ或ハ損害賠償ヲ請求セシメラ其債權ヲ保護スルヲ正當ナリトス若此場合ニ於テ債權者ハ單ニ強制履行ヲ請求スルコトヲ得ルニ止リテ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得サルモノトセハ債務ノ性質上強制履行ヲ請求スルコトヲ得サルモノハ債務ノ不履行アルモ結局何等ノ救済ヲ求ムルコト能ハサル

ニ至ル然レニ學者或ハ不法行為ニ因ル債務ノ場合ハ暫措キ契約ニ因ル債務ノ場合ニ於テハ當事者ハ債務不履行ノ場合ヲ豫想シテ所謂違約金ノ契約ヲ爲シ以テ法律上ノ保護ヲ受クルコトヲ得ト主張ス然レトモ如此ハ總テノ場合ニ是ヲ望ムコトヲ得ス隨テ是等ノ點ヨリ見ルモ債務ノ不履行ニ因ル財産以外ノ損害ト雖金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ得ト爲スラ適當ナリトス

第三節 損害賠償ノ範圍

不履行ニ因ル損害賠償ノ原因ハ常ニ債務ノ不履行ナルコトハ右ニ述ヘタルカ如シ故ニ債務ノ不履行ト損害トノ間ニ於テハ必因果ノ關係アルコトヲ必要トス然レトモ其債務ノ不履行ニ因テ生シタル損害ハ如何ナル損害ト雖債務者ニ於テ全部是ヲ賠償スルコトヲ要スルモノナカ或ハ其賠償スヘキ範圍ニ付テ多少制限アルモノナリヤ否ヤ不履行ニ因ル損害賠償ノ範圍ニ付テ學說及立法上種種ノ見解アリ其重ナルモノヲ舉ケンニ

(イ) 不履行ニ因テ生シタル直接ノ損害ノミヲ賠償スルコトヲ要スト爲ス說 此說ニ依レハ債務ノ不履行ニ因テ生スル損害ヲ直接ノ損害ト間接ノ損害トニ區別シテ其直接ノ損害ハ是ヲ賠償スルコトヲ要スレトモ間接ノ損害ハ其賠償スルノ責ニ任セスト爲ス然レトモ所謂直接間接トハ單ニ程度ノ差ナルカ故ニ或場合ニ於テハ其區別甚困難ナリ加之間接ノ損害ニ在リテモ是ヲ賠償セシメサルノ必要ナシト信ス故ニ此說ハ適當ナラス

(ロ) 不履行ニ因テ生シタル避クヘカラサル損害ノミヲ賠償スルコトヲ要スト爲ス說 此說ニ依レハ不履行ニ因ル損害ヲ避クヘカラサル損害ト然ラサルモノトニ區別シテ其避クヘカラサル損害ノミヲ賠償

償スルコトヲ要スト爲スモノナリ然レトモ此避クヘカラサルモノナリヤ否ヤノ區別モ同ク程度ノ問題ニシテ明瞭ニ之ヲ區別スルコトヲ得ヌ加之避クヘカラサル損害ニ非サルモ是ヲ賠償スルコトヲ要セサルノ理ナシ故ニ此說モ亦適當ナラスト信ス

(一) 不履行ニ因テ生シタル豫見シ得ヘキ損害ノミヲ賠償スヘシトノ說 此說ニ依レハ不履行ニ因ル損害ヲ債務者ニ於テ豫見シ得ヘキモノト然ラサルモノトニ區別シテ其豫見シ得ヘキ損害ノミヲ賠償スルコトヲ要スト爲スモノナリ然レトモ豫見シ得ヘカラサル損害ト雖モ賠償セシムルコトヲ得サルノ理由ナシ故ニ此說モ亦不當ナリ

(二) 不履行カ近因トシテ生シタル損害ノミヲ賠償スヘシトノ說 不履行カ損害タル場合ヲ近因ト遠因トニ區別シテ不履行カ近因トシテ生シタル損害ノミヲ賠償スルコトヲ要スト爲スモノナリ然レトモ

此近因遠因ノ區別モ亦明ナラズ

(ホ) 不履行ニ因テ生シタル總テノ損害ヲ賠償スルコトヲ要スト爲ス說 此說ニ依レハ苟不履行ニ因テ生シタル損害ナル以上ハ如何ナルモノニテモ之ヲ賠償スルコトヲ要スト爲ス

我民法ノ規定ヲ見ルニ不履行ニ因ル損害ノ場合ト不法行為ニ因ル損害ノ場合トニ據テ異ナリ不法行為ニ因ル損害賠償ノ場合ニ於テハ前ニ述ヘタル最後ノ說ヲ採用セリ然レトモ不履行ニ因ル損害賠償ノ場合ニ於テハ右何レノ主義ヲモ採用セス原則トシテ債務ノ不履行ニ因テ通常生スヘキ損害ノミヲ賠償スルコトヲ要スルモノトセリ(四一六條一項)而シテ通常生スヘキ損害トハ果シテ如何ナル損害ナルカ所謂通常ト言ヒ特別ノ事情ト言フカ如キハ固ヨリ程度ノ差ニ過キサルカ故ニ明ニ之ヲ區劃スルコト困難ナリ然レトモ通常生スヘキ損害トハ若債務不履行ノ事實アリト假定セハ普通ノ智識及經驗ヲ有スル者

カ生シタリト爲ス損害ヲ謂フモノナリト信ス故ニ債務ノ不履行ニ因テ通常生シ得ヘキ損害タルトキハ其直接ノ損害タルト間接ノ損害タルト避クヘカラサル損害タルト然ラサルト豫見シ得ヘカラサル損害タルト然ラサルト近因ニ因ルト遠因ニ因ルトハ之ヲ問ハサルナリ反之假令債務ノ不履行ニ因テ生シタル損害ト雖通常生スヘキモノニ非サルトキハ之ヲ賠償スルノ必要ナシ

右ノ如ク我民法ニ依レハ債務不履行ノ場合ニ於テハ由是通常生スヘキモノヲ賠償スヘキヲ原則ト爲ス然レトモ是ニ對シテ例外アリ即特別ノ事情ニ因テ生シタル損害ナリトモ債務者カ其事情ヲ豫見シ又ハ豫見スルコトヲ得ヘカリシトキハ其賠償ヲモ請求スルコトヲ得ルモノナリ(四一六條二項)而シテ茲ニ特別ノ事情ヲ豫見シ又ハ豫見スルコトヲ得ヘカリシト謂フハ法律行為當時ニ於テ謂フモノニ非スシテ不履行當時ヨリ見テ是ヲ謂フモノナリトス例之甲カ乙ヨリ米千石ヲ買ヒテ更ニ之ヲ丙ニ賣渡ス契約ヲ爲シ尙甲ハ丙ニ對シテ不履行ノ場合ニ於テ多額ノ違約金ヲ特約シタル場合ノ如キモノナリ此場合ニ於テ乙カ甲ニ對シテ債務ヲ履行セザリシカ爲ニ甲ハ丙ニ對シテ其違約金ヲ支拂ヒタリトスルモ是不履行ニ因テ通常生スヘキ損害ニ非サルカ故ニ乙ハ原則トシテ其違約金迄モ賠償スルノ責任ナシ然レトモ其不履行當時乙カ甲丙ノ間ニ違約金ノ特約アル事實ヲ知リタルカ又ハ知り得ヘカリシトキハ甲ニ對シテ其違約金ヲモ賠償スヘキモノナリ

不履行ニ因ル損害賠償ノ範圍ニ付テ向一ノ注意ヲ要スヘキモノアリ即債務ノ不履行ニ付テ債權者ノ過失アル場合はナリ此場合ニ於テハ債權者ノ過失カ債務ノ不履行ニ及キス程度ニ因テ損害賠償ノ範圍ニ影響アリ例之債務ノ不履行ニ因テ損害ヲ生シタリトスルモ其不履行カ全ク債權者ノ過失ニ原因スルモノナルトキハ債權者ハ賠償ノ責任ヲ免ルヘキモノナリ反之債務ノ不履行カ一部ハ債權者ノ過失ニ因ル

モ一部ハ債務者ノ過失ニ因ルモノナルトキハ債務者ニ全ク賠償ノ責任ナシト謂フコトヲ得ス然レトモ其賠償額ハ多少是ヲ減縮スルコトヲ要スル場合アリ故ニ如此場合ニ於テ損害賠償ノ責任アリヤ否ヤ若アリトセハ其範圍ノ如何ヲ定ムルニハ裁判所ニ於テ是ヲ斟酌スヘキモノナリ(四一八條)

第四節 損害賠償ノ方法

損害賠償ノ方法ニ付テハ諸國ノ立法例必シモ一樣ナラス或ハ金錢ヲ以テ損害ヲ賠償スル立法ノミヲ認ムルモノアリ或ハ其外ニ原狀回復及金錢以外ノモノヲ以テ賠償スル方法ヲ認ムルモノアリ獨逸民法ノ如キハ原狀回復ヲ原則トシ例外ノ場合ニ於テ金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ許セリ故ニ獨逸民法ニ依レハ例之甲カ乙ヨリ或家屋ヲ買受ケタルニ乙カ故意ニ其家屋ヲ燒燬シテ履行不能トナリタルトキハ乙ハ甲ニ對シ損害賠償トシテ其家屋ト同様ノ家屋ヲ給付スルコトヲ要ス而シテ乙カ其給付ヲ爲ササルトキハ始テ甲ハ乙ニ對シ金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ請求シ得ヘシ我民法ニ於テハ是ト異ニシテ原則トシテ金錢ヲ以テ損害ヲ賠償スヘキモノトセリ(四一七條)故ニ彼原狀回復及金錢以外ノモノヲ以テ賠償スル方法ノ如キハ我民法ノ認ムル所ニ非ス而シテ此原則ハ不法行為ニ因ル損害賠償ノ場合ニモ準用セラ(七二二條一項)但此不法行為ニ因ル損害賠償ノ場合ニ於テハ名譽毀損ノ場合ニ例外トシテ原狀回復ノ方法ヲ認ム(七二三條)然レトモ若當事者カ別段ノ意思表示ヲ爲シ原狀回復又ハ金錢以外ノモノヲ以テ賠償スルコトヲ特約セルトキハ我民法ニ於テモ固ヨリ其意思ニ從フヘキモノナリ(四一七條)右ノ如ク我民法カ金錢ヲ以テ賠償スルコトヲ原則トシ獨逸民法ノ如ク原狀回復其他ノ方法ヲ認メサルハ此等ノ方法ナルモノハ種種ナル混雜ヲ生シ實際上却テ不便ヲ來ス虞アリトナスカ爲ナルヘシ而シテ

日本カ外國ニ對シテ領事裁判權ヲ有スルモノ三箇アリ支那、朝鮮及暹羅ニ對スルモノ是ナリ明治四年ノ日清條約ニ於テ相互ノ裁判權ヲ有シタリシカ明治二十九年ノ馬關條約第一條第六項ニ依リ支那カ日本ニ對スル領事裁判權ハ消滅シ日本カ支那ニ對シテ有スル領事裁判權ノミ殘存スルコト爲レリ此事ハ尙明治二十九年十月二十日ノ日清通商航海條約第三條ニ於テ更ニ明ニ約定シタリ朝鮮ニ對シテハ明治九年二月二十六日ノ日韓條約及明治十六年七月二十五日ノ日韓貿易規則第四二款ニ依テ領事裁判權ヲ有スルモノナリ

暹羅ニ對シテ我國カ領事裁判權ヲ有スルコトハ明治三十一年二月二十五日ノ日暹條約ノ議定書第一ニ左ノ如キ約定アルニ由テ起リタルモノナリ
暹羅國政府ハ暹羅國ノ司法改革ノ完了セラレル迄即刑法、刑事訴訟法、民法(但婚姻法及相続法ヲ除ク)民事訴訟法及裁判所構成法ノ實施ニ至ル迄日本國領事官ニ於テ在暹羅國日本國臣民ニ對シ裁判權ヲ執行スルコトヲ承認ス

日本ノ此等三國ニ在ル領事ノ有スル裁判權ハ日本ノ裁判官カ有スル裁判權ト同一ナルモノニ非ス例之領事ハ決シテ重罪ノ公判ヲ爲スコト能ハス又輕罪ノ裁判ニハ豫審ヲ用フルコトヲ要セス領事カ豫審ヲ爲シタル重罪ノ公判ハ長崎地方裁判所之ヲ管轄ス又領事カ地方裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シテ下シタル判決ニ對シ控訴若クハ抗告ヲ爲ス者アルトキハ長崎控訴院之ヲ管轄シ領事カ區裁判所ノ管轄ニ屬スル事項ニ關シテ下シタル判決ニ對シ控訴又ハ抗告ヲ爲シタル者アルトキハ長崎地方裁判所之ヲ管轄ス尙此事ニ關スル委細ハ明治三十二年三月法律第七十號領事官ノ職務ニ關スル件ヲ參照スヘシ

第三款 犯罪人引渡

犯罪人引渡トハ或犯罪人ハ現在スル國家カ該犯罪人處罰ノ權利ヲ有スル國家ニ之ヲ引渡スコトヲ謂フ
凡國家ハ司法上ノ主權ヲ有スルカ故ニ自國ニ在ル犯罪人ヲ外國ニ引渡ササルヘカラサルノ義務ヲ負フ
コトナシ然レトモ若犯罪人ノ引渡ヲ爲ササルトキハ處罰ノ權利ヲ有スル國家ハ自國ノ秩序ヲ紊サレナ
カラ之ヲ回復スルコト能ハサルヲ以テ今日ノ國際法ハ國家間ニ引渡條約ヲ締結セシメ該條約ノ規定ニ
因テ多クハ相互ニ犯罪人ヲ引渡スル義務ヲ負ハシム我國カ外國トノ間ニ純然タル犯罪人引渡條約ヲ
締結セルハ明治二十年ノ日米犯罪人引渡條約ノミ此他我國ト西班牙トノ間ニ通商條約ニ附屬セル議定
書第六號ニハ「兩締盟國ハ相互ニ犯罪人引渡ニ關スル特別條約ヲ締結スルコトニ同意ス尤該條約ノ締
結ニ至ル迄ハ該事項並ニ民事事件ニ關スル要求ノ執行ニ就キ締盟國ノ一方ハ他ノ一方ニ對シ最惠國ニ
既ニ許與シ若ハ將來許與セラルヘキモノト同一ナル權利及特權ヲ許與スヘキモノトス」トアリ仍テ日
本ト西班牙トノ間ニハ日米兩國間ノ犯罪人引渡條約ト同一ノ效果ヲ及スモノナリ此他明治十六年我國
ト朝鮮トノ間ニ約定シタル「朝鮮海岸ニ於テ犯罪ノ日本漁民取扱條規」ナルモノアリ然レトモ此條約ハ
純然タル犯罪人引渡條約ニ非ス尙此他日清兩國ノ通商航海條約第二四條ニモ犯罪人ノ引渡ニ關スル規
定アリ就テ觀ルヘシ

犯罪人引渡ニ關シテ二箇ノ例外アリ(第一)自國人ハ引渡サス(第二)政治上ノ犯罪人ハ引渡サストノコ
ト是ナリ

第一 自國人ハ引渡サストハ自國人カ外人ニ於テ犯罪ヲ爲シ通レテ自國ニ在ルトキ該外國ヨリ引渡ノ

請求ヲ受タルモ之ニ應セサルヘカラサルノ義務ナシトノ謂ナリ其理由ハ自國人ヲ他國ニ引渡シテ他國
ノ裁判權ノ下ニ服セシムルハ自國ノ獨立ニ害アリト謂フコト及他國ノ法律制度ヲ信用セサルコトノ
二箇ニ出ツルモノナリ然ルニ近來ニ至リ此例外ニ更ニ例外ヲ設ケ原則ニ復セシムルコト往往之アリ是
外國ノ法律制度ヲ信用スルノ結果ナリ例之英國ノ如キハ國內法ニ於テモ外國トノ條約ニ於テモ自國人
ヲ渡引スヘキコトヲ規定ス瑞西ノ如キハ國內法ヲ以テ自國人ヲ引渡サスト定ムレトモ或國例之北米合
衆國トノ條約ニ於テハ「自國人ヲ引渡スヘシ」ト約定セリ是瑞西ハ北米合衆國ノ法律制度ヲ信用シ瑞西
人ハ瑞西ノ裁判所ヨリ罰セラルルモ米國ノ裁判所ヨリ罰セラルルモ同一ナリト考フルニ出ツ我國ノ國
內法ニ於テハ自國人ヲ引渡サスト定ム條約ニ於テモ等ク此原則ヲ執ルト雖尙且之カ例外ヲ認ム日米犯
罪人引渡條約第七條ニ於テ「締約國ハ本條約ノ條款ニ因リ互ニ其臣民ヲ引渡スル義務ナキモノトス但
其引渡ヲ至當ト認ムルトキハ之ヲ引渡スコトヲ得ヘシ」ト規定セルカ如キ是ナリ國際法協會ノ議決モ
亦同一ノ基礎ノ上ニ在ル刑法ヲ有シ互ニ裁判所ノ構成ヲ信用スル國家間ニ於テハ自國人ノ引渡ヲ爲
スヲ可ナリト定メタリ故ニ將來ニ於テハ自國人タル犯罪人ヲ引渡サストノ原則ハ漸次消滅スルニ至ル
ヘシ

第二 政治上ノ犯罪人ハ引渡サストノ原則ハ政治上ノ犯罪ハ唯犯罪アリタル國家ノミヲ危害スルモノ
ニシテ各國全體ノ秩序ヲ紊スモノニ非サルカ故ニ犯罪人ノ現在國ハ之ヲ引渡ササルモ萬國ノ秩序ヲ害
スルコトナシト謂フニ出ツ千八百九十二年ノ國際法協會ノ議決モ亦此原則ヲ是認セリ古ニ於テハ普通
ノ犯罪人ハ之ヲ引渡サスシテ政治上ノ犯罪人ノミヲ引渡シタリ是犯罪人ハ友親國ノ國家ニ對スル敵ナ
リト謂フノ理由ニ出タルモノナリ然ルニ今日ニ於テ國際法ノ傾向ハ絕對ニ之ニ反對セリ政治上ノ犯

罪人ヲ以テ唯其國家ノミニ對スル秩序ヲ破リタルモノナリト解釋スルハ狹キニ失セリ何トナレハ一國ノ政治犯ニシテ世界各國ノ秩序ヲ害スルモノアレハナリ故ニ單ニ一國ノミヲ害スル政治犯人ハ引渡サント爲シ世界各國ノ秩序ヲ害スル政治犯人ハ引渡スヘシト謂フヲ總當ナリト思惟ス日米犯罪人引渡條約第四條ノ如キハ其前段ニ於テ「若レ請求ニ係ル人ヲ政事上ノ犯罪ニ付審判シ若クハ處刑セントスル」ノ目的ヲ以テ引渡ヲ請求シタリト認ムルトキハ其引渡ヲ爲ササルヘシト規定シ以テ絕對ニ政治犯人ノ引渡ノ主義ヲ探レリ

政治上ノ犯罪ニ純粹政治犯ト關係的政治犯トノ二種アリ關係的政治犯トハ政治上ノ犯罪ナレトモ併セテ常事犯ノ要素ヲモ包含スルモノナリ例之政府ヲ顛覆セントシテ大臣ヲ傷ケタル行爲ノ如ク又内亂ヲ起サンカ爲ニ國家ノ彈藥ヲ盜ミタル行爲ノ如シ如此犯罪ヲ爲シタル者カ他國ニ通レタルトキハ他國ハ之ヲ常事犯トシテ引渡スヘキカ將テ政治犯トシテ引渡サルヘキカノ問題ヲ生ス國際法協會ハ荷普通犯罪ノ要素ヲ備フルトキハ總令政治犯ナルモ引渡ヲ免ルコトヲ得ストセリ然レトモ今日ニ於ル一般ノ傾向ハ經微ノ常事犯ヲ含ムトキハ引渡ササルヘシト爲シ重大ナル常事犯ヲ包含スルトキニ限リ其政治犯ナルニ拘ラス引渡スヘシト爲ス例之瑞西ト獨逸トノ引渡條約ニ於テハ政治上ノ犯罪タル性質ヲ含ムトキハ引渡サスト謂フヲ原則トシテ殺人、文書、貨幣、紙幣ヲ偽造製造スルトキハ其政治上ノ事項ノ爲ニ爲シタルト否トヲ問ハス之ヲ引渡スヘシトセリ

犯罪人ノ引渡トハ如何ナル犯罪人ヲモ引渡スト謂フニ非ス多クノ綿密ナル條約ハ如何ナル犯罪ヲ爲シタル者ヲ引渡スヘキヤヲ明ニ約定ス是經微ナル犯罪者ヲ引渡スハ却テ煩雜ニ失スルノ虞アルヲ以テナリ例之日本犯罪人引渡條約第二條ハ引渡スヘキ犯罪トシテ左ノ十四箇ヲ列舉セリ

一 謀殺、謀殺未遂犯其他殺人罪

二 貨幣ノ偽造若クハ變造、偽造若クハ變造、貨幣ノ發行或ハ行使、公債證書其利札、銀行紙幣其他公衆ノ信用ヲ受ケヘキ證書類ノ偽造並ニ其發行若クハ行使

三 文書ノ偽造若クハ變造並ニ其行使

四 醫守盜即官吏又ハ監守人締約國一方ノ管轄内ニ於テ公金ヲ私用スル罪並ニ僑主ノ損害ト爲ルヘキ日雇人ノ監守盜

五 強盜若クハ五十弗以上ノ竊盜

六 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ夜間若クハ晝間他人ノ家宅ヲ破壞シ之ニ侵入スル罪

七 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ官衙、國立銀行、私立銀行、貯蓄銀行、財產管理會社及保險會社並ニ其他會社ノ家屋ヲ破壞シ若クハ破壞セシテ之ニ侵入スル罪

八 偽證及偽證教唆

九 強姦

十 放火

十一 國際法ニ於テ海賊ト認ムル罪

十二 引渡ヲ請求スル國ノ旗章ヲ掲ケタル船舶大洋航行中其船内ニ於テ犯シタル謀殺、謀殺未遂犯及其他ノ殺人罪

十三 惡意ヲ以テ鐵道、馬車鐵道、船舶、橋梁、家屋及公用建築物並ニ其他ノ建築物ヲ破壞シ若クハ破壞セント謀リ其所爲人命ニ危害ヲ生スヘキモノ

十四 銀行營業者、受託人、銀行若クハ財産管理會社ノ頭取役員ノ詐僞ニシテ現行法律ニ據リ罪トナルヘキモノ

引渡ノ原因ト處罰トハ必一致セサルヘカラス若然ラサルトキハ外國ヲ欺キテ引渡ヲ爲サシメタルコト爲ルヘクレハナリ但犯罪人カ引渡サレタル後新ニ犯シタル犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス犯罪人自ラ何レノ犯罪ニ付テ處罰セラルモ妨ナシト言フモ犯罪人引渡ノ關係ハ國家ト國家トノ間ノ關係ナルカ故ニ引渡ノ目的物タル一箇人ノ意思ニ因テ之ヲ動スコトヲ得サレハナリ

犯罪人カ數國ニ對シテ異リタル犯罪ヲ爲シ何レノ國ニ於テモ處罰ヲ受ケスシテ現ニ或國家ニ在ル場合ニ右犯罪地ノ數國カ引渡ヲ請求シタルトキハ犯罪人所在地ノ國家ハ何レノ國家ニ向テ之ヲ引渡スヘキヤ此事ニ關シテハ種種ノ學說アリ勿論數箇ノ請求國カ悉犯罪人所在地ノ國家ト引渡條約ヲ締結セルモノト看テ左ノ諸説アリ

第一 犯罪ノ最重キ國ニ引渡スヘシトノ説 其理由ハ最重キ犯罪ヲ犯サレタル國家ハ最多ク秩序ヲ害セラレタリト云フニ在リ而シテ其犯罪ノ輕重如何ハ引渡國ノ判斷ニ委スルモノナリ

第二 犯罪ノ最早カリシ國家ニ引渡スヘシトノ説 其理由ハ其國家カ最永ク秩序ヲ害セラレタリト云フニ在リ

第三 犯罪ノ最近キ國家ニ引渡スヘシトノ説 其理由ハ斯ル國家カ最多ク秩序ヲ害セラレタルコトヲ感スルニ在リト云フニ在リ

第四 距離ノ最近キ國ニ引渡スヘシトノ説 其理由ハ逃亡ノ憂ヲ防キ引渡ノ費用ヲ節減スルコトヲ得ヘシト云フニ在リ

此也該數國ノ中ニ犯罪人ノ本國アラハ其本國ニ引渡スヘシトノ説アリ我輩ハ最早ク引渡ヲ請求シタル國家ニ引渡スヘシト考テ何トナレハ斯ル國家ハ最早ク自國ノ權利ヲ主張シタルモノナレハナリ若數國カ同時ニ引渡ヲ請求ヲ爲シタルトキハ最重キ犯罪アリタル國家ニ引渡スコトヲ至當ナリト信ス犯罪人引渡條約ニ費用ノ負擔ヲ何レノ國家ニ負ハシムヘキヤ引渡ノ手續ヲ如何ニスヘキヤハ約定スルヲ常トス此等ハ總テ各條約ノ條項ニ就テ觀ルヘシ通商航海條約其他ノ條約中ニ脱走海員引渡ノ事ヲ約定スルモノアリ例之曰英條約第一四條ニハ左ノ如キ規定アリ

兩締盟國ノ一方ノ版國內ニ駐在スル他ノ一方ノ總領事、領事、副領事及代辦領事ハ自國ノ脱船人ヲ取戻ス爲メ法律ノ許ス所ノ補助ハ之ヲ地方ヨリ受クヘキモノトス

但海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノト知ルヘシ又日獨領事職務條約第一七條第一項ニハ左ノ如キ規定アリ

總領事、領事、副領事及代辦領事ハ本國軍艦又ハ商船ノ士官、役員、水夫其他ノ乘組員ニシテ脱艦、脱船ノ罪アル者又ハ脱艦、脱船ノ應ヲ以テ告訴セラレタル者ヲ右艦船又ハ本國ニ送還スル爲メ逮捕ヲ求ムルコトヲ得ヘシ

脱走海員ヲ引渡ス理由ハ一般犯罪人ヲ引渡スノ理由ト異ナルモノアリ何トナレハ商船ノ水夫、火夫等カ脱船スルハ單ニ契約違反ト爲ルノミニシテ犯罪ヲ構成スルモノニ非サレハナリ又軍艦ノ水夫等カ脱船スルモ唯軍事上ノ犯罪ヲ構成スルノミニシテ他國ノ安全ヲ害スルコトナケレハナリ是故ニ脱走海員引渡ノ理由ハ之ヲ他ニ求メサルヘカラス其理由ハ引渡ヲ受ケテ處罰セシカ爲ニ非スシテ船舶航行ノ安

全ト利益トヲ得シカ爲メナリト謂フニ歸スヘシ故ヲ以テ脱走海員引渡ニ關スル事ハ之ヲ犯罪人引渡條約中ニ約定セシテ通商航海條約及領事職務條約中ニ之ヲ定ム其引渡ニ關スル原則ト稱スヘキモノハ船ノ所屬國ノ領事ヨリ其他ノ官廳ニ書面ヲ以テ引渡ヲ請求スルコト、脱走海員カ其船ニ屬スルモノナリコトノ證明ヲ爲スコト、脱走海員カ滞在在地ニ於テ犯罪ヲ爲シタルトキハ刑ノ執行ヲ終ルマテ引渡ヲ受タルコトヲ得タルコト、自國人ナレハ引渡ヲ爲サルコト等シナリ
明治二十九年ノ日清通商航海條約第二四條ノ規定ノ如キモ脱走海員ノ引渡ニ非スト雖負償ヲ辨償セサル者ヲ引渡スヘシト定タリ是均シテ犯罪人引渡以外ノ引渡ノ一種ニ屬スルモノナリ

第四款 混合裁判

混合裁判トハ自國ハ裁判官ト外國人タル裁判官トカ混合シテ判決ヲ與フルモノヲ謂フ國家ハ裁判ニ關スル自主獨立ノ權利ヲ有スルカ故ニ外國人ヲ裁判官ト爲サルヘカサルノ義務ナシ故ニ混合裁判ハ條約ヲ俟テ始ラ生スル所ノ一種ノ異例ナリ我國ノ舊時ニ於テ外國例之支那トノ條約ニ基キ外國領事ヲ我行政官ノ爲スル所ノ裁判ニ立會ニ依テ判決ヲ下シタルコトアリト雖如此立會裁判ハ茲ニ所謂純然タル混合裁判ニ非ス我國ニ於テ明治四年以降數回外國トノ條約改正案ニ混合裁判所ヲ設クントシタルコトアリト雖幸ニシテ一タヒモ成功スルコトナカリキ
外國ニ於ル混合裁判所ノ最重ナルモノハ埃及ナリ埃及ニ於テ混合裁判所ノ設ケラレタルハ千八百六十七年、六十九年、七十年及七十三年ノ條約ニ由ル此處ニ至リ英、佛、獨、奧、伊ノ五箇國ハ埃及及混合裁判所構成法ナルモノヲ作リ第一審ノ混合裁判所ヲ「アレキサンドリヤ」「カイロ」「イスマイラ」ノ三處所ニ

置キ歐洲人四名、埃及人三名ヲ裁判官ト爲シ終審裁判所ハ「アレキサンドリヤ」ノミニ之ヲ置キ歐洲人七名、埃及人四名ヲ裁判官ト爲スヘキコトヲ定タリ此等歐洲人裁判官ハ埃及副王ノヲ任命スルモノナレトモ以上ノ五箇國ノ發議ニ反對スルコト能ハサルナリ而シテ此裁判所ハ埃及ノ法律ヲ適用スルモノニ非シテ歐洲諸國カ定タル埃及法典ナルモノヲ適用スルナリ又混合裁判所ハ千八百七十六年ニハ向フ五箇年間之ヲ繼續セシムヘシト定タリシモ其後永久ニ斯ル裁判所ヲ置クヘシト定メタリ
此混合裁判所カ有スル所ノ權限左ノ如シ

第一 民事

一 埃及ニ在ル不動産又ハ不動産ニ關スル權利カ爭ノ目的物タルトキ

第二 刑事

一 歐羅巴人ト埃及人トノ間ノ總テノ爭訟

一 總テノ海警罪

二 混合裁判所又ハ混合裁判所ノ裁判官ニ對スル重罪及輕罪

三 混合裁判所ノ判決ノ執行ヲ妨害セントスル目的ヲ以テ爲シタル重罪及輕罪

四 混合裁判所ノ裁判官カ其職務ニ關シテ犯シタル重罪及輕罪

混合裁判所ノ權限以外ニ在ルモノハ悉純然タル埃及ノ裁判所即埃及人ノミヲ以テ組成スル裁判所ノ權限ニ屬スルモノナリト誤解スヘカラス何トナレハ埃及及外國トノ間ニハ領事裁判權ニ關スル條約アリテ領事モ亦或事項ニ關シテ裁判權ヲ有スレハナリ故ニ混合裁判所ノ權限ノ下ニモ屬セス領事裁判權ノ下ニモ立タルモノニ限リ始テ純然タル埃及ノ裁判所ノ權限ノ下ニ立ツモノナリ

此他土耳其及「サモア」ニモ混合裁判所アリ

第三節 行政權

第一款 宣戰媾和ニ關スル行政權

國家カ自主獨立ノ權利ヲ有スト謂ヘハ當然宣戰媾和ノ權利ヲモ含ムモノナリ隨テ又國家ハ軍隊ノ運動ヲ自由ニスルノ權利ヲモ有ス其例外トシテ最著シキモノハ永久局外中立國ノ如シ同盟ニ關スル事ノ如キモ亦宣戰媾和ニ關スル自主權ノ中ニ含マルモノナリ同盟ニ關スル事ハ條約ニ由テ生スルモノナリ同盟ノ大原則トスヘキコトハ互ニ敵意ヲ除クコト及一定ノ政治上ノ目的ノ爲ニ共同ノ行爲ヲ爲スヘシト謂フコト是ナリ其他同盟ヨリ生スル權利義務ノ關係ハ總テ各條約ニ就テ見ルノ外ナシ例之平時ヨリ既ニ同盟スルカ又ハ戰時ニ至テ始テ同盟ヲ爲スカ同盟ノ範圍カ陸上ノミニ限ルカ海上ニモ及フカト謂フカ如キ攻擊同盟ナルカ防守同盟ナルカ又ハ中立同盟ナルカト謂フカ如キハ一該條約ニ就テ見ルノ外ナシ例之明治二十七年八月ノ日本朝鮮間ノ同盟條約ノ如キハ戰時ヲ限トシタルモノニシテ同盟國雙方カ如何ナル權利ヲ有シ如何ナル義務ヲ負フヘキヤニ付テハ唯第二條ニ「日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及其糧食準備ノ爲メ及フヘク便宜ヲ與フヘシ」トノ規定アリタルノミ現行ノ日英同盟條約ハ既ニ平時ニ於テ存在スルモノニシテ締盟國ノ一方カ第三國ト戰爭ヲ開クトキハ他方ハ中立ヲ守ルヘク第三國カ二箇以上ト爲リタル場合ニ他方ハ一方ニ與シテ戰闘ニ當ルヘキコトヲ約セリ此他三國同盟條約ノ如キハ同盟國カ第三國ヨリ攻擊ヲ受クレハ他方ハ中立ヲ爲スヘキモ露國ヨリ攻擊ヲ受クレハ總軍力ヲ以テ之ヲ援助スヘキコトヲ定ム同盟國ノ義務トシテ尙一般ニ舉クヘキコト

ハ同盟國ノ一方カ他方ト分レテ自由ニ媾和條約ヲ結フコト能ハサルコト是ナリ

第二款 交通ニ關スル行政權

第一 鐵道ニ關スル交通行政權

各國ハ此事ニ關シテ自由獨立ノ行政權ヲ有スルモノナレトモ若絶對無限ニ此權利ヲ行ハシムルトキハ實際ニ不都合アルヲ以テ各國ハ他國ノ機關車、客車等カ内國ニ入ルコトヲ承認セサルモノナリ國境ニ停車場ヲ設ケシムルノ權利、境界ニ於テ鐵道ヲ接續セシムル權利ノ如キハ多ク外國ニ對シテ之ヲ認ム而シテ獨條約ヲ以テ兩國カ如此事ヲ定ムルノ外向多數ノ國家カ鐵道ニ關スル國際的同盟條約ヲ締結シタルモノアリ千八百九十年ノ歐羅巴大陸諸國カ締結シタル鐵道貨物交通同盟ノ如キ即是ナリ

第二 船舶ニ關スル行政權

自國ノ船舶ニ對スル行政上ノ主權ハ各國皆之ヲ有ス船舶ハ總テ國籍ヲ有スルモノナリ船舶ニ國籍ヲ有セシムル必要ハ船舶ノ本國ヲシテ之ヲ保護セシメンカ爲メナリ國家ハ何レノ地ニ在ル自國人ニ對シテモ保護ヲ與フルカ如何レノ處ニ在ル自國船舶ニ對シテモ亦保護ヲ與フヘキモノナリ如何ナル船舶自國ノ船舶トスルヤニ付テハ各國皆國法ヲ以テ之ヲ規定ス我國ノ明治三十二年三月法律第四六號船舶法第一條ノ規定ノ如キ其他軍艦外務令ノ規定ノ如キ海軍旗章條例ノ如キ皆是ナリ多ク外國ニ於テハ自國船舶タルノ要件トシテ自國ニ於テ製造セラレタルコト、船長カ自國人ナルコト、乗組員ノ多數カ自國人ナルコト等ノ事ヲ列舉スト雖我國ノ法律ニ於テハ斯ル規定ナシ

國法上内國ノ船舶ト爲スモノト雖或外國カ之ヲ内國ノ船舶ナリト認メタル虞アリ故ヲ以テ多クノ國家

ハ外國ノ條約ヲ結テ内國法ニ依テ内國ノ船舶トスルモノヲ外國ヲシテ内國船舶ト認メシムヘキコトヲ約
定ス例之曰英通商航海條約第一三條ノ規定ノ如キ是ナリ此種ノ規定ハ船舶ノ國籍ノ積極的衝突ヲ防ク
ニ便ナリト雖消極的衝突ヲ防クニハ不便ナリ例之日本人ト獨逸人トカ株式會社ヲ設定シ取締役ノ一部
分ヲ日本人トシ其他ノ部分ヲ獨逸人トスルコトハ日本ノ法律ニ依テ斯ル會社カ所有スル船舶ハ日本船
ニ非ス又獨逸ノ法律ニ依テ斯ル會社カ所有スル船舶ハ獨逸船ニ非サルコトト爲ルヘシ條約カ斯ル消極
的衝突ヲ矯ムルニ足ルヘキ規定ヲ設ケサルハ缺點ナリ
船舶ノ國籍ヲ表彰スルモノハ旗及船舶國籍證書ナリ旗ハ外面ヨリ船舶ノ國籍ヲ表彰スルモノニシテ船
舶國籍證書ハ船ノ内部ニ於テ其國籍ヲ表彰スルモノナリ旗ハ遠方ヨリ其國籍ヲ表彰スルニ便ナリト雖
詐欺ノ方法ヲ用ヒテ他國ノ旗ヲ掲タルノ虞アリ是内部ニ於テ國籍證書ノ必要アル所以ナリ
船舶ノ性質ヨリ區別シテ國家ヲ代表セサル船舶ト代表スル船舶トノ二トスルコトヲ得ヘシ英國ノ學者
ハ之ヲ私船、公船ノ二者ニ別テ獨逸ノ學者ハ之ヲ商船ト軍艦トノ二者ニ別テ或船ヲ商船ニ準セシメ又
或船ヲ軍艦ニ準セシム
船舶ヲ其所在ニ依テ區別スレハ大洋ニ在ル船舶及領海ニ在ル船舶ト爲スコトヲ得ヘシ茲ニ領海ニ在ル
船舶ト謂フハ他國ノ領海ニ在ル自國ノ船舶ヲ指スモノニシテ自國ノ領海ニ在ル自國ノ船舶ハ全然自國
ノ主權ニ服従スルモノナルカ故ニ國際法ノ問題トシテ特別ノ説明ヲ爲スコトヲ要セス
以上ノ説明ニ依テ國際法上ヨリ解決スヘキ船舶ノ問題ヲ列舉スレハ左ノ如シ

- 第一 大洋ニ在ル國家ヲ代表セサル船舶
- 第二 他國領海ニ在ル本國ヲ代表セサル船舶

第三 大洋ニ在ル國家ヲ代表スル船舶

第四 他國領海ニ在ル本國ヲ代表スル船舶

(第一) 大洋ニ在ル國家ヲ代表セサル船舶 大洋ハ自由ニシテ何レノ國ト雖其上ニ主權ヲ及スコト能
ハサルモノナリ故ニ大洋ニ在ル不代表船ハ其内部ニ於テ本國ノ法律ニノミ服従シ又本國ニ歸來シタル
場合ニ大洋ニ於テ爲シタル行爲ニ付テ本國ノ法律ニ服従スルノミ然ルニ此原則ニ對シテ數箇ノ例外ア
ル之ヲ列舉スレハ左ノ如シ

(一) 海賊船ニ對シテハ如何ナル國家ノ代表船ト雖大洋ニ於テ主權ヲ及シ之ヲ捕獲スルコトヲ得ヘシ蓋
海賊船ハ世界各國ノ秩序ヲ紊ルモノナレハナリ如何ナルモノヲ海賊ト謂フヤニ關シテハ我國ノ軍艦外
務令第三一條ハ左ノ如キ規定ヲ設テ

本令ニ於テ海賊ト稱スルハ海洋ニ於テ左ニ掲クル二項ノ一ニ該ルヘキ行爲アルモノヲ云フ

- 一 何レノ主權ニモ屬セス又ハ何レノ主權者ヨリモ免許ヲ得スシテ暴行掠奪ヲ爲スモノ
- 二 交戰國雙方ヨリ特許狀ヲ得テ捕獲ヲ爲スモノ

此規定ニ依レハ海洋即大洋ニ於テ爲シタルモノニ非サレハ之ヲ海賊ト認メス領海内ニ於ル海賊ハ軍艦
外務令ニ所謂海賊ニ非ス蓋海賊ニ對シテハ萬國ノ代表船カ主權ヲ及スコトヲ得ルモノナルカ故ニ他國
ノ領海内ニ於テ或國家カ主權ヲ及サントテ防カシカ爲ニ特ニ「海洋ニ於テ」ト限リタルモノナリ又
「何レノ國ノ主權モ屬セス又ハ何レノ主權者ヨリモ免許ヲ得スシテ」ト定メタルハ如何ナル國家モ海賊
ノ行爲ニ對シテ責任ヲ負フコトナキ旨ヲ示シタルモノナリ故ニ若或國家ノ船舶カ國家ノ命令ニ從テ海
賊ト同一ナル行爲ヲ爲ストキハ其船舶ノ本國カ責任ヲ負フヘキモノニシテ他國ハ該船舶ヲ自由ニ處分

スルコト能ハサルモノナリ第二號ノ交戰國雙方ヨリ特許狀ヲ得テ捕獲ヲ爲ス者ヲ海賊ト認ムルニ關シテモ亦近世ノ國家ハ異論ヲ挾ムコトナシ此他或學者ハ海賊ノ定義中ニ收益ヲ目的トスルコト或ハ動產ヲ掠奪スルコト等ヲ加フト雖我國ノ法律ハ之ヲ認メス

海賊船ニ對シテハ如何ナル國家ノ代表船モ其進行ヲ止メ之ニ臨檢シ之ヲ搜索シ又之ヲ拿捕シ其拿捕シタル艦船ハ本國ノ法律ニ從テ之ヲ處分ス即其船舶及貨物ハ之ヲ國家ニ沒收シ原所有者ノ明ナル貨物ハ之ヲ原所有者ニ還付シ人員ハ捕ヘタル艦船ノ本國法ニ依テ之ヲ處罰シ旗ヲ有セサル船及承認セラレサル旗ヲ掲グル船詳言スレハ何レノ國家ノ旗ニモ非サル旗ヲ掲グル船舶ニ對シテハ他ノ代表船ハ旗ヲ示スヘシト請求スルコトヲ得斯ル請求ヲ受タルニ拘ラス之ヲ拒否スルモノハ海賊船タルノ嫌疑ヲ免ルコトヲ得ス

(二) 奴隸賣買船

(三) 國內ニ於ル犯罪者ヲ載セタル船舶アルトキハ該國家ハ之ヲ追及シテ公海上ニ於テ之ヲ捕フルコトヲ得ヘシ此例外ハ學者ノ遠クヨリ認タル所ナリ千八百九十五年三月巴里ニ開キタル國際法協會ニ於テモ同年十月「ブリュクセル」ニ開キタル國際法協會ノ議決モ亦此例外ヲ認タリ此例外ノ認ラル要件トスヘキモノヲ該議決ニ從テ列舉スレハ左ノ如シ

- 第一 該船舶カ自國ノ領地内又ハ自國ノ領海内ニ於ル犯罪者ヲ載スルコトヲ要ス
- 第二 該船舶カ自國ノ領海ヨリ出帆シタルモノナルコトヲ要ス
- 第三 該船舶ヲ追及スル領海ノ所屬國ノ代表船カ該領海内ヨリ追及スルコトヲ要ス
- 第四 右追及ノ行爲ニハ中斷ナキコトヲ要ス

第五 該行爲カ公海内ナルコトヲ要ス反面ヨリ言ヘハ該船舶ノ本國又ハ第三國ノ領海内ニ於ル行爲ニ非サルコトヲ要ス

第六 形式上ノ要件トシテ捕ヘタル船ノ本國ヨリ捕ヘラレタル船ノ本國ニ向テ通知スルコトヲ要ス明治二十八年即巴里及「ブリュクセル」ニ於テ國際法協會カ以上ノ如キ議決ヲ爲シタル年ニ我國ニ於テ此事ニ關スル一箇ノ事實アリタリ彼ノ「テールス」號事件即「テールス」號ハ臺灣ノ港ヨリ臺灣ニ於ル犯罪者劉永福ヲ載セテ臺灣ヲ出帆シタルニ公海上ニ於テ之ヲ追及セル我軍艦八重山ノ爲ニ搜索セラレタリ然レトモ船中ニ犯罪者ヲ見出スコト能ハストノ理由ヲ以テ一旦之ヲ解放シ後ニ至テ更ニ之ヲ搜索シタリト云フコト事實ナルカ如シ若以上述ヘタル所ヲ事實ナリトスレハ上掲第四ノ要件ニ違ヒタルモノナリ

(四) 戰時ニ於テ公海ノ上ニ敵國ノ船舶ニ對シテ戰爭權ヲ及ヌヲ得ルコト竝ニ中立國ノ船舶ニ對シテモ戰爭權ヲ行使スルヲ得ルコトハ何人ト雖異議ヲ挾ムコトナシ故ニ大洋ニ於テ他國ノ船舶ノ上ニ主權ヲ及スコトヲ得ストノ原則ハ平時ニ限ルモノト知ルヘシ

(第二) 他國ノ領海内ニ於ル船舶ニシテ本國ノ代表セザルモノ 他國ノ領海内ニ在ル船舶ハ該他國ノ主權ニ服從スヘキモノナリ然レトモ該他國ノ主權ニ服從スト云フコトハ該他國ノ主權ノミニ服從スト云フコトニ非ス併セテ船舶ノ本國ノ主權ニモ服從スルコトヲ妨ケサルナリ但本國ノ主權ト船舶所在地ノ主權トカ衝突スルコトキハ船舶所在地ノ主權ニ讓ラサルヘカラス例之船内取締規則ノ如キ船長ノ船員ニ對スル懲罰權ノ如キハ船舶所在地ニ於テ多シハ船舶ノ本國法ニ依ルコトヲ承認スルモノナリ明治ノ初年ニ就露ノ船舶カ奴隸ヲ搭載シテ神奈川ノ港ニ碇泊シタルコトアリ此場合ニ日本ノ國家カ其國法ニ

於テ奴隸ヲ認メストノ理由ニ依リ該船内ノ奴隸ヲ悉解放シタルハ正當ノ行爲ナリ何トナレハ祕露ノ船舶ハ日本ノ領海内ニ於テ日本ノ法律ニ從ハスシテ祕露ノ法律ニ從フコトヲ得ヘシト主張スルノ權利ヲ有セザレハナリ

唯沿岸海ヲ單ニ通過スル船舶ハ該沿岸海所屬國ノ法律ニ服従スルコトヲ要セス是一般ノ國際法トシテ認ラルル所ナリト雖英國ニ於テハ「フランconi」號事件以來此原則ニ從フコトヲ認メス

(第三) 公海内ニ於ケル船舶ニシテ本國ヲ代表スルモノ 本國ヲ代表セサル船舶ト雖公海内ニ於テハ何レノ國ノ主權ノ下ニモ立タサルモノナリ本國ヲ代表スル船舶カ公海内ニ於テ何レノ國ノ主權ノ下ニモ立タサルハ論ヲ俟タス但交戰國一方ノ代表船カ公海内ニ於テ交戰地方ノ代表船ノ爲ニ攻撃ヲ受タルコト免レサルハ説明ヲ俟タス

(第四) 他國領海内ニ在ル船舶ニシテ本國ヲ代表スルモノ 代表船ノ最重モナルモノハ軍艦ナリ軍艦トハ何ソト謂フコトニ關シ國際法協會ノ議決ヲ舉クレハ左ノ如シ

現役海軍將校ノ指揮ヲ受ケ海軍軍人ノ乗組ミ海軍旗ヲ掲クルコトヲ得ル一切ノ船舶ハ之ヲ軍艦ト看做ス

我國ノ軍艦外務令第二條ニハ「本令ニ於テ軍艦ト稱スルハ海軍旗章條例第一三條第一四條第一八條第一九條ニ依リ旗旗ヲ掲クル艦艇一又ハ二以上ヲ謂ヒ指揮官ト稱スルハ軍艦ノ最高指揮官ヲ云フ」ト規定セリ

我輩ノ考フル所ニ依レハ軍艦タルノ要素ハ左ノ如シ

第一 軍艦ハ本國ヲ代表スルモノナラサルヘカラス彼ノ軍艦ハ本國ノ土地ノ延長シタルモノナリト

ノ說ハ我輩ノ取ラサル所ナリ何トナレハ本國ノ土地延長スルトハ事實ニ於テアリ得ヘカラサル事ナレハナリ

第二 軍艦ハ船タルノ實體ヲ具ヘサルヘカラス

第三 軍艦ハ武裝シタルモノナラサルヘカラス但武裝シタル船舶ハ悉軍艦ナリト云フニ非ス例之商船カ海軍ニ備ヘンカ爲ニ武裝スルモ之カ爲ニ軍艦ト爲ルコト能ハス又軍艦カ軍艦タルコトヲ免レ

シカ爲ニ一時武裝ヲ解クモ之カ爲ニ軍艦タルコトヲ失フモノニ非ス

第四 軍艦ハ海軍ノ軍人ノ指揮シ又海軍ノ軍人カ之ニ乗組ムコトヲ要ス故ニ國際法協會ノ議決スルカ如ク其乗組員カ現役ニ服スル者ナルコトヲ要スルニ非ス

第五 軍艦ハ軍艦旗ヲ樹クルコトヲ要ス但詐僞ノ爲ニ一時軍艦旗ヲ撤スルモ之ニ因テ軍艦タルノ性質ヲ失フモノニ非ス

軍艦ハ本國ヲ代表スルモノナルカ故ニ外國ニ在ルモ外國ノ干渉ヲ受クルコトナシ又該外國ノ法權、警察權等ノ下ニ服従スルコトナシ又本國ヲ代表スルモノナリ理由ヲ以テ相當ノ敬禮ヲ受ケ軍艦カ碇泊國ノ稅權ノ下ニ服従スルヤ否ヤハ各國其探ル所ノ主義ヲ異ニス

軍艦ハ外國ノ領海内ニ於テ種種ノ特權ヲ有スルモノナリト雖絕對ニ碇泊地ノ法律ニ從ハスシテ可ナルモノニ非ス軍艦カ必服従セサルヘカラサルコトヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 平時ニ於テモ戰時ニ於テモ碇泊地ノ局外中立ノ規則ニ服従セサルヘカラス例之「スエズ」運河ニ碇泊セル船舶ハ一箇ノ碇泊所ニ二十四時間以上碇泊スルコトヲ得サルカ如ク又戰時ニ於テ中立國ニ在ル軍艦カ中立ニ關スルコトニ付該中立國ノ命令ニ從ハサルヘカラサルカ如シ

國際公法(平時) 本論 國家ノ權利 實質上ノ權利 行政權

六九

0418

第二 軍艦ハ平和ノ目的ヲ主トスルモノニ非サルカ故ニ軍艦ニ向テ退去ノ請求ヲ受ケタルトキハ之ニ從ハサルヘカラス

第三 軍艦カ外國ノ港ニ入りタルトキハ其港ノ規則ニ服從セサルヘカラス

第四 軍艦ハ碇泊港ノ國家ニ行ル檢疫規則ニ從ハサルヘカラス我國ノ海港檢疫法第一三條ニ於テ外國ノ軍艦カ日本ニ於テ日本ノ檢疫規則ニ從ハサルヘカラスルコトヲ規定セリ又日本ノ軍艦カ外國ニ在ルモノニ關シテハ軍艦外務令第七條ニ「軍艦ハ外國港灣ニ出入ノ際及其ノ碇泊中ハ其ノ地ノ港則及衛生規則ヲ遵守セムコトヲ要ス」ト規定セリ然レトモ一般ノ慣例ニ依レハ軍艦ノ艦長カ若名譽ノ言葉ヲ以テ該軍艦ニ病者ナシトノ保證ヲ與フレハ之ニ對シテ檢疫ヲ行ハサルモノナリ

第三 輸出入及關稅

今日ニ於テハ各國皆領國主義ヲ採ラサルカ故ニ海上ニ於テモ陸上ニ於テモ外國ヨリノ輸入ヲ許シ又外國ヘ貨物ヲ輸出スルコトヲ自由ニス此原則ニハ物ニ對スル制限ト時ニ關スル制限ト場所ニ關スル制限トアリ其何レヲ問ハス皆國家ノ安寧秩序ヲ保タンカ爲ニ出タルモノナリ物ノ制限トハ國家ノ專賣品、人類、動植物等ニ害アル物、國家ノ防禦上ノ利害ニ關係アル物、風俗ヲ害スルノ虞アル物等ニ對シテ輸入又ハ輸出ヲ博スルコト是ナリ例之曰英通商航海條約第五條第二項ノ規定竝ニ同議定書第一項末段ノ約定ノ如キ是ナリ

時ノ制限トハ例之流行病ノ流行スルトキ又ハ戰爭ノ繼續中ヲ限リ輸出入ヲ制限スルモノヲ謂フ場所ノ制限トハ例之軍事上重要ナル場所ニ外國ノ貨物ヲ輸入スルコトヲ禁スルカ如ク又惡疫流行地ヨリ外國ニ貨物ヲ輸出スルコト又ハ其地ヘ外國ヨリ貨物ヲ輸入スルコトヲ禁スルカ如シ

0419

各國ハ課稅ニ關スル獨立ノ權利ヲ有スルカ故ニ外國ヨリノ輸入物及外國ヘノ輸物ニ對シ自由ニ稅ヲ課スルコトヲ得ヘシ此權利ヲ絕對ニ行使シテ課稅スル所ノ稅率ヲ名ケテ國定稅率ト謂フ然レトモ各國ヲシテ絕對ニ國定稅率ニ依ラシムルトキハ外國カ危害ヲ受タルノ虞アルヲ以テ或國家ト或國家トノ間ニハ協定稅率ヲ約定ス協定稅率トハ或貨物ニ對シ幾何ノ稅ヲ課スルヤハ條約ニ附帶スル稅目ニ於テ約定スルモノナリ協定稅率ノ特色ハ條約締結國一方カ締結國他方ニ對シテ過重ノ稅ヲ課スル能ハサルコトニ在リ條約國ハ必シモ相互ノ協定稅率ヲ定ムルモノニ非ス甲國ヨリ乙國ニ輸入スル貨物ニ對シテハ協定稅率ニ依ルモノ乙國ヨリ甲國ニ輸入スル貨物ニ對シテハ國定稅率ニ依ルコトヲ得ヘキモノナリ我國ニ於テハ安政五年ノ條約以後外國ヨリ日本ニ輸入スル貨物ニ對シテハ常ニ協定稅率ニ依ルコトヲ定タリ今日ノ條約ニ於テモ亦然リ各國若絕對ニ國定稅率ノ主義ヲ採リ外國ヨリノ輸入物ニ重キ稅ヲ課スルトキハ之カ爲ニ關稅戰爭ヲ惹起シ條約國雙方ノ經濟上ノ利益ヲ害スルノ虞アリ

稅率ハ價ニ從テ定ムルモノト量ニ從テ定ムルモノト二種アリ從價稅ニ依レハ或貨物ノ價ヲ如何ニシテ定ムヘキヤヲ決定セサルヘカラス例之佛蘭西ヨリ日本ニ輸入スル葡萄酒ニ對シ葡萄酒ノ價格ニ從テ幾割ノ稅ヲ課スルニ謂フト雖其葡萄酒ノ價格ハ佛蘭西ノ原產地ニ於ル價格ナルカ佛蘭西ノ市場ニ於ル價格ナルカ若クハ運賃、保險料等ヲ合セタル日本ニ於ル價格ナルカ不明ナリ故ヲ以テ此等ノ事ハ亦條約締結國ノ合意ヲ以テ決定セサルヘカラス日本ト英國トノ條約ノ附屬稅目ニ於テ從價稅トハ如何ナル價格ノ標準ニ依リタル稅ナルヤニ關シ左ノ如ク約定セリ

此ノ稅目ニ從ヒ輸入物品ニ課スヘキ從價稅ハ其ノ物品ノ仕入地、產出地、若クハ製造地ニ於ル價格ニ其ノ仕入地、產出地、若クハ製造地ヨリ陸揚港ニ至ル迄ノ保險料、運賃ヲ加算シ又手數料アルトキハ

之ヲモ加算シテ算定スヘシ
此價格ニ關シ輸入者ハ可成之ヲ低クセシコトヲ求ムヘク稅ヲ課スル國家ハ可成之ヲ高クセシコトヲ求ムヘシ若商賣ト國家トノ間ニ貨物ノ評價ニ付テ一致セサルトキハ國家ノ定メタル評價ニ從ハサルヘカラス然レトモ國家カ若高ク評價シタルトキハ商賣ハ之カ爲ニ過重ノ稅ヲ拂ハサルヘカラサルカ故ニ此弊害ヲ矯正セシムカ爲ニ種種ノ方法講セラレタリ例之政府ヲシテ其貨物ヲ悉買上クシムヘシト謂フカ如キ其地ノ多クノ商賣ヲ呼出シテ之ヲ評價セシムヘシト謂フカ如キ或ハ價ヲ以テ支拂フ代リニ貨物ノ幾分ヲ納メシムヘシト云フカ如シ
通過稅ハ之ヲ免除スヘキモノナリ何トナレハ通過スル貨物ハ通過國ニ於テ使用セラルル物ニモ消費セラルル物ニモ非サレハナリ故ニ或貨物カ通過稅ヲ免除セラレンカ爲ニハ單ニ通過スル物ニシテ決シテ其地ニ於テ消費又ハ使用セラレサル物ナリトノ事ヲ證明セサルヘカラス通過稅ヲ免除スヘキコトハ各國ノ條約中ニ之ヲ規定スルモノ極多シ彼ノ再輸出物ナルモノハ即通過物ナルカ故ニ之ニ課稅ヲ免ス其課稅ヲ免スル方法ニハ初ヨリ稅ヲ免除スルモノアリ又ハ一旦納メタル稅ヲ通過物タリシトノ證據十分ナリトノ理由ヲ以テ後ニ至テ還付スルモノモアリ例之日獨通商航海條約第八條ハ再輸出物ニ關スル左ノ如キ約定ヲ設ケタリ

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ到ル他ノ一方ノ商人、工業者及注文取集旅商カ見本トシテ輸入シタル總テノ有稅物品ニ對シテハ其ノ國ノ法律ヲ以テ定メラレタル期限内ニ賣捌カレスニシテ再輸出スルコトナリ而シテ右再輸出ノ爲メ及稅關倉庫ヘ送戻ス爲ニ必要ナル定式ヲ履行スルニ於テ輸出入ニ關スル一切ノ取立金ヲ免除スヘシ但右見本ノ再輸出ニ付テハ最初輸入ノ際其ノ輸入地ニ於テ其ノ稅金ニ

等シキ金額ヲ預ケ入ルカ又ハ擔保ヲ差入レテ之ヲ保障スヘシ

又見本帖、見本ノ一部及見本ニシテ唯見本用ニ適スルモノ過キサルモノハ前項ニ掲載セシヨリ以外ノ方法ニ依リ輸入セラルルトキト雖其ノ輸入稅ヲ免除スヘシ

第四 郵便、電信ニ關スル行政權

郵便ニ關スル行政上ノ主權ハ各國皆絕對ニ之ヲ有スルモノナレトモ條約ニ由テ此權利ノ制限ヲ受クルモノ頗多シ千八百七十八年巴里ニ於テ萬國郵便同盟ナルモノ成立セリ此同盟ノ結果トシテ各國皆郵便ノ主權ノ制限ヲ受ク郵便同盟ノ與フル便益ハ書狀、圖書ノミナラス種種ノ印刷物、商品ノ見本、小包郵便、代金引換小包郵便ノ發送ノ認メラレタルコト、同盟國間ニ發送スル郵便物ハ郵稅ヲ同一ニスルコト、通過手數料ヲ課セサルコト、郵便同盟ノ中央事務所ヲ設ケテ瑞西ノ監督ノ下ニ置キ郵便同盟ニ關スル一切ノ事務ヲ取扱ヘシメ「郵便同盟」ト稱スル月報ヲ發行シ同盟國間ニ爭ヲ生シタルトキハ仲裁裁判ヲ爲スコト等シナリ同盟ノ會議ハ大抵七年ニ一回ヲ開カルモノナリ該會議ノ開カル毎ニ次第二郵便事務ニ便宜ト進歩トヲ與ヘタリ例之千八百九十七年ノ華盛頓ニ於ル萬國郵便同盟會議ニ於テハ左ノ如キ事ヲモ決議シタリ

- 一 商品見本ノ最大ノ重量來ニ二百五十「グラム」ナリシヲ三五〇「グラム」ニ増加スルコト
- 二 書留郵便物ノ到達證ハ郵便差出人當時ニ於テ受クルコトヲ得ルノミナラス差出後ト雖之ヲ請求スルヲ得ルコト
- 三 郵便物、遞送中爆發物、燃燒物等ノ危險物ヲ發見シタルトキハ途中ニ於テモ直ニ之ヲ棄却スルヲ得ルコト

四 郵便ノ定稅ヲ表スル郵便切手取扱上ノ便宜ヲ圖ランカ爲ニ萬國ノ間ニ可成一定ノ彩色ヲ用フル

コト

五 博物學ノ標本ハ商品見本トシテ抵稅ヲ以テ遞送スルコト

六 郵便爲替金額ノ最高限度ヲ一千「フラン」ニ増加スルコト

電信ニ關スル事ハ一千八百八十五年ノ巴黎ニ於テ開カレタル一般電信同盟ニ由テ定レリ此同盟ノ中央事務所ハ郵便同盟ノ中央事務所ト共ニ瑞西ノ「ベルン」ニ在リ

電信ニ關シテ重大ナルハ海底電線ノ事ナリ國際法協會ハ一千八百七十八年及七十九年ニ海底電線ニ關スル決議ヲ爲シタリシカ千八百八十四年ノ海底電線保護ニ關スル萬國條約及八十六年並ニ八十七年ニ於ル追加ニ由テ極テ正確ト爲リタリ此條約ノ結果トシテ海底電線ノ毀害ヲ禁シ若之ヲ毀害シタル者ハ海賊ト同一視スヘキコトヲ定タリ此條約ハ戰時ニ於テ交戰國カ海底電線ヲ切斷スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ何等ノ約定ヲモ設ケザリシカ學者ノ間ニハ戰時ニ於テモ切斷スヘカラサル場合ニ付テ種種ノ議論アリタリ千九百二年國際法協會カ「ブリュクセル」ニ於テ戰時ニ海底電線ヲ切斷スルヲ得ルヤ否ヤニ關シ定メタル左ノ議決ハ極テ重要ナルモノナリ

第一 兩中立國間ノ海底電線ハ侵スヘカラス

第二 交戰國ノ域領内ヲ聯結スル海底電線ハ中立國領海間ヲ通過スル處ヲ除キ何レノ處ニ於テモ之ヲ切斷スルコトヲ得ヘシ

第三 中立國ト交戰國トノ間ノ海底電線ハ中立國領海内ニ於テ切斷スヘカラス又有效ナル封港ノ場合ヲ除キ公海ニ於テ之ヲ切斷スヘカラス戰終リタルトキハ再其接續ヲ全ウスヘキ義務アリト雖

交戰國ノ領海内ニ於テハ何レノ處ニ於テモ之ヲ切斷スルコトヲ得ヘシ

第四 中立國ハ交戰國ヲ救援スルノ目的ヲ以テ海底電線ヲ使用スヘカラス又使用スルコトヲ許スヘカラス

第五 此等ノ原則ヲ適用スルニ付テハ海底電線カ政府ノ所有タルト箇人ノ所有タルト中立國ノ所有タルト交戰國ノ所有タルトニ關シ區別ヲ立テヘカラス

電話ニ關シテハ唯或國家ト或國家トノ間ノ條約アルノミニシテ未萬國電話同盟ナルモノアルコトナシ

第二款 衛生ニ關スル行政權

各國皆健康ニ關スル行政上ノ主權ヲ有スルモノナレトモ劇烈ナル病氣ニ對シテハ數國ノ間ニ條約ヲ締結シテ其蔓延ヲ防ケリ加之隣國トノ間ニハ醫師ヲ共通ニスルコト、產婆ヲ共通ニスルコト等ニ關シ特別條約ヲ結フモノアリ又國法ヲ以テ自ラ制限スルモノモアリ今日ノ實際ニ於テ衛生ニ關スル國際條規ノ最發達シタルモノハ檢疫ニ關スル事ナリ船舶又ハ嫌疑船ニ對シテ一定ノ時日ノ間離隔ヲ命スルコトハ各國ノ悉歸スル所ナリ此制度ハ第十四世紀ノ中頃ニ「ペスト」ノ流行シタルトキ伊太利ノ「ヴェニス」共和國カ土耳其ヨリ入港シタル船舶ニ對シ二週間ノ離隔ヲ命シタルニ始レリ

或流行病ニ關シ特別ニ數國ノ間ニ條約ヲ以テ約定シタルモノハ千八百九十二年ノ「ヴェニス」ニ於ル會議、千八百九十三年ノ「ドレスデン」ニ於ル會議、千八百九十七年ノ「ヴェニス」ニ於ル會議ノ如シ以上第一及第二ノモノハ虎列刺病ニ關シ第三ノモノハ「ペスト」ニ關ス第一ノモノハ埃及及「スエズ」運河ニ於テ虎列刺病ニ付十分ノ取締ヲ爲スコトヲ定メタルモノナリ第二ノモノハ主トシテ「ダニエーブ」河ノ

衛生ニ關スルコトヲ定メタルモノナリ此條約締結國ハ佛蘭西、獨逸、埃太利、匈牙利、露西亞、伊太利、瑞西、和蘭、白耳義、ルクセンブルヒ、「セルビヤ」、「モンテネグロ」、「リヒテンシュタイン」ニシテ旅行者ノ交通及貨物ノ交通ニ關シ十分ノ取締ヲ爲スヘキコトヲ定メ締結國ハ自國ニ疾病者ヲ生シタルトキハ直ニ之ヲ他ノ締結國ニ通告スヘキコトヲ定メ船舶ハ病船、嫌疑船、無病船ノ三者ニ區別シ各其待遇ヲ異ニスヘキコトヲ定メタリ「ベスト」ノ撲滅ニ關シテハ第三ニ述ヘタルカ如ク千八百九十七年「ヴェニス」ノ條約ヲ以テ之ヲ定メ其内容ハ「ドレズデン」會議ノ虎列刺病ニ關スルモノト大同小異ナリ(三十二年法律第一九號海港檢疫法)

第四款 財産ニ關スル國際的保護

獸類ノ傳染病ニ關スル國際的保護ノ事ハ商船ノ國家ノ間ニ條約ヲ以テ締結セラレタルモノアレトモ萬國條約ト爲ルコトナクシテ止ミタリ葡萄牙ノ害虫ニ關スル歐羅巴諸國間ノ條約ハ千八百七十八年六月十七日ニ締結セラレタリ其加盟國ハ佛蘭西、獨逸、伊太利、埃太利、匈牙利、西班牙、葡萄牙、白耳義、和蘭、瑞西「ルクセンブルヒ」、「ルーマニヤ」、「セルビヤ」是ナリ此條約ノ大要ハ切取リタル葡萄牙ノ木ヲ外國ニ運フヘカラサルコト、各國カ葡萄牙虫ノ驅除ニ關スル規則ヲ制定シテ之ヲ締結國ニ通知スルコト等ナリ
數國ノ土地ヲ貫流スル河ノ漁業ノ保護ニ關スルモノハ「ライン」河ニ付テノ數國間ノ條約ノ如シ北海ノ漁業ニ關スル事ハ千八百八十二年和蘭ノ海牙ニ於テ英、佛、獨、白、葡、丁六箇國ノ間ニ締結セラレタリ「ベーリントク」海ノ獵虎獵ニ關シテハ從來種種ノ條約アリタレトモ明治三十年日本、露西亞、北亞米利

加ノ三箇國カ結ヒタル條約ヲ最近ノモノト爲ス此他萬國鳥類保護條約ヲ結ハンカ爲ニ各國ノ代表者ヲ會議シタルコトアレトモ條約ト爲ルコトナクシテ終レリ

第五款 精神的利益ノ保護ニ關スル政權

第一 宗教ニ關スル行政權

宗教及寺院ノ事ニ關シテハ各國何レモ行政權ヲ有スルモノナレトモ各國カ信教ノ自由ヲ與フルコトハ國際交通ノ上ニ極テ便利ナルカ故ニ各國ハ事實上皆信教、禮拜ヲ制限スルコトヲ爲ササルコトト爲レリ是各國ノ憲法カ信教ノ自由ヲ認ムルニ徴シテ知ルヘシ唯リ各國ノ國法カ信教ノ自由ヲ認ムルノミナラス國家ト國家トノ條約ニ於テモ萬國條約ニ於テモ信教ノ自由ヲ認タルモノ極テ多シ舊時ノモノトシテハ千六百四十八年ノ「ウニストフハリヤ」條約其最重ナルモノナリ近年ノモノトシテハ千八百七十八年ノ伯林條約ノ如ク千八百八十五年ノ「コンゴ」條約ノ如シ

第二 道德ニ關スル行政權

道德ニ關スル行政權中最重ナルモノハ奴隸買賣禁止ニ關スル事ナリ奴隸買賣禁止ノ事ヲ始テ約定シタルモノハ千八百十五年二月八日ノ維納會議ノ宣言ナリ此宣言ハ英、米兩國ノ發議ニ由ラ生シタルモノナリ此宣言ノ内容ハ左ノ如シ

- (甲) 此條約加盟國ハ自國國民ニシテ奴隸買賣ヲ營ム者ヲ國法ニ依テ處罰スヘシ
- (乙) 軍艦ハ奴隸買賣船ニ對シ臨檢、搜查、逮捕ノ權利ヲ有ス
- (丙) 奴隸買賣船ニ對スル裁判權ハ捕ヘタル船舶ノ本國ニ屬ス

此宣言ハ實際ニ於テ現ニ行ハレサリキ蓋加盟國カ英、佛、米、露、奧、普ノ六箇國ニ止リシト舊來ノ慣習ヲ一朝ニ打破スルコト能ハサリシトニ由ルモノナリ其後千八百十八年ノ倫敦會議、同年ノ「エキスラシヤ」會議、千八百二十二年ノ「ヴェ罗纳」會議等ニ於テ屢之ヲ決シテトモ功ヲ奏セサリシ其後千八百四十年ノ倫敦條約ニ由テ始テ奴隸買賣ヲ嚴ニ禁スルコトハ一般ニ行ハルニ至レリ近時ニ於テ特ニ此事實ヲ議定シタル重ナルモノハ千八百十五年ノ「コンゴ」條約ト千八百八十九年ノ「ブルツセル」會議ノ議定是ナリ

第三 學問ニ關スル行政權

第三ノ學問ニ關シテ一國ト他國トノ間ノ條約ハ枚舉スルニ遑アラズ萬國條約中千八百八十五年ノ學問上ノ行政權ニ關シテ一國ト他國トノ間ノ條約ハ枚舉スルニ遑アラズ萬國條約中千八百八十五年ノ「コンゴ」條約ハ其第六條ニ於テ學者ノ探險者ノ其從者ノ財產收集物等ニ對シテ特別ノ保護ヲ與ヘキコトヲ約定セタル此他萬國著作權同盟及萬國工業財產保護同盟亦學問上ノ行政權ニ對スル制限ナラズコトヲ得ヘシ萬國著作權同盟ハ我國明治三十二年七月ニ於テ加入シタルモノナリ萬國工業財產保護同盟亦同シ

第六款 貨幣ニ關スル行政權

通貨ニ關スル行政權モ亦各國絕對ニ之ヲ有ス然レトモ萬國カ通貨ヲ異ニスルコトハ多クノ不便ヲ生スルヲ以テ能フヘクハ通貨ニ關スル行政權ヲ制限シテ貨幣同盟ヲ結ブヲ可ナリトス然レトモモ世界萬國カ互ニ經濟上ニ關スル信用ヲ有セサルカ故ニ如此同盟ノ一般ニ擴張シタルモノナシ現今貨幣同盟ノ存在スルモノ僅ニ二箇アリ一ヲ「ラテン」同盟ト謂ヒ一ヲ「スカンヂナビヤ」同盟ト謂フ「ラテン」同盟

ルモノナリ

國家カ外國ノ通貨ヲ偽造、變造シ又ハ之ヲ行使シタル者ヲ處罰スルノ法律ヲ制定スルモノアリ是亦通
貨行政權ニ關スル一種ノ例外ナリト謂フコトヲ得ヘキナリ

第七款 度量衡ニ關スル行政權

度量衡ニ關スル行政權モ亦各國自由ニ之ヲ有ス然レトモ萬國カ互ニ自國ノ制度ノミヲ取リ之ヲ外國ノモノト比較スルコトヲ爲ササルトキハ貿易上甚シキ不便ヲ感スルカ故ニ萬國度量衡同盟ナリモノ千八百七十五年巴里ニ於テ締結セラルルニ至リ我國ハ明治十九年四月十六日之ニ加盟シタリ現今ニ於テ此同盟ニ加ハレルモノは七箇國アリ然レトモ英國ハ未此同盟ニ加ハラス此同盟ノ中央事務所ヲ巴里ニ置キ佛國ノロ監督ニ委キ事務所ノ役員ハ局長一人其他不定數ノ補助員ヨリ成ル尙各國事務所ハ十四ノ委員ヲ派出シ事務所ノ指揮監督ヲ爲ス此事務所ノ爲スヘキ職務ハ「メートル」及「キログラム」ノ國際の標準ヲ作り之ヲ國內の標準ト比較スルニ在リ今此條約第六條ノ規定ニ依リ度量衡同盟中央局ノ爲スヘキ事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 新製「メートル」及「キログラム」原器ノ比較監査ニ關スルコト

第二 萬國原器ノ保存ニ關スルコト

第三 定期ヲ以テ各國模製原器ヲ萬國原器及其模製品ト比較シ且各國標準寒暖計ヲ相比較スルコト

第四 新製原器ヲ以テ各國及學術上ニ於テ使用スル所ノ度量衡原器ニシテ「メートル法」ニ基カサルモノニ比較スルコト

第五 測地用ノ尺度ヲ「メートル」原器ニ照準シテ之ヲ比較スルコト

第六 政府、學士協會、藝術家又ハ學士ノ囑託ニ應ジ諸原器及正確ニ尺度ヲ比較監査スルコト

第八款 地役ニ關スル行政權

國家ハ外國ニ自國ノ土地ヲ使用セシメサルヘカラサルノ義務ナシ然レトモ國家ノ交通ヲ保タンカ爲ニハ外國ニ土地ヲ使用セシムルコトヲ必要トスル場合アリ外國ノ汽車ヲ通セシムルカ如キモ亦此中ニ含まルヘキモノナリ瑞西ノ如ク四方他國ニ依テ圍繞セラルル國家ハ外國ヲ承役地ト爲スニ非サレハ國家ノ代表者カ外國ニ出ツルコト能ハサルヘシ且國際地役ノ必要ナル所以ナリ
一般ニ地役ヲ分類スレハ積極的地役ト消極的地役トノ二種ト爲スコトヲ得積極的地役トハ自國ノ爲ヲスシテ可ナル事ヲ爲スヘキ義務ヲ負フ場合ナリ例之條約ニ由テ火藥庫ノ用ニ供スル土地ヲ他國ニ貸與スルカ如ク又自ラ城砦ヲ毀タサルヘカラサルカ如ク反之消極的地役トハ自國ノ爲シ得ル權利ヲ爲スコト能ハサルモノナリ例之或土地ニ城砦ヲ築クコト能ハストノ制限ヲ受ケタル場合ノ如シ

乙 形式上ノ權利

國家ハ原則トシテ全ク對等ナリ版圖ノ廣狹、國民ノ多少、兵力ノ強弱ノ如キハ形式ニ於テ國家ノ不同等ナルコトヲ現ハスモノニ非ス國家カ總テ同等ナリトノ原則ヲ否定スル學者ハ「ロリマ」「ローレンス」等

ニ過キス古ニ於テハ共和國ヲ以テ君主國以下ノ地位ニ在ルモノナリト爲シタレトモ此考ハ英吉利ノ「クロウエル」時代及佛蘭西ノ第一共和制時代ヨリ止ムニ至リタリ此原則アルニ拘ラス唯一ノ例外トシテ認ラルル所ハ王の榮譽ヲ有スル國ト之ヲ有セタル國トノ間ノ區別ノミ王の榮譽ヲ有スル國トハ帝國、王國、大共和國、大公國ニシテ其他ノ國家ハ王の榮譽ヲ有セタル國家ナリ王の榮譽ヲ有スル國家ハ第一級ノ公使即全權大使ヲ授受スルノ權利ヲ有スレトモ王の榮譽ヲ有セタル國家ハ斯ル權利ヲ有セス」國家カ如何ナル名稱ヲ有シ又如何ナル稱號ヲ附シ國家ノ元首カ如何ナル尊稱ヲ用フルヤハ全ク國家ノ自由ナリ唯一箇ノ制限トシテ一國カ他國ノ名稱ヲ用フルコト能ハサルコト一國ノ元首カ他國ノ元首ノ稱號ヲ侵スコト能ハサルコトアルノミ故ニ例之從來ノ共和國カ君主國ト爲ルカ如キ君主國カ共和國ト爲ルカ如キ王國カ帝國ト稱スルカ如キ公國カ王國ト爲ルカ如キ某國王カ某國皇帝ト稱スルカ如キ全ク自由ナリ例之千八百八十一年「ルーマニヤ」カ王國ト爲リタルカ如ク明治二十九年朝鮮カ帝國ト爲リタルカ如キ一千八百七十年英國女皇カ印度女帝ト爲リタルカ如シ然レトモ今日ノ國際法ハ唯之ヲ以テ各國ノ權利ト看ルノミニシテ他國力之ヲ承認セサルヘカラサルノ義務ヲ認メス故ヲ以テ他國ニシテ若之ヲ承認セサルトキハ該名稱ノ變更ハ外國ニ對シテ效力ヲ有スルコトナシ例之露西亞カ帝國ト稱スルコトヲ佛蘭西其他ノ國家ヨリ永ク認メサリシカ如シ

國ト國トノ間ニ談判ヲ開クトキハ其談判ノ方式ハ原則トシテ其方式ヲ行フ場所ノ用フル處ニ依ル故ニ此事ニ付テハ私法上ノ「場所ハ行爲ヲ支配ス」トノ原則ヲ採用シタルモノト看ルコトヲ得ヘシ隨テ甲國ノ使節カ乙國ニ赴キタルトキハ其方式悉乙國ノ定ムル所ニ從フコトヲ要ス但其方式カ甲國ノ使節ヲ侮辱スルモノナルトキハ此限ニ在ラス又兩國ノ合意ニ依リ各其本國ノ採ル所ノ儀式ニ依ルコトヲ得ヘク

又ハ其他ノ方式ニ依ルコトヲモ得ヘシ
列國會議ノ場合ニ各國ノ君主、全權大臣等カ著席ヲ爲スノ順序ニ付テハ古ヨリ爭議ヲ絶タサリキ千五
百四年羅馬法王ハ各國ノ順序ヲ設ケテ此順序ニ從テ著席スヘシト定メタルモ殆ト全ク行ハルルコト
ナカリキ隨テ古ニ於テハ或ハ元首ノ即位ノ順序ニ從ヒ或ハ全權大臣ノ任命ノ順序ニ從ヒ其他年齡ノ高
下或ハ每會席順ノ交換ヲ爲ス等ヲ以テ一時ヲ糊塗シタルコトアレトモ何レモ決定ノ行ルコトナカ
リキ今日ニ於テハ此等ノ順序ハ國家ノ名稱「アルハベツト」順ニ從フコトヲ認メ其國家ノ名稱ハ佛蘭
西語ノ呼フ所ニ從フヘシト爲セリ獨リ列國會議ノ著席順ニ於テ然ルノミナラス萬國條約ノ記名調印ノ
順序モ亦然リ二箇國條約ニ於テハ雙方各自國ニ取ル所ノ文面ニ自國ノ名稱及自國元首代表者ノ名稱ヲ
先ニスルノ例ナリ萬國會議ニ用フル言語ハ佛蘭西語ヲ拒否スルコト能ハス萬國條約ニ記載スル文字モ
亦然リ二國會議ニ用フル言語及二國條約ニ記載スル文字ハ該二箇國ノ合意ニ依テ決スヘキモノナリ
海上ノ禮式ハ國法又ハ條約ニ一任スルモノナレトモ一般ノ原則トシテ採用セララル重ナルモノヲ舉ク
レハ左ノ如シ

君主、皇族又ハ大使ノ船ニ遭遇シタル船舶ハ其船舶ヨリ先ニ禮スヘキモノナリ

他國ノ領海内ニ入ルトキハ入りタル船舶ヨリ先ニ禮スヘキモノナリ

軍艦ト軍艦ト又ハ艦隊ト艦隊ト遭遇シタルトキハ艦長又ハ司令長官ノ地位ノ低キモノヨリ先ニ禮ス
ヘキモノナリ

軍艦ト艦隊ト遭遇セハ軍艦ヨリ先ツ禮スヘキモノナリ

國家カ同等ナルノ結果一國ハ他ノ國家ヲ尊重セサルヘカラス而シテ此尊重ハ國家ハ外部ニ表彰スル形
式上ニモ及フモノナリ例之公使館ニ樹テタル旗其他徽章ヲ尊重セサルヘカラスルカ如シ若斯ル徽章ニ
對シテ危害ヲ加フルカ如キコトアラハ單ニ物質上ノ損害ヲ加ヘタルコトニ關シテ責任ヲ負フニ止ラス
併セテ其國家ヲ侮辱シタリトノ責ヲ負フヘキモノナリ

第六章 國家ノ義務

國家ハ前ニ述ヘタルカ如キ權利ヲ有スルカ故ニ總テノ國家ハ此權利ヲ尊重スヘキ義務ヲ負フモノナリ
故ニ權利ノ裏面ハ即義務ナリト看テ義務ニ關スル説明ヲ加ヘサル學者甚多シ然レトモ國家カ如何ナル
事項ニ關シ外國ニ對シテ責任ヲ負フヘキヤ又如何ナル方法ニ由テ其責任ヲ解除セラルヤヲ研究スル
ノ必要アリ或學者ハ「國家ノ責任」ト稱スル題目ノ下ニ之ヲ説明セリ其他學者ニシテ「國家ノ義務」ト稱
スル題目ノ下ニ權利ニ對スル二三ノ事項ヲ取テ之ヲ説明スルニ止ムル者アリ例之或人ハ國家ノ義務ト
謂フ所ニ干涉スヘカラスルコトヲ說キ又ハ罪人引渡ノ義務アリト說クカ如シ如此説明ハ寧「權利」ノ標
題ノ下ニ於テ論述スヘキコトナルカ故ニ故ラニ之ヲ義務トシテ論スルノ要ナシ是故ニ先ツ國家ハ何人
ノ爲シタル行為ニ付責任ヲ負フヘキヤヲ說キ次ニ其責任ヲ免ルル方法ニ及フヘシ

國家ハ責任ヲ負フヘキモノナルカ故ニ其行為ハ國家自身カ爲シタル行為ナラサルヘカラス國家自身ハ
機關ノ力ニ依ラスシテ行為ヲ爲スコト能ハサルカ故ニ國家ノ行為トハ即國家ノ命令ニ因テ若クハ少ク
トモ委任ヲ受ケテ或人ノ爲シタル行為ナラサルヘカラス故ニ其行為ハ國家ノ官吏ノ爲シタルモノナル
ト私人ノ爲シタルモノナルト内國人ノ爲シタルモノナルト外國人ノ爲シタルモノナルトニ依テ差別ヲ
生スヘキ理由ナシ何トナレハ總テ國家ノ行為ヲ代表シタルモノナレハナリ國家ノ機關カ國家ノ命令ニ

從テ爲シタル行爲ニ付國家自身カ責任ヲ負フヘキハ論ヲ俟タス雖國家ノ機關カ國家ノ命令ニ反シテ爲シタル行爲ニ付ハ國家タルモノニ責任ヲ負フヘキヤニ付疑アリ如此場合ニハ其行爲自體ヲ國家ノ行爲ナリトシテ國家ハ責任ヲ負フコトヲ要セザレトモ其機關ヲ監督スルコトノ不行届ナリシノ責任ハ之ヲ負ヘサルヘラス又一箇人カ國家ノ命令ヲモ委任ヲ受ケタルコトヲ爲シタル行爲ニ付ハ國國家ノ行爲トシテノ責任ヲ負ハスシテ可ナルコト勿論ナリ雖國家カ人民ヲ取締ルコト不行届ナルカ爲ニ害ヲ外國ニ及シタルコト明カナル場合ニハ取締ノ不行届ナリシコトニ付責任ヲ負ハサルヘカラス而シテ國家ノ責任ハ外國ノ國家ニ對シテ爲シタル行爲ニ付ラモ外國人ニ對シテ爲シタル行爲ニ付ラモ等ク免ルルコト能ハサルモノナリ

タ免ルコト能ハサルハシ
次ニ責任ヲ解除スルノ方法ハ國際法ノ明ニ定ムル所ニ非ス唯從來ノ慣例ニ依リ行ルル所ノ最普通ノ方法ヲ舉クニハ原狀ノ回復、損害ノ賠償、將來ノ安全ノ保障、謝罪、加害者ノ處罰、土地ノ割讓等ナリ此等種種ノ方法ニ依ルモ尙被害國カ加害國ノ義務ヲ免レシムルコトヲ欲セサルトキハ爲ニ戰爭ヲ避クルコト能ハサル場合アルヘシ

第七章 外交機關及領事

第二節 外交官

第一款 總論

外交官トハ對外事件ニ與ル國家機關ノ總稱ナリ故ニ廣義ニ解スレバ外務大臣陸海軍大臣ノ如キ者モ外交官ト中ニ包含セラルルカ如シト雖普通外交官ノ名稱ハ寧狹義ニシテ外國ニ赴キラ對外の國家政治

ナル場合ニ自家防衛ノ必要アリヤ内地戦争(叛亂)ニシテ而モ自國ト接近セサルトキハ之ヲ交戰團體ト承認スルノ必要ナカルヘキモ自國ト疆土ヲ接スル國ノ内亂ナル場合ハ自國ノ利害モ大ニ影響ヲ受クシテ以テ叛徒ヲ交戰團體ト承認スルノ權利アリ然レ但此場合ニ叛徒ノ本國ハ之ヲ以テ不當ノ干渉トシテ主張スルコトアルヘキ戦争(叛亂)ニシテ海上ニ亘リ而モ永續シテ容易ニ鎮定セサルトキハ利害ノ關係アル他國ハ之ヲ交戰團體トシテ承認スルニ於テ重大ノ利益ト必要ヲ生ズ即叛徒ヲシテ全然戰爭法規ヲ遵奉セシメ海賊の行爲ニ出テシムルナク又自國臣民ヲ警戒シテ一定ノ通商(例之武器彈藥ノ運送)ヲ爲ササルシムヘキ必要アレハナリ蓋交戰團體トシテ叛徒ヲ承認セサル間ハ叛徒ハ他國ノ船舶ニ對シテ如何ニ野蠻ナル海賊の行爲ニ出ツルモ如何トモスヘカラス唯母國ニ對シテ其責任ヲ問フノ外ナシト雖母國モ既ニ叛徒ヲ懲罰スルノ權力ナキヲ奈何セシモ他國力交戰團體ト承認ヲ爲シ叛徒ヲシテ戰規ニ依ラシムルノ要アル所以ナリ母國カ叛徒ヲ承認スルノ必要ニ其他國ニ對シテ叛徒ノ行爲ニ對シテ責ヲ免ルニ在レトモ亦他ノ必要ナル理由アリ即叛徒者ヲ遇スルニ強盜、海賊ヲ以テシテ國內法ニ照シテ之ヲ嚴刑ニ處セシムル叛徒ノ頑強ナル報復ノ舉ニ出ル本國ノ臣民ヲ捕ヘタルトキハ之ヲ嚴刑ニ處シ暴行ヲ爲シ代ヘ其慘言ヲ忍ビサルモノアルヘシモ母國ノ承認アル所以ナリ又母國ハ必シモ常ニ自國ノ暴徒叛徒ノ行爲ニ關シ外國ニ對シテ責ヲ負フモノニ非ラスト雖時トシテ例外的ニ之ヲ負フコトアリ反之交戰團體ト承認アルトキハ全然責ヲ負ハサルニ至ル

(五) 承認ノ取消

一旦承認アリタルトキハ新ニ法律關係ヲ發生セシメ戦争狀態ノ開始アリタルモノナルカ故ニ更ニ之ヲ取消ストキハ其法律關係錯亂紛糾シテ如何トモスヘカラサルニ至ルヘク自己ノ隨意ニ行動ヲ二三ニシ

以テ他國ノ權利義務ニ變更ヲ來サシムルハ自利ノミヲ是營ムモノナリ國家ハ自己ノ便利ノミヨリ打算シテ行動スルハ許スヘカラサルナリ是學者ノ通説ト見テ可ナラン但千九百年ノ協會記事ハ反之取消シ得ルコト爲セリ

(六) 承認ノ效果

「ホール」曰ク(一)第三國カ承認ヲ爲シタルトキハ其國ト交戰團體間ニ於テ交戰團體ハ戰爭法上國家ト同様ノ權利義務ヲ有スルニ至リ且自己ハ母國ニ對シテモ局外中立ノ態度ヲ探ルニ至ル(母國ハ之ヲ認メサルヘカラス)然レトモ第三國ノ承認カ惡意ニ出テタルトキハ是不當ノ干涉ナレハ母國ハ第三國ニ對シテ別ニ救済(戰爭)ノ策ヲ講セサルヘカラス(二)母國カ交戰團體ノ承認ヲ爲シタルトキハ母國ハ爾後叛徒ヲ敵軍トシテ取扱フノ義務ヲ負ヒ第三國ニ對シテハ局外中立國タル義務ト權利トヲ有セシムルニ至ル又母國ハ承認ヲ爲シタル國ニ對シテハ叛徒ノ行爲ニ付責ヲ免レ又母國自ラ承認セルトキハ總テ他國ニ對シテ叛徒ノ行爲ニ付責ヲ免ル蓋其交戰團體タルコトヲ承認スルハ其行爲ニ付責任ヲ負フコトノ到底不能ナルヲ自白セルニ外ナラザレハナリト(五九頁)

「ローレンス」モ亦曰ク交戰團體ノ承認ノ效果ハ交戰者トシテノ權利義務ヲ叛徒ニ與フルニ在リ然レトモ戰爭ニ關スルノミニシテ獨立ノ一國家トシテノ承認ヲ爲スニ非ス承認ヲ爲シタル第三國ハ交戰團體又ハ母國ノ巡洋艦ニ依リ自國ノ商船ヲ捕獲セラルルモ不服ヲ唱フルヲ得ス承認國ハ交戰者雙方ノ封鎖ヲ尊重セタ又交戰團體及母國ノ兵員ヲ適法ナル戰闘員トシテ取扱フヘキノナリト(六〇頁)

承認ハ單ニ承認ヲ爲シタル國ハミヲ拘束ス即承認ハ承認國ト被承認者トノ間ノ關係ニ止リ第三國ハ其承認ノ影響ヲ受ケ之ニ拘束セラル、コトナシ又交戰團體ノ承認ハ交戰權ノ主體タルノ承認ニシテ國家

タルハ承認ニ非サルコトハ喋喋ヲ要セス他國カ承認ヲ爲シタルトキハ承認國ト交戰團體トノ間ニハ凡テ戰時法規(戰爭法、中立法)上ノ關係ヲ生シ交戰團體ニ戰爭當事者タルノ權利義務ヲ認メ自國ハ局外中立ノ姿勢ヲ探ルモノナリ母國カ承認ヲ爲シタルトキハ叛徒ヲ目スルニ罪人ヲ以テセスシテ敵人ヲ以テスヘキノ意ヲ示シ又他國ヲシテ局外中立ノ態度ニ出テシメ且他國ニ對シ叛徒ノ行爲ニ付責ヲ負フコトナキニ至ルモノトス母國以外ノ國ノ承認アリタルトキハ母國ハ其承認國ニ對シタルミ叛徒ノ行爲ニ付責ヲ免ル承認ハ承認國ノミ其效果ヲ受タルノ理論ヨリ生スル當然ノ結論ナリ但母國ハ承認ハ他國ニ對シテ一般ノ效果ヲ生スルハ普通兩國間ノ戰爭ニ於テ第三國ニ當然局外中立ノ義務ヲ生スルト同意ナリ故ニ承認ハ承認ヲ爲シタル國ノミヲ拘束ストノ理論ハ事實ニ於テハ其適用頗狹キニ至ルハ已ムヲ得サルナリ

先例ヲ見ルニ南北戰爭ノ時南部諸州ハ聯邦ヲ作リ大統領ヲ戴キ政府ヲ建テ北部大統領「リンカン」ハ叛徒ノ占領スル海岸ヲ封鎖スヘキコトヲ命シタルヲ以テ英國ハ南部ヲ交戰團體ト承認セルハ有名ナル事實ナリ英國カ承認ヲ必要ナリトセシ理由モ十分ナリシコトハ學者ノ認ムル所ナリ(「ホール」三九頁)

第三節 同盟

交戰權ノ主體ハ時ニ復數ナルコトアリ恰刑法ニ其犯アルカ如シ共犯ニ主犯、從犯アルカ如ク共同戰闘ニ主戰者(主戰國)從戰者(從戰國)アリ數國カ自己ノ戰闘トシテ共同シテ之ヲ行フトキハ共ニ主戰者タリ若他國ノ戰爭ヲ援助スルニ過キサルトキハ之ヲ從戰者ト謂ヒ被援助者ヲ主戰者ト謂フ同盟トハ狹義ニ於テハ前者ヲ指シ廣義ニ於テハ後者(援助)ヲモ包含ス共同戰爭ハ(一)或ハ同一ノ場所(戰野)ノ上ニ

於テ同一司令官ノ下ニ在テ同一ノ作戰計畫ヲ以テ行ルコトアリ(二)或ハ戰野、司令官、作戰計畫其ニ異ルコトアリ但後ノ場合ニ於テモ尙或合意通謀ヲ要ス之ヲ缺トキハ共同戰爭ナシ同盟ナシ唯數國カ時ヲ同ウシテ數國ノ戰爭ニ從事スルノミ

戰争ノ援助ニハ(一)一般援助アリ是總テノ國力手段ヲ以テスルモノナリ(二)特別援助アリ是分戰性質ニ於テ制限アルモノナリ例之援兵、軍艦、武器、彈藥、軍資、港津、城砦、武庫、軍隊逕行權、軍隊召集權ヲ以テ援クルカ如シ

同盟條約モ條約ナリ故ニ普通一般ノ條約ト效力、解釋等ニ關シテ異ル所ナシ

主戰者、從戰者共ニ相手國ノ敵タリ幾分ニテモ交戰國ヲ援助スレハ既ニ是局外中立ニ非シテ交戰國ト爲ル故ニ主戰者、從戰者ノ區別ハ此點ニ關シテハ無益ナリ少許ノ援助モ敵ノ戰闘力ノ一部ヲ成ヌ間接ノ援助モ援助タルヲ失ハスト「リニエデル」言ハ「ホルチエンドルフ」第四ノ(二四九)簡ニシテ明ナリ單ニ援助乃至其戰ノ條約アルノミニテ未其實行ナキ間ハ如何ト云フニ既ニ同盟ノ實行アルトキハ勿論ナレトモ未其實行ナク約東ノミニ止ル間ハ議論ノ餘地アリ聲援モ亦援助ナリ條約ノミニテモ軍勢ヲシテ強カラシムルノ效アリ條約ハ實行セラルノ虞アリ相手國ハ實際援助ノ實行アル迄拱手シテ待ツヲ迂ヲ學フヲ要セス其約束ヲ廢棄セサル以上ハ相手國ハ同盟國ニ對シテ直ニ開戦スルコトヲ得ヘシ又相手國ハ(一)所謂條件附官戰ヲ爲スノ權アリ即同盟ヲ破約セサレハ開戦スヘシト申込ムヲ謂フ(二)問意權アリ即相手國ノ意向ヲ質シ満足ナル答ヲ得サルトキハ開戦セントスルモノナリ(「ヘフタル」二五二)要スルニ法律論トシテハ如上ノ權利アリ權利ノ拋棄ハ政略問題ニ過キスシテ法律論ノ權利ノ有無ノ關スル所ニ非サルナリ反對説「マルテンス」「クリューセル」ハ政略論ト法律論トノ混同ナリ

茲ニ一ノ注意スヘキハ若同盟條約ノ内容ニシテ同盟國ノ一方カ第三國ト開戦スルトキハ同盟國ノ他方ハ局外中立ノ態度ヲ採リ若又第四國カ其第三國ニ與シテ共同戰闘ニ從事スルトキハ其同盟國ノ他方ハ始テ一方ト共ニ共同戰闘ニ從事スルニ在リトセハ(日英同盟、獨逸同盟皆然リ)如何ト云フニ所謂第三國ハ同盟ノ他方カ未一方ヲ助ケシテ局外中立ヲ守ルトキ(第四國加ハラサル前ニ在テモ仍之ヲ交戰者ト看做ス 權アリヤ同盟條約ノミニシテ多少ノ聲援アリタリトシテ直ニ交戰者ト看做スヲ得ヘシトノ論アルヘキモ予ハ之ニ反對セン局外中立ハ援助ニ非ス援助ナクシテ局外中立アル間ハ第三國ハ其中立ヲ尊重スルハ義務アリテ之ヲ攻擊スルハ權利ナレケハナリ

日英同盟 明治三十五年二月十二日議院ニ於テ突然日英同盟ノ發表アリ英國ハ所謂名譽アル孤立ノ地位ヲ離レテ我日本ト相抱擁セルナリ我國民ハ歡呼シテ當局ヲ謳歌セル同盟ノ内容ハ左ノ如シ(一月三十日倫敦ニ於テ調印)

第一 英國カ清國ニ對シテ有シ日本カ清韓兩國ニ對シテ有スル利益(政治上及商工業上)ヲ擁護スル爲メ必要アル場合ニハ相當ノ措置ニ出ツヘシ(干涉等ノ)

第二 同盟國ノ一方ニシテ第三國ト戰端ヲ開カンカ他方ハ局外中立ヲ守ルヘシ

第三 第四國ニシテ上記ノ戰闘ニ加リ同盟國ニ對敵スルニ至リ他方ハ始テ之ヲ援助シテ共同戰闘ニ從フヘシ媾和條約モ共同シテ締結スヘキモノトス

第四 締約國ノ一方ハ他方ノ合意ナクシテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲スコトヲ得ス

第五 危機迫レルトキハ雙方ハ互ニ隔意ナク事情ヲ通知スヘレ

又彼我艦隊ノ最初ノ衝突モ韓國領海ニ於テ行レ二月二十三日ニハ日韓全權ノ間ニ日韓議定書ヲ調印アリ五月十八日ニハ韓國ハ露韓條約ノ總ヲ廢棄シ五月十九日以來韓國軍隊ハ屢威鏡道ニ於テ露軍ト衝突シ又是ヨリ先々二月十二日駐韓露國公使「バゾロフ」ハ京城ヲ撤退シ八月二十二日ニハ所謂日韓協約ノ調印アリ韓國カ我國ノ同盟國ナルヲ知ルヘキナリ

第十四章 交戰機關

交戰權ノ主體ハ國家又ハ交戰團體ナリ而シテ此交戰權ノ主體カ交戰權ヲ行フニ當リテハ之ヲ行使スルノ機關ヲ有セサルヘカラス之ヲ稱シテ軍兵力、交戰者(海牙條約ハ此文字ヲ用ユ)又ハ戰闘力ト云フ其名稱異ルト雖皆吾人ノ所謂交戰機關ナリ交戰權ノ主體ハ同時ニ其行使者ナリ兵力ハ其機關ノミ古代ニ於テハ敵國人民ヲ悉敵ト看做シ之ヲ虐遇セシモ近世ニ在テハ反之戰闘ノ目的物ハ獨敵ノ軍隊兵カアルノミ平和ノ人民ハ交戰行為ニ加ハルノ義務ナク又權利ナシ私人ハ所謂受働的ノ數タルノミ即交戰權ノ客體ト爲リ且正當防衛行為ヲ爲シ得ルノミ敵國臣民ヲ一般ニ屠殺スルハ古代野蠻ノ慣習ノミ現今ニ於テハ戰爭ハ國ノ戰闘力ニ依テ之ヲ行ヒ原則トシテ正式ナル軍隊ニ依テ行ル故ニ左ニ陸軍、海軍ノ二項ニ分テ説明スヘシ

第一 陸軍

正式ノ軍隊トハ(一)平時ヨリ組織セラレタル軍隊ノ一部ニ屬シ(二)一定ノ外觀上ノ標準ヲ有シ(三)國家ノ監督ノ下ニ立チ(四)戰爭ノ法規慣習ヲ遵守スル能力アルモノナリ然レトモ實際ニ於テハ正式兵ト不正式兵トヲ識別スルニ難キコトアリ而シテ現役ノ豫備、後備ヲ問ハス其戰場ニ立ツトキハ正式軍隊ト

リト雖戰爭法上戰闘員ト云フハ其實戰闘ニ從事スルモノノミヲ指シ後備又ハ國民兵ニシテ家ニ在リ職業ニ從事スルモノノ如キハ戰爭法上ノ戰闘員ニ非ス

交戰國ノ兵力ハ戰闘員及非戰闘員ヲ以テ之ヲ編成ス敵ニ捕ハレタルトキハ二者均ク俘虜トシテ扱ハル(一)ハトク陸規(二)茲ニ非戰闘員トハ交戰者即軍隊ニ屬スルモ手ニ武器ヲ執ラサル者ヲ謂フ所謂軍屬ト稱スルモノ是ナリ此等ノ者ハ特權ノ點ニ於テ兵力ハ一部タリ即俘虜ノ取扱ヲ受ケルノ權利ヲ有ス然レトモ戰闘員ニ對スルカ如ク故意ニ之ヲ殺戮スルヲ得サルナリ病傷者、救護員及戰闘無能力者ニ對シテハ特別ノ保護アリ後述赤十字條約ノ部ヲ見ヨ戰闘員トハ軍人ヲ謂ヒ非戰闘員トハ軍屬ヲ稱ス其ニ交戰國ノ兵力ヲ編成スルモノナリ然レトモ非戰闘員又ハ非戰闘者ト譯ス(一)ニシテ交戰國ノ兵力ヲ編成セザルモノアリ即普通ノ人民是ナリ故ニ非戰闘員ニ二種アリテ場合ニ依リ用語ノ意義異ルヲ記憶セサルヘカラス而シテ兵力ノ一部ヲ成ササル非戰闘員即戰爭ニ加ハラサル通常ノ人民ハ敵軍ニ害ヲ加ヘサルヲ以テ敵ヨリモ攻撃ヲ受ケサルナリ故ニ若人民ニシテ武器ヲ執リテ歐起スルトキハ其攻撃ヲ受ケサル權利ヲ喪失シテ或ハ一定ノ條件ヲ具フレバ交戰者ノ待遇ヲ受ケ又此條件ヲ缺クトキハ嚴刑ニ處セラルモノトス而シテ公然ノ交戰者ト然ラサル者ト區別ハ攻擊軍ニ在テハ明ナコトシテ國防軍ニ在テハ然ラス被攻擊國ノ人民ハ其國ノ一員トシテ又正當防衛上防禦行為ニ出ツルコトアリ即正式軍以外ニ一般臣民カ愛國心ヨリ又ハ自家防禦ノ必要上ヨリ蜂起シテ敵ニ反抗スルコトアルハ自然ノ人情ナリ之ヲ捕ヘテ嚴刑ニ處スルハ酷ナリ故ニ一定ノ條件ヲ具フル民兵及義勇兵團ハ之ヲ交戰者ト看做シ其特權ヲ認ムヘキナリ

海牙條約第一條ニ依レハ左ノ條件ヲ具フル民兵及義勇兵ハ之ヲ交戰者トシテ扱フヘキモノトセリ即

一 部下ノ爲ニ責任ヲ負フ首領ヲ戴クコト
 二 遠方ヨリ有別ニ得ヘキ固著セル徽章ヲ有スルコト
 三 公然武器ヲ携帯スルコト
 四 戰爭ノ法規例ヲ遵守スルコト
 是ナリ而シテ民兵又ハ義勇兵ヲ以テ軍ノ全部又ハ一部ヲ組織スル國アリ小國ニ於テ殊ニ然リト爲ス此
 場合ニハ軍ノ名目中ニ包含スルモノトス
 民兵又ハ義勇兵團ニシテ如何ナル條件ヲ具フルトキハ之ヲ交戰者ト看做スヘキハ大國ト小國ノ間ニ
 主張ノ異レル所ニシテ小國ハ其條件ヲ輕タスルニ利アリトシ大國ハ平常莫大ノ軍隊ヲ擁スルヲ以テ民
 兵、義勇兵ヲ交戰者ト認ムル條件ヲ重クセンコトヲ主張セリ昔佛戰爭ノ際佛國ニハ「フラン、タイル」
 「ナル」不規則軍隊アリ其軍隊ハ首領ヲ戴カス唯青キ「ズボン」ヲ穿テ帽子ニ一定ノ紐ヲ結ヒ時トシテ
 一定ノ帽子ヲ戴クアルノミ獨逸ハ之ヲ交戰者ト認メサリキ是蓋(一)佛國ノ軍ノ一部ヲ成スモノニ非ス
 (二)服裝、徽章不完全ナリ直ニ取離スヲ得ルトノ理由ニ因レルナリ
 未占領セラレサル地方ノ人民ニシテ敵ノ接近スルニ當リ(一)進テ武器ヲ執リテ侵入軍ニ抗敵スル者ハ
 (二)戰闘ノ法規例ヲ遵守スルトキハ交戰者ト看做サル之ヲ舉國兵ト謂フ「ブルキセル」會議及海牙會
 議ニ於テ議論ノ結果斯ク決定セラレタリ(海牙條約)敵軍ノ占領後ハ占領地ノ住民ハ占領軍ニ抵抗ス
 ヘカラス占領軍ハ戰時占領中一時占領地ニ權力ヲ樹立セルモノナレハナリ
 第二 海軍
 一 軍艦 戰爭法上軍艦トハ國家ノ海軍ニ屬シ戰闘的設備ヲ有スル船舶ナリ即軍艦タルハ心素ト體素

トノ二者ヲ要ス心素トハ國家カ或船舶ヲ自國ノ軍艦トナスノ意思ニシテ體素トハ其船舶カ軍艦タルノ
 有形的設備ヲ有セサルヘカラサルヲ云フ詳言スレハ
 (イ) 心素(國家ノ意思) 國家カ或船舶ヲ自國ノ軍艦ト爲スノ意思ハ種種ノ方法ニ於テ表示セラル即
 (イ)之ニ艦名ヲ附シ艦籍ニ編入シ(ロ)之ニ國旗又ハ軍艦旗乃至旗號ヲ掲ク(ハ)現役海軍將校ヲシテ
 之ニ乗組マシムルカ如キナリ
 (ロ) 體素(或船舶カ軍艦タルニハ(イ)軍艦タルノ構造即戰闘ニ堪フルノ構造ヲ有セサルヘカラス但
 其不完ヲ問ハス又其種類ノ如何ヲ問ハス甲鐵戰闘艦、巡洋艦、砲艦、水雷艇等皆是國際法上ハ軍艦
 ナリ(ロ)乗組員ヲ有セサルヘカラス但其多少ヲ問ハス
 軍艦タルニハ之ヲ戰艦ニ供スルノ目的ヲ有スルヲ必要トスルカ戰爭法ニ在テハ然リト答ヘサルヲ得
 ス「ベレールス」ハ此點ニ關シテ消極說ヲ採ルト雖氏ハ平時ニ於ル特權ノ點ヨリ軍艦ヲ觀察セルノミ
 ニシテ戰爭法上ヨリ立論セルモノニ非ス
 又軍艦タルニハ武裝(兵器彈藥ノ積込ミアルコト)セルコトヲ要スルヤ之亦然リト答ヘサルヘカラス
 「ベレールス」反對說ハ前同様ノ理由ニヨリ戰爭法上ヨリ觀察セル軍艦ニ關シテハ誤レリ
 運送船(御用船)ハ假令海軍士官監督將校トシテ乗込入ルアリト雖モ軍艦ニ非ス何トナレハ戰闘ノ
 用ニ供セラルモノ(交艦機關)ニ非サレハナリ
 二 私裝捕拿船 私裝捕拿船トハ私有船舶ニシテ政府ノ委任ヲ受ケ海上ニ於テ敵國ノ商船捕獲ニ從事
 スルモノヲ謂フ而シテ不法行爲ニ出テナラシムル爲メ該船舶ヲシテ相當ノ保證金ヲ官ニ納付セシム
 私拿船ノ起源ハ中古ニ於テ被害者カ自ラ加害者ノ船舶ヲ捕ヘテ満足セルニ出ツ私人ハ國家ノ委任ナク

シテ獲ニ敵ノ商船ヲ捕獲セリ今日私拿船ヲ許ス國ニ在リテハ形式的特許ヲ與フルヲ常トス然ラサレハ海賊タルヲ免カレシ交戰國政府ハ私拿船ヲラントスルモノニ捕獲特許ヲ與フ自國臣民ニ之ヲ與フルヲ通例トス中立國人民ニシテ之ヲ受クルハ違法ナリ敵船ヲ捕獲セルトキハ審檢所ニ引致シテ其審檢ヲ受ク此捕獲ハ其利益非常ニ多カリシヲ以テ十七世紀十八世紀ニ於テハ之ヲ爲ニ會社ヲ設立スルモノノスラ之アリキ中立國船ト雖封港犯アルモノ及禁制品ヲ輸送スルモノハ之ヲ捕獲スルヲ得
千八百五十六年ノ巴里宣言ニ於テ私拿船ハ之ヲ廢止セリ故ニ巴里宣言ニ加入セル國ハ其國ノ間ノ戰爭ニハ私拿船ヲ用ヒサルコトナレリ十八世紀ノ終ヨリ私拿船ニ反對ノ風潮ヲ生シ千七百八十五年ノ米普間ノ條約ハ私拿船ヲ廢シ同時ニ軍艦カ私有財産ヲ捕フルコトヲ廢セントセシモ成ラズ然ルニ米國年以來米國ハ私拿船ヲ廢シ同時ニ軍艦カ私有財産ヲ捕フルコトヲ廢セントセシモ成ラズ然ルニ米國カ千八百五十六年ノ巴里宣言ニ加ハラザリシハ一見奇ナルカ如シト雖同國國務卿「マーシーカ」言ヘル如ク私拿船ノ廢止ニ止ラス海上私有財産ヲ全ク捕獲セサルニ至ラサル以上ハ海軍力ノ
強大ナラサル米國ニ取リテハ不利ナレハナリ
私拿船ハ常ニ營利貪慾ノ目的ニ供セラル戰爭中ニ在リテ此等私利ヲ營ムコトヲ許スハ不當ナリ殊ニ其行爲ニ對シテ委任國カ一責任ヲ負ハサルハカラサルニ至テハ益不可ナリ
巴里宣言ハ私拿船ヲ廢止セリト雖巡洋艦ニ依ル敵船捕獲ハ今尙廢止セラレス否將來ニ於テ益頻繁ナルヘシト論スル者アリ後日ノ說明ニ讓ルヘシ

「巴里宣言」ニ加ハラサル國ハ北米合衆國、西班牙、墨西哥、「ボリビア」、「ヴェネズエラ」、「ニューグラナダ」、「ウルグアイ」是ナリ此等ノ諸國間及此等諸國ヲ敵國トスル戰爭ニハ私拿船ノ使用アリ得ヘシ

三 義勇艦隊

(イ) 普佛戰爭ノ際ハ普國義勇艦隊 千八百八十年七月二十四日ノ勅令ニ依リ普國ハ義勇艦隊ノ組織ヲ命シ船船所有者ヲ勸誘シテ佛國軍艦ヲ破壞セシメ且莫大ノ賞ヲ懸ケタ之ヲ獎勵セリ(一)水兵ハ船船所有者ノ出ス所ニシテ(二)海軍ノ規律ニ服ス(三)士官ハ商船ノ船員之ニ當リ海軍士官ノ制服ヲ着用セリト雖(四)普國海軍ノ一部ヲ成スモノニ非ス又之ニ隸屬セルモノニモ非ス唯著大ノ功勞アリタル者ハ海軍ニ列セシムルヲ得ルノミナリキ佛國ハ此義勇艦隊ヲ以テ私拿船ト異名同物ニシテ巴里宣言ノ主旨ニ反スト爲シテ其非ヲ鳴シ之ヲ英國ニ訴ヘタリ英國王室法律顧問ハ之ヲ以テ私拿船ト其性質異ルモノトノ意見ヲ抱ケリ然レトモ此義勇艦隊ハ(イ)敵ノ軍艦ノミヲ捕ヘタルコト(ロ)海軍ノ法律ニ服セルコトノ二點ノ外私拿船ト何等異ル所ナク私費ヲ以テ維持シ私益ヲ以テ目的トセリ故ニ少クトモ巴里宣言ノ趣旨ニハ反スルモノト謂ハサルヘカラス(「ホール」五四七頁以下)

(ロ) 露國義勇艦隊 ハ私費ヲ以テ建造セラレ平時ニハ商船旗ヲ掲ケ海軍大臣ノ所轄ニ屬シ其管理ハ海軍大臣ノ直接監督ニ屬シ本店ヲ聖彼得堡ニ在ル特別常置員ニ委任シ常置員ハ海軍省、大藏省、陸軍省等ヨリ之ヲ出シ委員長ハ現役將校ヨリ勸任シ商業上ノ主義ニ基キ營業ヲ爲スト雖「オデッサ」又ハ聖彼得堡ト浦羅斯德ノ間ニ毎年十八回以上ノ航海ヲ爲スヘク囚徒輸送ノ爲ニ航海ヲ爲スコトアリ政府ノ保護金ヲ受ク然レトモ其軍艦ノ一種タル性質ニ至テハ大ニ疑ハシ

「スモレンスク」號事件 日露戰爭中露國義勇艦隊所屬船「スモレンスク」號ハ商船旗ヲ掲ケ武裝ヲ爲サシテ黑海ヨリ「ダーダネルス」海峡ヲ通過シテ地中海ニ出テ蘇士ヲ通過シ紅海ニ趣キ獨逸郵便船「プリンツ・ハインリッヒ」號ニ停航ヲ命シ日本ニ宛テタル郵便行囊數箇ヲ押收シ船船其モノハ之ヲ

放免セリ而シテ又「スモレンスク」號ハ紅海ニ於テ更ニ英國船舶「マラッカ」號ヲ拿捕シ露國國旗ノ下ニ露國人ヲ乗組マシメ露國人ノ指揮ノ下ニ之ヲ蘇士ニ伴レ歸リ更ニ「セバストポール」ニ引致シテ實檢ニ附セントセシカ英、獨ノ人心ハ此等ノ報ヲ得テ大ニ激昂シ英、獨ノ政府ハ露國政府ニ對シ本件ニ關シテ抗議ヲ提出セリ蓋「ダーダネルス」海峽ハ巴里條約ノ結果トシテ軍艦ノ通過ヲ許サス「スモレンスク」號ニシテ軍艦ナラハ「ダーダネルス」ヲ通過スルヲ得ヌ又軍艦ニ非サレハ中立國ノ船舶ニ停航ヲ命ジ之ヲ臨檢スルコトヲ得サレハナリ露國政府モ此矛盾ヲ辯解シ難ク遂ニ義勇艦隊所屬船舶ヨリ臨檢權ヲ取上ケタリ故ニ今日以後ニ在テハ此等ノ船舶ハ假令運送船トシテ使用セラルルコトアルヘキモ戰開捕獲ノ權ナシ故ニ軍艦ニ非サルナリ

第十五章 戰域(交戰權活動ノ範圍)

戰爭ニハ主體アリ客體アリ手段アルノ外猶場所ヲ要ス之ヲ戰域ト謂フ戰域ニハ事實上ト法律上ノ二種アリ事實上ノ戰域ハ俗ニ戰場ト稱シ又ハ作戰地帶ト謂フモノト同シ事實戰爭ノ行ル地域ニシテ通常交戰國ノ領域(領土領水)及公海トスト雖中立國ニ於テ事實交戰行為行ルルトキハ是亦事實上ノ戰域ト謂フヘシ

法律上ノ戰域即固有ノ意義ニ於ル戰域ハ戰爭ヲ行ヒ得ル地域ヲ指ス換言スレハ戰爭法ノ(局外中立法ニ非ス)支配ヲ受クル地域ヲ指スモノナリ交戰國ノ領域(領土領水)及公海是ナリ(一)交戰國ノ領域カ攻擊ノ目的物ト爲リ戰爭法ノ支配ヲ受ケ戰爭ヲ被ルハ今更喋喋ヲ要セス古代ニ在テハ征略者例之歷山、成吉思汗等ノ馬蹄ノ過クル處生草ナカリシナリ又(二)公海ハ何國ノ專有ニモ屬セスシテ世界ノ

公用ニ委セラレ萬國ノ通商ニ利用セラルル如ク又交戰國ノ戰爭行為ニモ使用セラルル公海ニ於テ交戰國ハ戰爭行為(作戰動作)ノミナラス臨檢、捕獲等モ「爲ス」得ヘシ反之中立國ノ領域(領土領水)ハ戰域タルヲ得ヌ局外中立國ノ領域ハ交戰國モ之ヲ利用スルヲ得ヌ又中立國モ之カ使用ヲ交戰國ニ許スヲ得サルナリ交戰國ニシテ之ヲ利用セハ中立ノ侵害ト爲リ中立國ニシテ之カ利用ヲ許セハ中立義務違反ト爲リ(其詳細ハ局外中立ノ部ニ於テ説明スヘシ)他方ノ交戰國ハ中立違反トシテ之ヲ責メ又ハ場合ニ依リ之ヲ以テ開戦ノ理由ト爲ス(敵ニ與セルモノトシテ)コトヲ得ルナリ

狹義ノ戰域即法律上ノ戰域ハ交戰行為ノ行レ得ル地域ヲ指ス故ニ事實上ノ戰域又ハ作戰地帶ト云フト異ルコト以上ノ説明ニ依リ明ナラン

又法律上ノ戰域(以下略シテ單ニ戰域ト謂フ)ハ公海ノ外、交戰國ノ領土、領水ヲ包含ス領海ト内水トヲ間ハヌ又本國ト殖民地トヲ間ハサルナリ此等ハ皆敵國ノ適法ニ侵入シ得ル場所ナリ

然レトモ場合ニ依リ交戰國ノ領域ト雖之ヲ制限シテ交戰權ノ活動以外ニ置クコトアリ之ヲ中立地域ト謂ヒ又ハ不可侵地域ト云フ要スルニ一定ノ地域ニ戰爭行為ヲ爲スヲ禁スルヲ謂フ合意ニ出ツルコトアリ又合意ナクモ政治上ノ理由ヨリスルコトアリ

(イ) 合意上ノ不可侵地域 是一定ノ地域ヲ限リ交戰國カ其地ニ於テ戰爭ヲ爲ササルコトヲ約束スルヲ謂フ長時アリ(戰爭期間ヲ通シテ)一時アリ(例之休戰中)後者ノ例ハ千八百七十一年一月二十八日普佛戰爭中東南戰場ヲ中立地域ト爲シタルガ如キ是ナリ又日清戰爭中英國ハ我國ニ向ヒ上海ニ於テ戰爭ヲ爲ササルコトヲ要求シ我國ハ之ニ應シタルコトアリ是交戰國間ノ合意ニ非スシテ中立國(英)ノ爲ニ交戰國(日本)カ讓歩ヲ爲シタルニ過キササルナリ故ニ上來述フル所ト聊其性質ヲ異ニス當時清

國カ同所ニ於テ禁制品ノ輸送又ハ軍人ノ召募等ヲ爲セル由ヲ聞ク是清國ノ所爲トシテ必シモ不當ニ非ス蓋清國ハ何國ニ對シテモ上海ヲ中立地域ト爲スヲ約セザリシヲ以テナリスル場合ニ於テ我國ノ利益ヲ損ハルハ勿論ナルカ果シテ如何ナル手段ヲ採ルヘキヤ諸子請フ考一考セヨ

(二) 政治上ノ不可侵地域 合意ナキモ政治上ノ理由ニ因リ事實上此地ニ於テ戰爭ヲ爲ササルモノナリ即法律上ハ戰域タルモ政治上、事實上交戰權ノ活動地域ト爲ササルモノヲ謂フ列國ハ均勢ヲ維持スル爲メ干涉ノ必要上古來往往政治上ノ中立地域ヲ設定セルコトアリ(例之希臘事件ニ關スル英、露ノ干涉ノ際及千八百三十二年ニ於テ「アントワープ」ニ對スル佛國ノ干涉及東方問題ノ場合ノ干涉佛、ニ付「サンジャンダタル」又總テ干涉紛糾ヲ避クル爲メ事實上ノ不可侵地域ヲ設定スルコトアリ例之近時ノ問題タル旅順、大連、威海衛、膠州灣ノ租借ニ於テ此例ヲ見ル此等租借地ハ條約上清國ノ領土ニシテ清國ハ其上ニ主權ヲ有スルモ露、獨、英、各其租借地ノ上ニ高權支配權ヲ行フコト恰ホ例之今後日清開戰ノ際旅順、威海衛等ヲ攻撃セハ露國、英國ハ之ヲ默止セザルヘク而シテ彼等ノ干渉ハ我國ノ不利ヲ招クト甚シ故ニ我國ハ己ム得ヌ政略上、事實上之ヲ不可侵地域トセザルヲ得サルヘク旅順、大連灣等ニ於テ戰爭行爲ヲ爲スヲ得サルヘシ予ハ一步進ヲ租借地ハ割讓ノ一形式ナリト説ク主張セントス(リスト)「リビエー」ローレンス等ノ學者ト共ニ果シテ然ラハ上ノ如キ問題ナシ但此點ハ議論アリ茲ニ詳論スルノ限ニ在ラス

平時ヨリ條約ヲ以テ一定地域、河川、運河等ヲ中立地域、不可侵地域ト爲スコトアリ蘇西運河ノ中立「コンゴ」流域ノ中立等ノ如キ其著例ナリ詳細ハ平時ノ講義ニ讓ラン領海ノ議論モ平時ノ都ニ讓ル

戰時法ノ關スル所ニ非サルヲ

局外中立國ノ領土、領水ハ戰域タルヘカラサルコト既ニ述ヘタル所ノ如シ然レトモ緊急ノ場合ニ於テ敵對行爲ヲ爲スニ非スシテ中立國領域ニ進入スルカ如キ例之敵ニ追窮セラレタ己ム得ヌ中立國ニ逃入ルハ中立領土ノ亂用ニ非ス之ヲ戰域ト爲シタルモノニ非ス相手國モ之ヲ戰域ト見做シ此地ニ於テ敵軍ヲ追撃スルヲ得サルナリ但是局外中立國カ中立義務ヲ嚴守スルヲ條件トスルモノニシテ當該中立國ハ其收容シタル軍隊ヲシテ武器ヲ捨テシメ之ヲ戰場ヨリ遠カレル土地ニ留置シ又ハ監守幽閉スヘキナリ緊急ノ場合ニ於テハ中立國ヲ戰域ト爲スコトヲ得ルヤ否ヤ請フ「ウエストレーキ」ノ言ヲ紹介セン氏曰ク

緊急危害ノ場合ニ於テ之ヲ避ケンカ爲メ外國領土ニ侵入シテ行動スルヲ得ルヤ何人モ此權利ヲ否認セザルヘシ今兩交戰國ノ中ニハ中立國アリト假定セヨ(註例之曰露開戰ノ際ニ朝鮮ノ地位ニシテ交戰國ノ一方ハ中立國ノ領域ヲ侵シテ戰爭上ノ地利ヲ占メントシ而モ中立國ハ之ヲ制止スル能力ナシト想像セヨ)中立國ハ自ら攻撃行ハヒ又ハ行ハントスルモノニ非スト雖他方ノ交戰國ハ機先ヲ制センカ爲メ其中立國領域ニ侵入シ敵國ノ行動ヲ妨クルヲ得ヘシ是戰時自衛權ノ結果ナリ中立國カ其領土内ニ於テ甲交戰國ノ行動ヲ防止スル能ハサルトキハ乙交戰國カ自ら之ニ應スルノ手段ヲ探ルヲ許諾セルモノト看ルヘク然ラテハ敵(甲交戰國)ニ與シタルモノトシテ乙交戰國ハ中立國ヲ敵國視スルヲ得ヘシ言フ勿レ當中立國ハ故意ニ敵對行爲ヲ爲サスト行爲ノ必然ノ結果ナリ其故意ニ出ツルモノト看做スノ外ナシ千八百七十七年英國カ抹丁ノ艦隊ヲ差押ヘタルハ此例ナリ當時英ノ敵タル佛露ハ丁抹ヲ強迫シテ英國ニ敵對スル戰列ニ加入セシメントセルヲ以テ英國ハ先之ヲ拿捕シテ自ラ危害ヲ

豫防セリ但自衛行為ハ必要ノ程度ニ止ムヘシ上ノ場合ニ英國ハ平和回復ノ後艦隊ヲ還付スヘキヲ誓約セリト
交戰國ノ領域ノ外同盟國ノ領土領水モ亦戰域ト爲ル同盟國モ實ハ交戰國タルコト既ニ述ヘタルカ如シ同盟國ノ領土領水ニ於テ作戰動作及臨檢、捕獲、捕獲審檢所ノ設置、捕獲品ノ賣却等ノ行為ヲ爲スヲ得ヘシ但同盟國ニ於ル捕獲審檢所ノ審檢ハ交戰國自身ノ審檢官ニ依ルモノトス

第十六章 交戰手段、害敵手段

交戰手段トハ(一)廣義ニ於テハ交戰國カ戰爭ヲ行フ爲メ敵國及其臣民、財產、領土ニ對シテ施ス所ノ總テノ手段ト處置トヲ總稱ス例之作戰動作ハ勿論封鎖、臨檢、搜索、捕獲、課金、徵發等皆之ヲ包含ス(二)狹義ニ在テハ直ニ敵ノ戰鬪力及戰鬪設備(城砦等ヲ指ス)ニ對シテ行フノ手段ト處置トヲ謂フ以下害敵手段トシテ述ヘントスル所即是ナリ但海戰ニ關スルコトハ後日ノ説明ニ譲リ今ハ陸戰ノ場合ノミヲ論ス
戰爭ノ目的ハ敵ノ戰鬪力ヲ弱メ敵國ヲ屈服セシメ自國ノ要求主張ヲ容レシムルニ在リ此目的ヲ達スルニ必要ナル一切ノ手段ハ害敵手段トシテ使用スルヲ得サルヘカラス然レトモ現今ノ國際法トシテ無益ノ苦痛ヲ與フルニ過キサルカ又ハ苦痛ノ割合ニ實效大ナラサルモノハ之ヲ禁止スヘキモノトス要スルニ交戰者ハ害敵手段ノ選擇上無限ノ自由ヲ有スルモノニ非シテ之ヲ制限スルハ戰爭法ノ大目的ナリ(海牙條約二三條)害敵手段ハ(一)戰爭ノ目的(二)博愛人道ノ兩者ヨリ制限ヲ受ケ其制限ハ慣例之ヲ認メ又條約ニ於テ定メラル(三)非キセル會議ノ決議ハ各國ノ採納スル所ト爲ラザリシモ海牙條約(陸戰

ノ法規例ニ關スル條約)中害敵手段ニ關スルモノ數條アリ
交戰手段ノ制限ヲ左ニ舉ケン

一、詐偽ノ使用ニ關スル制限 凡戰爭ニ於テ暴力ヲ欺トハ之ヲ使用スルコト原則トシテ自由ナリ兵ハ由來暴力ナリ兵ハ素奇ヲ以テ勝タルヘカラス多少詐偽ノ行為ナカルヘカラス故ニ是戰爭詐術トシテ戰爭法ノ認ムル所ナリ海牙條約二四條ニ奇計並ニ欺情、地形探知ノ爲メ必要ナル手段ハ適法ナリト規定スルハ此原則ノ一適用ニ過キサルナリ敵ヲ欺キ誘惑シテ己有利ノ地位ニ立ツニ至ルハ正ニ戰術ノ巧妙ナル所ナルヘシ而シテ其目的或ハ降服セシメンカ爲ナルコトアリ又和ヲ請ハシメンカ爲ナルコトアリ或ハ又敵ヲ退カシメンカ爲ナルコトアリ又一定ノ範圍内ニ於テ敵ノ制服ヲ假裝シテ著用スルヲ得ヘシ即退避ノ際敵ノ目ヲ眩惑スルカ爲ニ敵ノ標準ヲ假用スルカ如キ是ナリ然レトモ戰鬪ヲ爲スニ當テハ宜ク假裝セル敵ノ服裝ヲ脱スヘク又軍艦ニ在テハ敵ニ對シテ砲火ヲ開クニ當テハ宜ク假用セル敵ノ軍艦旗ヲ下シ自國ノ旗ヲ掲揚スヘキナリ是戰鬪ノ誠實ニ行フヘキモノナリトノ原則ノ結果ナリ又休戰旗(軍使旗)ヲ亂用スルコトヲモ許サス之ヲ亂用スルコトキハ開議ト同一ノ待遇ヲ受ク又亦十字條約(白地ニ赤十字)ヲ亂用シテ同條約ノ保護ヲ受クヘカサル建物ニ之ヲ掲タルカ如キハ不法ノ詐欺行為ト謂フヘキナリ海牙條約第二三條(一)ニ曰ク「濫ニ軍使旗及國旗其他軍用ノ標章並ニ敵兵ノ制服及「ジュネーブ」條約ノ徽章ヲ使用スルコトヲ禁止ス」ト又敵國人若ハ敵軍ヲ殺傷スルニ欺罔行為ヲ用フルモ同條約ノ禁スル所トス(同條約二三條(ロ))
二、兵器ノ使用ニ關スル制限 不必要ナル苦痛又ハ效果ニ比例セサル苦痛ヲ敵ニ與フル兵器ハ之ヲ使用スルヲ禁スルモノトス(海牙條約二三條(ホ))

- (イ) 毒ヲ使用スルヲ得ス。例之敵ノ飲用水ニ毒ヲ流スカ如キハ不法ナリ野蠻的行爲トシテ擯斥ス
(シ) 既ニ古代印度「マヌ」ノ法典スラ之ヲ禁セリ況近代ノ文明國ヲヤ
(ロ) 毒ヲ施シタル兵器ヲ使用スルヲ禁ス。彼ノ野蠻人カ今日ニ於テ尙使用スル毒矢ノ如キ一度接
觸セハ必斃ルルカ如キハ文明國ノ戰爭ニ於テ許スヘカラス
(附論) (甲) 猛獸ノ使用、例之ハ象ヲ放チ又ハ牛角ニ油ヲ澁キテ火ヲ點シ敵ニ向ハシメタル如
キハ歴史談トシテハ聞ク所ナレトモ文明國間ノ戰爭ニハ許スヘカラス所ナリ戰爭ハ猛獸ノ格
闘ニ非スシテ嚴然タル國家兵力ノ爭鬪ナレハナリ(乙) 野蠻人ノ使用、文明國間ノ戰爭ニ野蠻人
ヲ使用スルハ亦違法ナリ野蠻人ハ法律觀念ヲ缺クモノニシテ戰爭法規ヲ遵守スルノ能力ナシ敵
ヲ慘殺シ婦女ヲ辱カシムルカ如キハ彼等ノ常態ナリ昔佛戰役ノ際那破翁三世カ亞弗利加人又ハ
土耳其人ヲ用ヒタルハ世人ノ批難スル所ナリ
(ニ) 千八百六十八年露帝ノ招集ニ因リ聖堡得彼ニ開會セル列國會議ニ於テ決議セル所ニ依レハ締
盟國ハ其相互ノ間ニ戰爭ヲ爲スニ當リテハ四百グラム以下ノ爆發性又ハ燃燒性ノ物質ヲ充テタ
ル發射物ノ使用ヲ止ムヘキコトヲ約セリ蓋無益ニ苦痛ヲ増大スルニ過キサレハナリ
(甲) 輕氣球上ヨリ(又ハ之ニ類似ノ新方法ニ依リ)發射物、爆發物ヲ投下スルコトヲ五年間禁止
スルコト(此五箇年ハ昨年ヲ以テ既ニ經過セリ)
(乙) 窒息セシムヘキ瓦斯又ハ有毒質ノ瓦斯ヲ撒布スルヲ唯一ノ目的トスル發射物ノ使用ヲ禁止
スルコト

- (丙) 外包硬固ナル彈丸ニシテ其外包中心ノ全部ヲ蓋包セヌ又ハ其外包ニ截刻ヲ施シタルカ如キ
人體内ニ入リテ容易ニ開展シ又ハ扁平ト爲ルヘキ彈丸ノ使用ヲ禁止スルコト
ノ三宣言ニナリ茲ニ注意スヘキコトハ此宣言ハ締盟國中ノ二國又ハ數國ノ間ノ開戰ニ於テノミ本
宣言ヲ遵守スルノ義務アルコト是ナリ
(ホ) 釘形鉛彈又ハ不正整ノ形ヲ成セル鐵彈ノ使用モ之ヲ違法トスルコト學說及慣例ノ認ムル所ナ
リ
(一) 敵ノ兵力ヲ滅殺スルノ效果ニシテ苦痛ト比例スルトキハ慘酷ナル手段モ亦之ヲ許ス例之水雷
ノ使用及艦船ノ衝突ノ如キ是ナリ
(二) 敵兵ノ生命身體ニ關スル制限 トシテハ以上兵器ニ關スルモノノ外左ノ數者アリ
(イ) 殘忍ノ無益ノ酷遇ハ原則トシテ之ヲ禁ス然ルニ日露戰爭ニ於テ露軍ハ此原則ヲ無視シ我兵ノ
死者、負傷兵ニ對シテ頗ル慘虐非道ノ行爲アリキ
(ロ) 敵國ノ平和ナル臣民ヲ殺戮スルハ之ヲ禁ス戰爭ハ戰鬪力ノ間ニ行ルヘキモノナレハナリ又戰
場以外ニ在テ敵兵ヲ殺戮スルモ亦非ナリ(「ブルン」「チュリー」)
(ハ) 敵兵ノ手足ヲ折斷シテ之ヲ不具ト爲スヲ禁ス然ルニ露軍屢此規則ニ違反セリ
(ニ) 降兵ヲ殺傷スルヲ得ス(海牙條約二三條)例外トシテ(一)復仇行爲(二)戰爭上ノ必要ノ場
合ニハ此限ニ在ラス(但シ此非常ノ場合ニ於テ非常ノ手段ナレバ實際ニハ殆之ヲ見ス)
(ホ) 豫一般的ニ助命セザルノ宣言ヲ爲スヲ得ス例外トシテ復仇行爲トシテハ之ヲ許ス然レト戰爭
ハ虐殺膠殺ニ非ス助命ノ義務ハ文明及人道ノ要求スル所ナリ但捕虜ヲ殺スニ非サレハ軍隊自身ノ

安危ニ關スルトキハ自家防衛ノ必要上(戰爭ノ必要)已ムヲ得ス之ヲ助命セサルコトアル(キノミ
(一) 賞ヲ懸ケテ敵將ノ頭顱ヲ買フカ如キハ不正行爲トス

四 敵產ノ破壊及押收 戰爭ノ必要上萬已ムヲ得サル場合ノ外敵ノ財産ヲ破壊押收スルモ亦禁セラル
ル所ナリ彼ノ敵地ヲ荒廢シ又ハ之ヲ燒土ト爲スカ如キハ野蠻的行爲トシテ今日一般ニ認メラレサル所
ナリ敵地ノ外財産ノ破壊、差押、沒收等皆禁セラル但戰爭ノ必要上已ムヲ得サル場合ニハ之ヲ許サル其
場合ヲ決スルハ司令官ノ責任トス然リ而シテ敵地、敵產ノ破壊、押收ハ作戰動作ノ必要アルトキハ之ヲ
許スハ「リニエール」ノ説ケル所ノ如シ例之進軍ノ爲ニ又ハ攻撃防禦用ノ土工ノ爲ニ又ハ退軍ヲ掩蔽ス
ル爲ニ破壊シ又ハ燒燼スルカ如シ土地荒廢ノ外家居其他ノ建造物、植物、橋梁、鐵道、道路、電信等ノ破
壞、燒燼ノ如シ但公共ノ建造物ヲ破壊スルハ不法トス彼ノ國ノ堤防ヲ決潰スルカ如キハ其效果重大
ナレトモ一般ノ苦痛モ亦甚シ故ニ適法ナリヤ否ヤ疑問ナラン緊急ノ場合ニハ決潰スルモ可ナリトノ説
アリ(「ホール」等)

海岸市邑砲撃ハ後日ノ説明ニ譲ラン市街戰爭ノ際ニ在ラハ普通ノ民屋ハ敵兵ノ占據セサルモノハ砲撃
スヘカラス但普佛戰爭ノ際ノ慣例ハ之ニ反セリ

第十七章 攻圍合圍及砲擊(攻擊)

攻圍砲擊ニ關スル法規下ノ如シ(海牙條約二五條乃至二八條)

一 攻擊(又ハ砲擊)ノ目的物 防禦セル、市府、町村、居宅、建物ニ限ル即城壁等ヲ築ケル場合ノ如シ
又市邑、建物等ヲ砲撃スルノ外物(財産)ヲ砲撃スルヲ得ス城壁ヲ設ケタル市邑ノ砲撃ニ在ラハ先可

成城壁其モノヲ目途トシテ砲火ヲ開クヘク平和的人民ノ居宅ハ可成の有恕スヘキモノナリ然レトモ
敵ノ降服ヲ速ナラシメンカ爲メ無制限ニ之ヲ砲撃スルモ軍事ノ必要ヲ理由トシテ辯護シ得サルニ非
ス殊ニ普佛戰爭中ノ事件ヨリシテ獨逸學者ノ主張スル所ナリ

二 通告義務 攻擊軍ノ司令官ハ砲撃ヲ始ムル前ニハ其旨ヲ敵ノ官廳ニ通告スルノ義務アリ但強襲ノ
必要アル場合ニシテ時機一瞬ヲ爭フ場合ニハ通告ノ義務ナキモノトス通告ノ目的ハ敵國ノ平和的人民
民殊ニ婦女、小兒等ヲシテ他ノ地ニ避難セシムルト又教會、美術館、博物館、病院等ニ特別ノ標識ヲ建
テシメ之ヲ表示セシムルトニ在リ(此表示アルモノハ砲撃ヲ避クルノ義務アリ)然リ而シテ通告ハ單
ニ砲撃ノ意思アル旨ヲ通知スレハ可ナリ何日何時砲撃スルト通告スルヲ要セス(「リビエー」)砲撃合
圍ヲ爲ス軍隊ハ平和的人民ニシテ難ラ他ノ地ニ避ケントスルモノハ之ヲ許可スルヲ力ムヘシト雖許可
スルノ義務ハ存セス軍事動作ニ妨ナキ限ニ於テ之ヲ許可スルヲ得ルノミ特ニ中立國人民ニ對シテ然
リトス千八百七十年十月二十八日巴里ノ合圍ニ於テ普國ハ中立國外交官及中立臣民ニ退去ヲ勸告セ
シモ千八百七十一年一月以後ハ之カ退去ヲ許サザリキ

被合圍地ノ司令官ハ其人民ヲ外部ニ追放スルヲ得(退去ヲ命ス)殊ニ食料缺乏ノ虞アル場合ニ於テ然
リトス然レトモ是已ムヲ得サル必要アル場合ノ外爲スヘカラサル所ナリ而シテ合圍軍ノ司令官ハ又
之ヲ反對ニ人民カ合圍地外ニ出ツルヲ禁スルコトヲ得(軍事動作ノ必要アルトキハ之ヲ爲スヲ得道
義上ノ義務トシテハ退去ヲ許スヘシ)果シテ然ラハ人民ハ時トシテ進退難レ谷ノコトヲ止ランカ
自國軍司令官ノ嚴命アルヲ奈何セン去ランカ合圍軍隊ノ之ヲ許ササルヲ奈何セン此場合ニハ被合圍
軍ノ司令官ハ人民ノ滯留ヲ許スノ義務アルモノトス

三 合國地、外部トノ交通、中立國ノ外交官ハ其本國政府トノ交通ヲ繼續シ得ルヤハ往往議論ノ存スル所ナリ合國軍ハ可成自己ノ軍事動作、妨ナキ限リ之ヲ許スヘキナリ但之カ爲メ軍事動作ニ困難ヲ感スルカ如キ場合ニハ之ヲ全ク遮斷スルコトモ亦爲シ得サルニ非ス蓋中立國ノ利益ト交戰國ノ利益ト衝突スル場合ハ前者ハ後者ニ讓ルヘキモノナレハナリ但爲ニ外國ノ輿論ノ物起スヘキハ覺悟セサルヘカラス妨ナキ限リ之ヲ許スヲ以テ安全トス普佛戰爭ノ際巴里合國ニ當リ中立國外交官ハ一週一日本國トノ通信ヲ許與センコトヲ普軍ニ請ヘルモ「ビスマーク」之ニ應セシテ書面ヲ公開シテ一普軍ノ檢閲ヲ受ケシメタリ(千八百七十年九月二十六日ノ通牒)他國外交官ハ熱心ニ之ニ反對シ(同年十月六日ノ通牒)「ビスマーク」亦之ヲ反駁セリ(同年同月二十日ノ通牒)領事ハ依然其職務ヲ繼續スルヲ得ヘシ其管掌スル所專國際ノ私的關係ニ在レハナリ

四 教會、美術、博物館、學校、病院等ノ公共的建造物ハ之ヲ害スヘカラス但軍事動作ノ必要上例之砲火ノ響影ヲ受クルカ如キハ已ムヲ得サルナリ且又敵軍ニシテ之ヲ軍用ニ供スルトキハ之ヲ砲擊スルヲ得ヘキナリ被合圍者ニ在テモ砲火ヲ避クル爲メ上述ノ建物ハ特別ノ標識ヲ樹テ之ヲ表示スルノ義務アルモノトス遠方ヨリ看別ニ便ナラシメンカ爲ナリ

五 掠奪ノ禁 攻拔シタル市府町村ト雖掠奪スルハ之ヲ禁ス陸戰ニ於テハ掠奪ハ一般ニ禁セラル反之海戰ニハ商船ノ捕獲アリ

第十八章 俘虜

第一節 俘虜ノ性質

俘虜ニ捕虜ト云フト全ク相同シ俘虜トハ交戰國ノ兵力ヲ編成スル戰闘員及非戰闘員(軍人及軍屬)ニシテ敵國軍ニ捕獲セラレ敵國政府ノ權力内ニ陷ルモノヲ云フ換言スレハ適法ナル敵人ニシテ武裝ヲ解棄セルモノナリ敵兵ヲ俘虜トナスハ之ヲ處罰スルノ趣意ニアラスシテ其戰闘力ヲ減殺スル爲メ之ヲ自國軍ニ抑留スルニ過キサルナリ故ニ俘虜ハ之ヲ一定ノ場所ニ留置シ又之ニ對シテ已ムヲ得サル保安手段ヲ執ルヘキハ勿論ナリト雖其必要以外ニアリテハ博愛ノ心ヲ以テ人道ニ照シテ之ヲ倡スヘキコト近時國際法ノ原則ナリ

夫レ然リ而シテ俘虜トナルヘキモノハ主トシテ敵國ノ軍人軍屬ナルコト上述ノ如シト雖詳言スレハ左ノ如シ

- 一 敵國ノ戰闘員(海牙條約三條) 其降服シ又ハ捕獲セラレタル場合ニ俘虜トナルハ當然ナリ
- 二 戰闘員ニアラサルモ戰闘ニ直接ニ關係スル者 交戰中敵國ニ於テ顯要ノ地位ヲ有シ且戰爭ニ要ナル者即元首、其家族國務大臣、高等官、公使等ノ如キ是ナリ
- 三 交戰國ノ兵力ヲ編成スル非戰闘員(海牙條約三條) 兵站部員、供給者、憲兵、案内者、輕氣球員傳令者、電信員、軍隊用運人其他軍屬ニシテ凡テ軍隊ノ役務ニ從事シ軍ノ指揮下ニアルモノハ非戰闘員ナレトモ敵國ノ兵力ヲ構成スルモノナリ此等ハ直接ニ軍事ニ關スル役務ニ服スルモノナルヲ以テ換言スレハ敵ノ戰闘ヲ補助シ自國軍ニ有害ナルモノナルヲ以テ之ヲ俘虜トシテ抑留スルコトヲ得ルモノトス

四 直接ニ軍ノ一部ヲ成ササル從軍者、新聞通信員及探訪者、酒保用運人等はナリ但此等ハ自國軍ニ於テ之ヲ抑留スルヲ有益ト認ムルトキニ限リ(例之自國軍ノ事情ヲ敵ニ通スルヲ防カ爲メ)其所屬

陸軍官衙ノ證認狀ヲ携帶スル者ニ限リ俘虜ノ取扱ヲ受ク
五 敵國商船ニ搭乘セル水夫 此等ノ水夫ハ敵國海軍ノ役務ニ服スルノ恐アレハナリ

第二節 俘虜ノ待遇

俘虜ハ、愛ノ心ヲ以テ之ヲ取扱フヘク必要以外ニ虐遇スヘカラサルヲ原則トス、俘虜ノ拘置ハ、敵勢ノ減殺ヲ目的トスルカ故ニ必要ナル手段ノ行使ハ之ヲ妨ケス又俘虜ノ留置ハ之ヲ刑罰ト同視スヘカラス正當行為(戰闘)ニ從事中捕ハレタルモノナレハナリ

一 俘虜ハ敵國政府ノ權内ニ屬シ捕獲シタル個人又ハ軍團ノ權内ニ屬セス
二 俘虜ハ之ヲ市邑、城塞、陣營其他ノ場所ニ留置スルヲ常トシ一定ノ區域外ニ出テサルノ義務ヲ負ハシム但已ムヲ得サル場合(保安手段トシテ)ノ外幽閉スルヲ得ス留置ト幽閉トハ自由束縛ノ上ニ大ナル差異アリ

三 俘虜ハ拘囚政府ノ費用ヲ以テ給養セラル特約ナキ限りハ通常食料器具及被服ニ關シ俘虜ハ之ヲ捕獲シタル政府ノ軍隊ト對等ノ取扱ヲ受ク又俘虜給養ノ費用ハ後日俘虜ノ本國ヨリ償還ヲ受クヘキモノニ非ス

四 俘虜ハ其階級技能ニ應シテ勞務ニ從事セシムルヲ得ヘシ但其勞務ハ過度ナルヘカラス又作戰動作ニ關係スヘカラス又軍律ニ背馳セサル限りハ自己ノ利益ノ爲メ勞務ニ服シテ賃銀ヲ儲クルヲ許可セラルルコトアルヘシ是其健康ニモ利アルハナリ其實銀支給ノ割合ハ自國軍人ニ對スル報酬ト同等ナルヘシ俘虜ノ賃銀ハ一部ハ給養ノ費用ニ充テ一部ハ其境遇ヲ慰スルノ用ニ供シ尙剩餘アラハ解放ノ

際之ヲ交付ス

五 俘虜ノ一身ニ屬スル財產ハ依然其所自タリ兵器、馬匹、軍用書類ハ此限ニ非ス

六 俘虜ハ留置國ノ陸軍ノ法規命令ヲ遵奉スヘシ若不能順ノ行為アルトキハ嚴重手段(例之幽閉又ハ銃殺)ニ出タルコトヲ得逃走ノ俘虜逃走未遂中(其軍ニ達スル前又ハ之ヲ捕獲シタル軍ノ占領セル地方ヲ離ルル前)ニ再ヒ捕ハレタルトキハ死刑ニ處セラルルコトアリト雖一旦逃走ヲ遂ケタル後(既遂後)再俘虜トナルトキハ前ノ逃走ニ對シテハ何等ノ責ヲ負フコトナシ(懲罰ヲ受ケス)

七 俘虜ハ軍隊ノ訊問ニ對シテ誠實ニ應答スヘシ然ラサルトキハ待遇其他ニ關シテ不利ヲ受ク

八 俘虜情報局ハ交戰國(又ハ交戰者ヲ版國內ニ收容スル中立國)内ニ之ヲ設置シ俘虜ニ關スル一切ノ内合セニ答フルノ任務ヲ有スルモノニシテ俘虜ニ關スル銘銘票ヲ作り各當該官衙ヨリ俘虜ニ關スル各種ノ通報ヲ收集シ俘虜ノ留置移動入院並ニ死亡ニ關スル狀況ヲ知り據テ戰場ニ於テ發見セラレ又ハ病院若クハ綏帶所ニ於テ死亡セシ俘虜ノ遺シタル一切ノ自用品有價證券狀等ヲ收集シテ之ヲ關係者ニ傳達スルコトヲモ擔任スルモノナリ我國ハ日露開戰後直ニ俘虜情報局ヲ設置セリ蓋此點ニ關シテハ海牙條約ノ規定ヲ最初ニ實行セルモノナリ

九 俘虜救恤協會ハ俘虜ニ對スル慈善行為ノ媒介者タルモノニシテ陸軍及行政ノ規則ノ範圍内ニ於テ俘虜ノ留置所及其送還途中ノ休泊所ニ於テ救恤品ヲ分配スルカ如キ其行ヲ所ナリ

十 俘虜ノ將校ハ本國ノ規則ニ其規定アルトキハ給料ヲ受クルコトヲ得但後日本國ヨリ償還セサルヘカラス又俘虜ハ信教ノ自由ヲ享有ス

第三節 俘虜ノ終了

十 宣誓解放
俘虜ハ宣誓ノ後解放セラレコトアルヘシ但本國ノ法律カ之ヲ許ストキニ限ル宣誓被解放者ハ本國政府及捕獲國ノ政府ニ對シ誓約ヲ嚴守スルハ義務アリ本國政府モ之ニ對シ宣誓ニ違反スルノ勤務ヲ命シ又ハ勤務服役ノ申出ヲ應諾スヘカサルモノトス
宣誓シテ解放セラレタル者後日捕獲國又ハ其同盟國ニ對シテ兵器ヲ探テ再捕ヘラレタルトキハ誓約ヲ守ラサルモノトシテ軍法會議ニ附シタル後銃殺セラレヘシ
俘虜ヲ強追シテ宣誓解放ヲ受ケシムルヲ得ス(宣誓セヨト強ユルヲ得ス)又捕獲政府モ俘虜カ宣誓解放ヲ得ント請願スルモ必シモ之ニ應スルヲ要セス
下士卒ハ將校ニ依ルノ外自ラ宣誓ヲ爲スヲ得ス將校モ亦上長將校ニ伺フノ餘裕アルトキハ之ニ伺出ツルコトヲ要ス
俘虜ノ本國政府カ解放セラレタル俘虜ノ宣誓ノ追認ヲ拒ムトキハ再敵國ニ復歸シテ留置ニ服セサルヘカラス又敵國ニ其復歸ヲ許容セサルヘカラス然ラサレハ憐ムヘキ俘虜ハ天地間六尺ノ身ヲ容ルルニ所ナカルヘシ
被解放者ハ直接ニ戰爭ト關係セル行為ヲ爲スコトヲ得サルモノトス但戰鬪線外ノ土地ニ於テ間接ニ自衛ノ防守行為ニ干與スルモ妨ケナシ戰兵ヲ徵募シ訓練セシ或ハ戰線外ニ於テ保藥ヲ築キ戰線外ニ於テ軍事行政ニ與カルカ如キハ其自由ナリ但シ旅順降伏規約第七條ノ如ク如何ナル方法ニ於テモ日本

0439

ノ利益ヲ害スヘキ行為ヲ禁スル場合ハ別段トス
二 償贖解放
戰爭中俘虜ハ償贖金ニ依リ解放セラレコトアリ俘虜ノ償贖ハ古代ヨリ行ハルル所ニシテ封建時代ニハ地位アル人ハ君主ノ財産ノ如ク看做サレ其俘虜トナリタルトキハ之ヲ償贖救助セルコトアリ十七世紀ニモ尚此例アリ後俘虜ノ交換ト併行ハレ更ニ後代ニ至テハ專交換ノミ行ハレテ償贖ハ多ク其例ヲ見ス近世ニ至テハ全ク廢滅ニ歸セントスルモノノ如シ

三 交換

兩交戰國ハ其合意(俘虜交換條約)ニ依リ互ニ其俘虜ヲ解放スルコトアリ之ヲ俘虜交換ト云フ但一方ハ他方ノ交換ノ申出ヲ拒絕スルコトヲ妨ゲス
交換ノ際ニ當テハ階級、資格、健康等同等ノモノヲ參照シテ之ヲ計算スヘキモノナリ尤劣者數人ヲシテ優者一人ニ匹敵セシムルコトアリ此交換同等ノ原則ニ關シテ紛議ヲ生セルコトアリ千七百七十七年ニ於ル英米兩國間ノ紛議(米ハ英ヨリ送還セル俘虜ヲ衰弱セリト抗議セリ)千八百十年ニ於ル英佛間ノ紛議(如キ是ナリ(「ホール」三四頁參照)牧師、醫員ハ同等者アルコトヲ要セス
(附言) 以上ハ主トシテ陸戰ニ於ル俘虜ニ關シテ論セリ海戰ニモ大體ニ於テ其規定ヲ準用シテ可

ナリ(日露開戰ノ當初海軍ノ俘虜ニ於ル海軍省ノ規則參照)

第十九章 通信者、間諜、輕氣球員

交戰者ハ敵軍ノ地理強弱及計畫等ニ關シテ重要ナル情報ヲ探知收集スル必要アリ故ニ之カ手段ヲ講ス

ルハ自然ノ勢ニシテ戰爭法ハ斯ル手段ヲ認ムルノ已ムヲ得サルモノアリ情報收集ノ方法ニ公然ナルアリ
 秘密ナルアリ後者ヲ間諜ト謂フ間諜ヲ使用スルハ不法ト云フヘカラス

(甲) 間諜ノ意義

間諜トハ海牙條約第二九條「ブリキセル」宣言第一九條亦同シニ依レハ
 一方ノ交戦者ニ通知スルノ意思ヲ以テ他ノ一方ノ作戦地帯内ニ於テ、秘密ニ行動シ又ハ虚妄ノ口實ヲ
 構ヘテ各種ノ情報ヲ收集シ若クハ、收集セントスル者

ヲ謂フ故ニ間諜ノ要件トシテ左ノ數者アリ
 (イ) 情報、收集シ又ハ、收集セント試ムル者タルヲ要ス 情報、ハ、收集、探知、ヲ目的トセスシテ單ニ信書

ノ傳達ハ軍ノ聯絡ヲ通センカ爲メ敵ノ戦線内ニ進入スル者ハ間諜ニ非ス故ニ間諜ノ刑ニ處セラ
 ルコトナシ

(ロ) 一方ノ交戦者ニ通報センカ爲メ他ノ一方ノ作戦地帯内ニ於テ行動スルヲ要ス 自國臣民ナルト
 敵國臣民ナルト又軍人ナルト非軍人ナルトヲ問ハサルナリ自國臣民カ敵軍ヨリ買収セラレテ敵内
 應スル者モ亦間諜ナリ敵國臣民カ自國軍隊ニ入り來テ間諜行爲ヲ行ハ通常ノコトナリ又茲ニ所謂
 間諜トハ敵ノ作戦地帯内ニ進入シテ行動スル者即各種ノ情報ヲ收集スル者ニ限ルコトヲ注意スルヲ
 要ス而シテ敵ノ領土ナルト占領地ナルト問ハサルナリ而シテ作戦地帯ニ非サル領土ニ進入スルモ茲

ニ所謂間諜ト謂フヘカラス
 (ハ) 秘密ニ行動シ又ハ虚妄ノ口實ヲ構ヘテ情報ヲ收集スルヲ要ス 是間諜ノ間諜タル所以ノ最大要
 件ナリ他ノ類似ノモノト區別セラルル所以ナリ軍隊ヲ利セントシ敵軍ノ情報ヲ探知スル目的ヲ以テ

秘密ニ敵軍ノ戦線内ニ入り又ハ服裝ヲ變シ詐僞ノ名義口實ヲ設ケテ敵軍内ニ侵入スルハ敵軍ニ取リ
 危險甚シ敵軍ハ之ヲ豫防スルニ難シ又相手ノ軍ヲ利スル甚シ故ニ間諜ハ捕ハレハ嚴刑ニ處セラ
 ルヲ要ス左ノ數者ハ間諜ニ非ス

一 情報ヲ收集センカ爲メ敵ノ戦線内ニ進入スルモ假扮セサル(正服著明ノ)軍人ナルトキ 軍人正服
 ヲ著シテ敵ノ情報ヲ探知スルハ斥候ニシテ間諜ニ非ス

二 自國軍又ハ敵國軍ニ宛テタル信書ヲ公然傳達スル者 即此等ノ者ハ其軍人タルト否トヲ問ハス間
 諜ト看做テス信書傳達ハ情報ノ收集ト異ナル故ニ信書傳達者ハ間諜タルノ要件ヲ缺ク縱令敵ノ戦線
 内ニ進入スルモ間諜ニ非ス況キ公然此職務ヲ執行スルニ於テオヤ其間諜ニ非サルハ明ナリ(信書傳
 達者、走使「クローリーレ」「ボータン」)

三 輕氣球員 輕氣球ニテ派遣セラレタル者ニシテ其目的カ信書ヲ傳達シ又ハ軍ノ聯絡ヲ通スルニア
 ルトキハ間諜ニ非ス間諜タルノ要件ヲ缺ケハナリ

(乙) 間諜ニ對スル制裁
 間諜ニシテ捕ハレタルトキハ通常死刑ニ處ス銃殺ニ依ルコトアリ絞殺ニ依ルコトアリ近時ハ後者ヲ通
 常トス(リीडル)上述セル如ク「ローレンス」ハ或場合ニハ之ヲ殺サスシテ戰爭中ノ拘禁スヘキ
 ヲ唱フト雖是一般學者ノ說ニ非ス間諜ハ危險ナリ防クニ難ク目的ヲ達スルニ易シ故ニ豫防威嚇及警戒
 ノ手段トシテ擬スルニ死刑ヲ以ナスルハ亦已ムヲ得タル所ナリ

間諜ノ嫌疑アルモ直ニ之ヲ死刑ニ處スヘカラス必スヤ一旦裁判(軍法會議等)ニ付シタル上ニ非ナレハ之ヲ罰スルヲ得サルヲ近世ノ法トス(海牙條約三〇條)蓋戰爭法進步ノ一大特徵ナリ

遠因(目的)ノ如何ヲ問ハス(營利心ニ出ツルト愛國心ニ出ツルト)又自ラ進テ爲スト國家ノ委任獎勵ニ依ルトヲ論セス凡テ間諜ナリ

間諜ハ現行中捕ヘラレタルトキニ限リ之ヲ罰ス即著手及實行中(情報ヲ收集シ又ハ收集セントスル)ニアルコトヲ要ス既遂ノ間諜ハ何等ノ責ヲ負フコトナシ換言スレハ一旦所屬軍ニ復歸シタル後ニ至リ敵ノ爲ニ捕ヘラレタル間諜ハ俘虜トシテ取扱ハルヘク以前ノ間諜行爲ニ對シテハ何等ノ責ヲ負フコトナシ(海牙條約三一條)間諜ノ共犯及從犯モ間諜ト同様ノ刑罰ヲ受ク殊ニ間諜ヲ隱匿スル者ヲ然リトナス

書信又ハ口信ヲ傳達セン爲メ秘密ニ(軍人ナルトキハ制服ヲ著ケスシテ)敵ノ戰線内ニ進入スルモノ(上述ノ信書傳達者ハ公然ナルモノナリ此場合ハ格別トス)及敵國軍人又ハ政黨首領ニ背叛ヲ勸告センカ爲メ敵軍戰線内ニ入ル者ハ危險ナルモノトシテ之ヲ嚴刑(死刑)ニ處スルモ而モ間諜ニ非サルコトハ「ホール」ノ言フ所ノ如シ

(丙) 輕氣球員

輕氣球ニ乘シテ敵軍ノ戰線内ヲ通過セントスル者ハ千八百七十年及七十一年ノ普佛戰爭ニ於テ普佛間諜ト同一待遇ヲ與ヘント主張セル所ナリ實ニ輕氣球員ハ近時殊ニ普佛戰爭後世人ノ議論ニ上リ戰爭法ニテ注目セララルニ至リタリ十八世紀ノ終既ニ輕氣球ノ戰時使用アリシト雖偶二三ノ場合ニ之アリシニ止リシカ普佛戰爭ノ際輕氣球ハ屢使用セラレ今日ニ至テハ緊要ナル交戰手段トシテ學者實際

相抑制スルコトアルナリ例之右ニ掲ケタル例ニ於テ貨幣一度外國ニ流出スルモ幾ナラスシテ價金ノ收容ニ因リ巨額ノ貨幣輸入セラルルカ如キコトアラハ貨幣流出ノ影響ハ之カ爲ニ其勢力ヲ失フヘキナリ」貨幣ノ價格ハ之カ原料タル貴金屬ノ生産費ニ因テ定ムルモノナリト爲ス者アレトモ是隱見タルヲ免レス生産費カ直接ノ關係ヲ有スルハ貨幣ノ流通額ナリトス而シテ流通額ニ増減ヲ來ストキハ間接ニ多少貨幣ノ價格ヲ變動スル所以ナリト雖義ニ違ヘタル如ク金銀年ノ產出額ハ古來ノ存在額ニ比シ甚寡ナルモノニシテ總令產出額ノ一部ハ生産費小ナリトスルモ其產出無限ニ増加スルコト能ハス又一金額ニ於テ生産費増加スルモノ金ノ價格ヲ騰貴セシメテ其生産費ヲ償フニ至ラシムルコト能ハス又一金額ニ國ニ於テハ金一匁ノ生産費五圓ニ達スル迄ハ收支相償フト雖五圓以上ニ至ルトキハ損失ヲ來スヲ例之我金ノ生産ハ中止セラレ金ノ貨幣ト爲ルコト減少スヘシ反之生産費減少スルトキハ金ノ生産増加シテ其貨幣ト爲ルコト亦多カルヘキナリ如此金ノ生産費ハ金貨ノ流通額ニ多少増減ヲ來スヘキ力アリト雖貨幣ノ價格ニ對シテハ直接ニ影響スル所ナク金地金ノ生産費如何ニ増加スルモ其價格ハ貨幣法ニ定ムル價格單位ノ標準ヲ制限トシ又生産費減少スルモ價格單位ノ標準以下ニ下ルモノニ非ス何トナレハ自由製造ノ權ヲ以テ何時ニテモ之ヲ貨幣ニ製造スルコトヲ得レハナリ若若干ノ差異アリトスレハ造貨手數料(之ヲ徵收スル國ニ於テハ)運賃、保險料、製造中ニ損失スル利子等ニ過キサルナリ

終ニ貨幣價格ノ増減カ社會ニ及ス影響ニ付テ一言セント欲ス貨幣ノ重要ナル職務ハ價格ノ本位タルニ在ルヲ以テ價格ノ變動最少キヲ要スト雖多少ノ變動ハ到底免レサル所ナリトス而シテ貨幣價格ノ低落ハ先物價ノ騰貴ニ現レ爲ニ生産ヲ獎勵シ資本ノ増殖、實銀ノ上進ヲ來シテ消費ノ増大ヲ促スモノト又又債務ノ負擔ヲ輕減シ之カ返償ヲ容易ナラシムルヲ以テ取引自ラ活潑ト爲ルナリ然レトモ債權者及

確定セル貨幣收入ヲ有スル者ハ損失ヲ被リ勞働者ノ如キモ實銀ノ上進、物價ノ騰貴ニ伴ハサルトキハ即被害者ノ地位ニ立ツモノトス反之貨幣ノ價格上騰スルトキハ前述ニ反對ノ結果ヲ來スモノナリ若貨幣價格ノ變動ニシテ急激ナルトキハ貸借者ハ不當ノ利害ヲ受タルコト甚シク價格下落ノ場合ニハ投機ヲ獎勵シテ經濟界ノ基礎ヲ破壞シ價格上騰ノ場合ハ甚シク産業ヲ萎靡セシムルモノトス然レトモ貨幣流通額次第ニ増加シ若クハ信用制度發達シテ貨幣ノ需要額漸次ニ減少シ以テ貨幣ノ價格徐徐ニ低落スルハ事喜フヘキ現象ト謂フヘキナリ「ジグモンズ」曰ク「金價ノ下落ハ既ニ獲得セル富ヲ享有セル者ヲ損シ現在富ヲ作りツツアル者ヲ利シ隨テ社會ノ活潑ナル者ヲ熱練ナル者ヲシテ益勉勵セシム」ト

第五節 「グレンシャム」ノ法則

「グレンシャム」ノ法則トハ貨幣ノ流通ニ關スル一ノ重要ナル法則ニシテ惡貨幣ハ良貨幣ヲ排去シ良貨幣ハ却テ惡貨幣ヲ排去シ得サルヲ謂フナリ「グレンシャム」ハ「エリザベス」時代ノ英國人ニシテ右ニ述ヘタル貨幣流通ノ法則ヲ知り以テ當時ノ幣制改革ヲ成效セシメタルカ故ニ後世此法則ニ冠スルニ氏ノ名ヲ以テセルナリ

此法則ハ一見頗條理ニ反スルカ如シ然レトモ貨幣力他ノ財貨ト異ルノ點アルヲ知ラハ此法則ノ行ルハ毫モ怪ムニ足ラサルナリ即貨幣ハ食物、衣服等ノ如ク直接ニ欲望ヲ満足セシムルモノニ非ス主トシテ支拂ノ用ニ供スルモノナルカ故ニ外形相同キトモ世人ハ精密ニ其品位、重量ヲ檢査セシテ授受スルモノナリ然レトモ地金商、兩替商、金細工師等ニ至ラハ細ニ其差異ヲ探究シ重量、品位ノ同カラサル貨幣ニシテ同一ノ法定價格ヲ以テ通用スルモノアルトキハ品位重量ノ勝レルモノヲ選擇蒐集シテ或

ハ之ヲ鎔解シ或ハ之ヲ輸出スルカ故ニ良貨幣ハ遂ニ其跡ヲ收メ惡貨幣ノミ流通スルニ至ルナリ諸國貨幣制度ノ歴史ヲ見ルニ此法則ノ行レタル證據枚舉ニ遑アラヌ其一例ヲ舉クレハ第十七世紀ノ末ニ當リ英國ニ於テハ流通貨幣ノ磨損甚シク取引上不便少カラザリシヲ以テ政府ハ量目ノ十分ナル新貨幣ヲ發行シ租稅等ヲ納ムルニ當リ政府ハ同一ノ價格ヲ以テ新舊貨幣ヲ受領スルコト爲セリ是ヲ以テ新貨幣ハ發行セラルルヤ否ヤ忽其跡ヲ收メテ行ク所ヲ知ラヌ新舊貨幣ヲ剽竊スル者ハ死刑ヲ以テ之ヲ罰セリト雖之ヲ制止スルコト能ハス途ニ磨損セル舊貨幣ハ實際ノ量目ニ據テ其價格ヲ定ムルニ至リ始テ此弊風ヲ杜絶スルコトヲ得タリト云フ又我明治政府ハ開港場ニ洋銀ノ流通スルヲ見テ之ヲ驅逐セント欲シ明治八年洋銀ニ比シテ量目ノ少シク大ナル貿易銀ヲ製造シテ之ヲ發行セリ然ルニ此貿易銀ハ忽支那兩替商ノ爲ニ鎔解セラレ政府ハ遂ニ其目的ヲ達スルコトヲ得ナリシナリ

同時ニ異種ノ貨幣流通スル場合ニモ亦「グレンシャム」ノ法則ノ行ルヲ見ルナリ例之金銀兩本位制ノ國ニ於テ金銀ノ法定比價ハ金一、銀十五ナルニ市場比價ハ金一、銀十六ト爲ランカ銀塊ヲ有スル者ハ之ヲ造幣局ニ輸納シテ銀貨ト爲シ此銀貨ヲ以テ金貨ニ交換スヘシ何トナレハ市場ニ於テ地金トシテ賣拂フトキハ銀十六タツヲ以テ金一タツヲ得ル割合ナレトモ銀貨ニ製造シテ之ヲ金貨ニ交換スルトキハ銀十五タツヲ以テ金一タツヲ得ル割合ナレハナリ右ノ如ク金價上騰セル場合ニ金貨ノ所有者ハ法定ノ比價ヲ以テ之ヲ銀貨ニ交換スルモノナキ理ナルモ實際金銀比價ノ變動ヲ常ニ注意觀察スル者ハ兩替商地金商銀行業者等ニ過キヌ世人ハ差別ナク金銀貨ヲ授受スル者多キカ故ニ市場ノ比價少シク變動スルモ金銀貨幣ノ交換ハ法定比價ヲ以テ行ルナリ故ニ此機會ニ乘シ比價ノ變動ヲ知ル者ハ銀塊ヲ銀貨ニ製造シ而シテ金銀ハ或ハ鎔解セラレ或ハ輸出セララルナリ最明白ニ此事實ヲ示スモノハ佛國ノ貨幣史ナリトス即

千八百三年以來佛國ニ於テ金銀ノ法定比價ハ金一、銀十五ナリシニ千八百二十年ヨリ千八百五十年ニ至ルノ間市場ノ比價ハ金一、銀十六ニ近カリシヲ以テ金貨ハ其跡ヲ藏メテ流通セズ千八百五十年頃ニ於テハ流通貨幣ハ主トシテ銀貨ナリシト云フ然ルニ千八百五十年以後金價下落セラルヲ以テ全ク反對ノ現象ヲ生シ銀貨ハ外國ニ去リテ金塊續續輸入セラレ金貨大ニ流通スルニ至レリ左ノ統計表ハ以テ當時ノ狀況ヲ示スニ足ルナリ

千八百二十五年ヨリ	金貨製造額	二億六千八百萬法
千八百四十八年ニ至ル	銀貨製造額	二十三億八千法
千八百五十年ヨリ	金貨製造額	五十八億七百萬法
千八百六十七年ニ至ル	銀貨製造額	三億八千三百萬法

我國カ安政六年歐米諸國ト通商貿易ヲ開キタルニ當リ巨額ノ金貨力海外ニ流出セルモ亦「グレンシャム」ノ法則ノ行レタルニ外ナラス抑徳川政府ハ屢貨幣ノ改鑄ヲ行ヒ之ヲ行フ毎ニ多クハ金銀ノ法定比價ヲ變シ天保年度以後ニ於テハ金銀ノ比價ハ大凡金一、銀五ノ割合ト爲レリ然ルニ當時倫敦ニ於ル金銀ノ比價ハ金一、銀十五ナリシヲ以テ懸隔ノ大ナルヤ知ルヘキナリ而シテ諸國トノ條約ニ依リ開港後一年間ハ外國人ノ請求ニ應ジ外國ノ金銀貨幣ニ對シ同量ナル我金銀貨幣ヲ引換フルノ義務ヲ負ヘルヲ以テ外國人ハ續續銀貨ヲ輸入シテ之ヲ一分銀ニ引換ヘ此一分銀ヲ以テ我國ノ金貨即小判ヲ買入レ盛ニ之ヲ輸出シ其額小判一百萬枚餘ニ上レリト云フ而シテ同年十一月ニ至リ貨幣引換ノ義務廢セラレタルヲ以テ金貨ノ輸出モ停止スルヲ得タリ

又紙幣、貨幣並ニ行ルルニ當リ紙幣發行額其當ヲ失スルトキハ貨幣ハ流通セサルニ至ルモノトス是亦

0443

「グレンシャム」ノ法則ノ行ルルカ爲ナリ
以上述ヘタル如ク惡貨幣ハ良貨幣ヲ排去スルヲ以テ通則ト爲スト雖惡貨ノ流通額ニ制限アルトキハ「グレンシャム」ノ法則ハ行レサルナリ何トナレハ其流通額ノミヲ以テ貨幣ノ需要額ヲ充スコト能ハサレハナリ例之補助貨幣ハ本位貨幣ニ對シテ惡貨幣ナリトス然レトモ之カ自由製造ヲ許サスシテ其流通額ニ制限アルヲ以テ本位貨幣ヲ驅逐スルコト能ハサルナリ又現今佛國ニ流通スル五法ノ銀貨ハ其實價法定價格ノ半ニ達セサルモ其流通額増加セタルカ故ニ金貨ヲ排去スルコトナキナリ紙幣ノ場合ニ於テモ亦然リ其發行額宜キヲ得ルトキハ貨幣ト共ニ流通スルモノトス

第六節 單本位制、兩本位制ノ沿革及其得失

現今歐米ノ諸國ハ實際金本位制ヲ採ルモノ多シト雖是實ニ三十年來ノ事ニ屬シ獨他國ニ先シテ早く金單本位制ヲ用ヒタルハ英國ナリトス即英國ハ千八百十六年ヲ以テ純然タル金本位制ヲ定メ爾來毫モ變更セルコトナシ兩本位制ヲ第一ニ採用セルハ北米合衆國ニシテ同國カ金一、銀十五ノ法定比價ヲ有スル金銀貨幣ヲ兩ナカラ無制限ノ法貨ト爲シ且其自由製造ヲ許セルハ實ニ千七百九十二年ナリトス後千八百七十三年本位銀貨ノ製造ヲ停止シ兩本位制ヲ廢シタルシカ千八百七十八年以來頻ニ銀貨ヲ製造シテ無制限ノ法貨ト爲セルヲ以テ事實上跛行兩本位タリキ而シテ千九百年ニ至リ金本位制設定ノ法律ヲ公布シタルトモ從來發行ノ銀貨仍流通スルヲ以テ純然タル金單本位制ト稱スルコトヲ得サルナリ兩本位制採用ノ時期ハ合衆國ノ後ニ在リト雖長ク此制度ヲ維持シテ其規定ヲ變更セザリシモノハ佛國ナリトス即千八百三年金一、銀十五ノ割合ヲ以テ銀貨並ニ金貨ヲ發行シ且之カ自由製造ヲ許セリ而

シテ千八百五十年代ニ及ヒ金價下落シ佛國並ニ佛國ノ貨幣制度ヲ模倣セル伊太利、瑞西、白耳義ニ於テ銀貨流出ノ現象ヲ呈セルヲ以テ此四箇國ハ共同ノ必要ヲ感シ千八百六十五年條約ヲ締結シ所謂維典同盟ナルモノヲ組織セリ然ルニ千八百七十年代ニ至リ銀價下落ノ傾向現アルト共ニ此同盟諸國ニ於ル銀貨ノ製造額ハ俄ニ増加シ以テ金貨ノ流出ヲ來セルヲ以テ千八百七十四年各同盟國ニ於ル本位銀貨ノ製造額ヲ制限シ千八百七十八年ニ至リ全ク之カ製造ヲ廢止セリ爾後同盟國間ニ多少ノ紛議ヲ生シタルコトアリシト雖此同盟ハ今日モ仍存在スルモノトス

獨逸ハ千八百七十三年ヲ以テ金本位制ヲ採用シ從來發行セル「ターレル」銀貨ノ無制限通用ヲ許セシモ近年其額著ク減少セリ奧地利、匈牙利ハ千八百九十二年金本位ノ貨幣法ヲ公布シテ金貨ノ製造發行ニ著手シ其事業ノ完結將ニ近キニ在ラントス露西亞ハ千八百八十五年以來法律上兩本位制ナリシカ漸次金本位ニ移ルノ準備ヲ爲シ遂ニ千八百九十九年ニ至リ金本位ノ貨幣法ヲ施行セリ其他歐洲ノ重要ナル諸國ハ實際金本位制ヲ採ルモノトス

蘇ヲ維新以後ニ於ル我國貨幣制度ノ沿革ヲ見ルニ明治四年ノ新貨條例ニ於テハ金貨ヲ以テ本位貨幣トシ如何ナル支拂ニモ制限セラザルコトナク銀貨ハ總テ之ヲ補助貨幣トシ一口ノ拂方ハ十圓ヲ以テ制限トシ開港場ニ海關稅ノ上納及外國貿易ノ取引ニ供スル爲ニ一圓ノ銀貨ヲ製シタルモ内地ニハ之カ流通ヲ許サザリキ然ルニ明治十一年ニ至リ一圓銀貨モ亦内地ニ於ル租稅其他公私ノ取引上總テ金額ニ制限ナク之ヲ通用スルモノトセリ是即銀貨ヲモ本位貨幣ト爲シタルモノニシテ我國ノ貨幣制度ハ於是兩本位制ト爲レリ然レトモ兩本位制ハ全ク空稱ニ止リ金銀貨幣ハ毫モ通用ナク當時專流通セシハ紙幣ナリキ而シテ明治十七年兌換銀行券條例ヲ發布スルヤ銀行券ハ銀貨ヲ以テ引換フルモノトシ次テ政府發行

0444

ノ紙幣ハ明治十九年一月ヨリ銀貨ニ引換フルコトト爲シタルカ故ニ我國ノ銀貨制度ハ事實上全ク銀本位制ト爲リ而シテ此制度ハ十餘年間繼續シタリシカ明治三十年十月一日ヨリ金本位ノ貨幣法ヲ實施シ一圓銀貨ノ通用ハ翌明治三十一年三月ニ限り之ヲ禁止セルヲ以テ爾來純然タル金本位制ト爲レリ以上述ヘタル如ク世界ノ重要ナル邦國ハ多クハ金本位制ヲ採リ兩本位制ヲ維持スルモノハ全ク其跡ヲ絶テリ然レトモ是兩本位制カ理論上惡制度タルカ故ニ非ス唯「グレシム」ノ法則ニ抵抗シテ能ク此幣制ヲ固守スルコトハ一國ノ爲シ能ハサル所ナレハナリ若夫世界ノ富強ナル邦國聯合一致シテ此制度ヲ採ルアラハ其實行必シモ難キニ非ス是即萬國兩本位制ヲ主張スル學者、論客ノ少カラサル所以ナリ其論點ノ重要ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

一 兩本位制ハ貨幣價格ノ變動ヲ少カラシム

二 兩本位制ハ金銀比價ノ變動ヲ抑制シテ金銀貨國間ニ於ルニ貿易ノ進行及資本ノ移動ヲ圓滑容易ナラシム

三 兩本位制ハ貨幣ノ流通額ヲ多カラシム

右ニ列舉セル利益ノ第一及第二ハ所謂補正作用ニ基因スルモノニシテ此理論ヲ最明白ニ說明セル佛國ノ經濟學者「ウロスキ」ノ言ニ曰ク「金一磅カ銀一磅ニ對スル價格ノ常ニ變動スルノミナラス金一磅ト銀一磅トヲ合セテ他ノ財貨ニ對スル價格モ亦時時變動スルモノナリ抑購買力ノ變動ハ交易ノ性質上避テヘカラサルモノナルヲ以テ絕對的ニ價格ノ一定ヲ求ムルハ到底吾人ノ能クサル所ニ非サルナリ然レトモ金銀併用シテ貨幣ト爲ストキハ所謂補正作用ナルモノ自ラ其間ニ生シ之カ爲ニ金銀比價ノ變動ヲ減スルノミナラス金銀ヲ合シテ其他ノ財貨ニ對スル價格モ亦變動少キニ至ルヘシ之ヲ喻フレハ

猶膨脹力ノ不同ナル二種ノ金屬ヲ以テ作リタル時計ノ振子カ寒暑ノ爲ニ伸縮スルコト少キカ如シト又「シグナス」ハ他ノ比喩ヲ設ケテ曰ク「茲ニ兩槽ノ水アリ各殊別ニ需要供給ノ變動ヲ蒙リテ彼此相通セザレハ各槽ノ水平線ハ其高低ヲ同ウセザルヘシ然ルニ其間ニ一管ヲ施シテ互ニ相通セシムレハ兩槽ノ水準彼此平均シテ同一ト爲ルヘシ是兩槽ノ全面積ヲ以テ需要供給ノ變動ニ應スルコトヲ得レハナリ近年歐洲ニ流通スル金銀ハ此兩槽ノ水ニ似タリ而シテ千八百三年ノ佛國ノ法律ハ其導管ニシテ金銀共ニ無制限ノ法貨トシテ各相救済スルコトヲ得セシメタリ」ト蓋第十九世紀ノ前半ニ於テ金銀ノ產出額及其使用方法ニ變動ヲ生シタルニ拘ラス金銀ノ市場比價ヲシテ常ニ金一銀十五半ノ割合ニ接近セシメタルハ佛國兩本位制ノ功ニシテ是實ニ多數ノ學者ノ等ク認ムル所タリ或ハ曰ク金銀ノ產出額同一ノ比例ヲ増減セハ金銀ノ比價變動セザルモ他ノ財產ニ對スル金銀ノ價格ハ即變動スヘシト然レトモ實際金銀ノ產出額ハ同一ノ比例ヲ以テ増減スルモノニ非ス例之金ノ產出額俄ニ増加スルニ當リ金單本位制ナランニハ貨幣ノ流通額モ亦増加シ貨幣ノ價格之ニ應シテ低落スヘシト雖兩本位制ナランニハ補正作用ニ依リ銀貨モ亦其影響ヲ分擔スルカ故ニ貨幣價格ノ低落之ニ應シテ減スヘキナリ要之兩本位制ニ於テハ貨幣價格變動スル回数ハ單本位制ニ於ルヨリモ多シト雖變動ノ程度ハ微弱ナリトス

次ニ第二ノ利益ニ就テ一言セシ金貨國ト銀貨國ト通商貿易ヲ行フニ當リ金銀比價ノ變動ハ種種ノ影響ヲ二國ノ關係ニ及スモノニシテ例之銀價下落スルトキハ銀貨國ニ於テハ金貨國ニ對スル輸出増加ノ傾向ヲ生シ金貨國ニ於テハ銀貨國ニ對スル輸出障害セラルモノトス何トナレハ兩國共ニ財貨ノ生産費ハ自國ノ貨幣ヲ以テ計算シ而シテ財貨ノ代價ハ對手國ノ貨幣ヲ以テ之ヲ領收スレハナリ故ニ金銀比價ノ變動激シキトキハ二國間ノ貿易ハ大ニ投機ノ性質ヲ帶ヒ而シテ比價騰貴セル金屬ヲ以テ本位貨幣ト

爲ス國ニ於テハ輸出妨害ヲ蒙ルモノトス又銀價下落スルトキハ金貨拂ノ外國債ヲ負擔スル銀貨國ハ大ニ元利ノ支拂ニ苦ミ且金貨國ノ資本家ハ銀貨國ニ資本ヲ放下セザルニ至ルナリ然ルニ兩本位制行レテ金銀ノ比價ニ激變ナキトキハ二國間ノ貿易ハ自然ノ趨勢ヲ以テ進行シ資本ノ移動モ亦圓滑ニ行ルモノトス

兩本位制ヨリ生スル第三ノ利益ハ貨幣ノ流通額ヲ多カラシムルニ在リトス抑貨幣價格ノ高低ハ種種ナル影響ヲ社會ニ及スモノニシテ其漸次ニ低落スルハ事喜フヘキ現象ナルコト第四節ニ述ヘタルカ如シ而シテ貨幣ノ價格ニシテ漸次ニ低落セントセハ其流通額増加セザルヘカラスト雖諸國主トシテ金ノミヲ貨幣ニ用ゾルトキハ需要ハ供給ニ超過スルニ至ルヘシ然ルニ兩本位制ニ依リ金銀併セ用フルトキハ貨幣ノ原料缺乏スルノ憂ナキナリ

或ハ銀貨ハ攜帶ニ不便ナリト爲シ或ハ單本位制ヲ簡單ナリト賞揚シ或ハ兩本位制ハ實際交代本位制ナリト嘲リ或ハ千八百七十四年後歐洲ニ於テ物價ノ下落ハ金ノ供給不足ノ爲ニ非スト論スル者アリト雖兩本位制論者ノ主張スル所ハ大體ニ於テ正當ト認メタルヲ得ス而シテ世界ノ富強ナル數國一致シテ兩本位制ヲ採ルコトヲ得ハ「グレシヤ」ノ法則ハ恐ラシムルニ足ラサルナリ然レトモ各國ハ利害ヲ異ニシテ容易ニ一致スルコト能ハス而シテ金ノ產出額ハ近年大ニ増加シテ今後二三十年間ハ著キ減少ヲ來スコトナカルヘキヲ以テ頗ル銀貨ノ原料ニ窮スルカ如キコトナク且世界ノ重要ナル諸國次第ニ金本位ニ移レルヲ以テ金銀比價ノ變動カ國際貿易等ニ影響ヲ及ス範圍ハ狹隘ト爲レリ隨テ萬國兩本位制ノ實行ハ到底之ヲ近キ將來二期スルコトヲ得サルカ故ニ經濟進步ノ程度既ニ高ク外國トノ關係頻繁ナル邦國ニ於テハ實際金本位制ヲ採ラサルヲ得サルナリ

第四章 紙幣及銀行券

第一節 不換紙幣

不換紙幣ハ發行者之ヲ貨幣ニ引換フルノ義務ナク國家ノ付與セル強通力ニ因リ全ク貨幣ノ如ク交易ノ媒介ト爲リ又價格ノ標準、價格ノ本位ト爲ルモノトス其成立スル所以ヲ觀ルニ或ハ初ヨリ不換紙幣トシテ發行スルモノアリ或ハ從來兌換ヲ行ヘル紙幣又ハ銀行券ヲ變シテ不換紙幣ト爲スコトアリトス抑不換紙幣ノ發行タル無利息ノ公債ヲ強制的ニ募集スルニ異ラス財政窮乏ヲ告ケ他ニ依ルヘキノ財源ナキニ當リテ始テ行フヘキ非常手段ナリトス而シテ之ヲ諸國ノ歴史ニ徵スルニ不換紙幣ノ害毒ハ到處ニ之ヲ見サルナク我國ノ如キモ亦其一例ナリトス其弊害ノ原因及結果ヲ左ニ説明セン

第一 不換紙幣ハ濫發ニ陥リ易シ 紙幣ノ製造ハ金銀貨幣ノ如ク自然の制限ヲ受クルモノニ非ス其發行額ハ隨意ニ之ヲ定ムルコトヲ得ルナリ是ヲ以テ縱令政府ハ注意シテ濫發ヲ慎ムト雖財政窮乏ヲ告ケルトキハ達ニ此姑息手段ヲ採ルニ至ルモノトス而シテ一タヒ濫發ノ端緒ヲ開クトキハ物價、賃銀等ノ騰貴ヲ來シ紙幣ノ購買力減少スルカ故ニ政府ハ益財政ノ困難ヲ生シ更ニ濫發ヲ爲スニ至ル

第二 不換紙幣ハ伸縮力ヲ有セス 貨幣モ其流通額多キニ過タルトキハ早晚物價ヲ騰貴セシムルニ至ル然レトモ物價ノ騰貴ハ輸入ノ増加、輸出ノ減少ヲ來スヲ以テ貨幣國外ニ流出シテ其流通額ヲ減少スルモノトス然ルニ紙幣ハ國家ノ付與セル強通力ニ依テ國內ニミテ通用スルモノナルカ故ニ此濫發ニ依リ物價ノ騰貴ヲ來スト雖國外ニ流出シテ以テ其流通額ヲ減スル能ハス是即伸縮力ナシト謂フ所以ナリ内亂等ノ場合ニ不換紙幣ヲ發行スルトキハ世人ハ非常ニ備フルカ爲ニ金銀貨幣ヲ貯藏隱蔽スル者多ク

隨テ紙幣ノミ流通スルニ至ル又世人政府ヲ信用スルコト厚ク發行額亦甚シク其當ヲ失ハナレハ紙幣ノ價格ハ俄ニ下落スルモノニ非スト雖輸入超過等ノ原因ヨリシテ貨幣ノ需要増加スルトキハ貨幣ハ紙幣ニ對シテ打歩ヲ生スルニ至ル如此金紙ノ間ニ價格ノ差異ヲ生スルトキハ金屬貨幣ハ實際貨幣ニ非ス買賣、貸借等紙幣ヲ以テ價格ノ標準ト爲シ所謂紙幣本位ナルモノ現出スルモノトス

第三 不換紙幣ハ經濟界ノ常調ヲ擾亂スルノ恐アリ 佛蘭西革命政府ノ發行セル不換紙幣ノ如キ極端ナル場合ハ措テ問ハスト雖不換紙幣ノ發行ハ經濟界ノ常調ヲ擾亂セル實例多シトス紙幣本位ノ國ニ於テハ其流通額ヲシテ能ク社會自然ノ需要ニ適合セシムルコト難ク而シテ紙幣ノ増發ハ物價ノ騰貴ヲ來スコト速ナルカ故ニ產業隆盛ノ狀況ヲ呈スト雖是異ノ隆盛ニ非ス且物價ノ急速ナル上騰ハ大ニ投機ノ念慮ヲ鼓舞スルモノトス而シテ兌換制度ノ回復ヲ圖リ紙幣ノ流通額減少スルトキハ全ク反對ノ現象ヲ生シ物價ハ下落シ負債者ハ其負擔ヲ増加シ產業ノ萎靡スルコトヲ免レサルナリ又紙幣ト金銀トノ價格常ニ變動スルトキハ爲替相場ハ異常ノ亂高下ヲ來シ以テ外國貿易ニ障害ヲ與フルハ金銀比價ノ變動ノ場合ヨリ甚シトス

不換紙幣ノ弊害ヲ顧シ易キハ以上述ヘタルカ如シト雖他ニ依ルヘキノ財源ナキニ當リテハ之カ發行モ亦已ムヲ得ス殊ニ外戰ニ敗北スルカ如キ場合ニハ不換紙幣ノ發行到底避クヘカサルナリ不換紙幣ノ發行全ク避クヘカサルニ於テハ如何ニシテ其弊害ヲ豫防スヘキカヲ講究スルコト必要ニシテ其模範ヲ示スモノハ佛蘭西銀行ナリトス即獨佛戰爭後數年間同行ノ採用セル方法ハ不換紙幣即其發行スル銀行券ノ價格カ金貨ニ對シテ些少ト雖低落ヲ示ストキハ其流通額ヲ減スルニ在リキ此方法ハ能ク其效ヲ奏シ金紙ノ價格殆ど差異ヲ生セザリシト云フ如此流通額ヲ伸縮シテ以テ紙幣ノ價格ヲ維持スル方法ハ一

大中央銀行ニシテ始テ之ヲ行ヒ得ヘキモノナルカ故ニ平日ニ於テ銀行券ノ發行ヲ一大中央銀行ニノミ許可シ必要ノ場合ニ逢著セハ其兌換ヲ停止シテ以テ不換紙幣ト爲スヘキナリ

第二節 兌換紙幣

兌換紙幣ハ政府カ何時ニテモ所持人ノ請求ニ應ジテ貨幣ニ引換フルモノナルカ故ニ其價格ハ毫モ下落スルコトナク常ニ貨幣ト同一ナリトス計算及運搬ニ關シテハ却テ貨幣ニ勝リ引換準備額紙幣ノ發行額ヨリ小ナルトキハ則貨幣ヲ節約スル所以ナリ若紙幣發行額ト同額ノ引換準備ヲ要スルニ於テハ此利益ナシト雖亦以テ貨幣ノ磨損ヲ少カラシムルモノトス

如此紙幣ニシテ兌換ノ實ヲ失ハサルニ於テハ種種ノ利益ヲ與フルモノナルカ故ニ之カ發行ハ決シテ不可ナルコトナシト雖諸國政府ノ之ヲ行フモノ少キ所以ハ銀行券ナルモノアリ其流通額ノ伸縮政府紙幣ニ比シテ一層自在ナレハナリ即銀行券ハ銀行カ貸付、割引ヲ爲スニ當リテ發行スルモノニシテ概シテ社會ニ資本ヲ供給スルモノタルニ反シ紙幣ハ政府カ諸種ノ支拂ヲ爲スカ爲ニ發行スルモノナルカ故ニ生産事業ニ之ヲ用ヒタル者ノ手ニ歸スルコト少カラス隨テ兌換紙幣ノ發行ハ物價ニ影響スルコト速ナレトモ銀行券ノ直接ニ影響スルモノハ第一ニ利率ナリトス回收ノ點ニ於テモ二者其趣ヲ異ニシ紙幣ハ其所持人特ニ引換ヲ請求シ若クハ租稅ノ上納等ニ之ヲ用フル場合ニ於テノミ政府ニ歸リ來ルモ銀行券ハ右ニ述ヘタル如ク主トシテ貸付、割引ヲ爲スカ爲ニ發行セラレタルモノナルカ故ニ貸付金ノ返済手形ノ満期ニ依リ自ラ銀行ニ回收セララルモノトス是ヲ以テ紙幣ハ其流通額ヲシテ社會ノ需用ニ適用セシムルコト難シト雖銀行券ハ經濟界ノ狀況ニ依テ自ラ流通額ノ多少ヲ來スモノトス

第三節 銀行券

貨幣ハ物價ノ變動ニ從ヒ或ハ國外ニ流出シ或ハ他國ヨリ流入シ以テ其價格ノ平均ヲ維持スルノ傾向アルモノナレトモ其運動寧緩慢ニシテ變移ノ急激ナル經濟界ノ狀況ニ應ジ其流通額ヲ伸縮スルハ到底銀行券ノ如ク容易ナラサルナリ故ニ貨幣以外ニ銀行券ヲ發行スルハ貨幣ノ價格ヲシテ變動少カラシムル所以ナリ「ワグネル」曰ク「銀行券ノ發行ハ現今ノ信用經濟ノ組織ニ於テ必要缺クヘカラサルモノナリ」ト

銀行券ハ所持人ノ要求次第何時ニテモ之ヲ發行セル銀行ニ於テ貨幣ニ引換フルモノニシテ其實質ハ一覽拂ノ約束手形ニ外ナラサルカ故ニ何人モ之ヲ發行スルノ權ヲ有シ唯普通ノ法律上ノ制裁ニ依テ此權利ノ濫用ヲ防カハ不可ナキカ如シト雖實際ニ流通力ヲ有スル銀行券ハ貨幣ト同ク公共的ノ性質ヲ有スルカ故ニ銀行券ノ自由發行ハ危險ナリトス一派ノ論者曰ク「不必要ナル銀行券ヲ増發スレハ直ニ引換ヲ請求セラルルカ故ニ相當ノ正貨準備ナクシテ濫ニ之ヲ發行スルコトナシ故ニ特別ノ法規ヲ設ケテ之ヲ制限スルノ必要ヲ見ス」ト然レトモ銀行タルモノ十分ナル注意ヲ以テ業務ヲ行フモノノミ非ス貸付、割引ノ請求盛ナルニ當リ隨意ニ銀行券ヲ發行スルコトヲ得ハ眼前ノ利益ニ眩惑シテ多額ノ發行ヲ爲スヲ恐レシテ而シテ一朝引換ヲ請フ者相踵テ至ランニハ銀行ハ忽兌換ノ停止ヲ爲ササルヲ得ス是實ニ諸國ノ實例ノ證スル所以ナリ

現今歐洲諸國ノ多數ハ銀行券ヲ一大中央銀行ニ委任スルノ制度ヲ採リ我國ニ於テモ銀行券發行ノ權ハ日本銀行ノ獨占スル所ニシテ唯臺灣銀行カ新版圖ニ流通スル銀行券發行ノ特權ヲ有スルノミ銀行券ノ

發行ヲ一大中央銀行ニ集中スル理由ヲ左ニ列舉セシム

第一 一大銀行ヲシテ銀行券發行ノ權利ヲ獨占セシムルトキハ綜合私立會社ニシテ私人ノカ業務ヲ擔當スルモ社會ノ公益ヲ重スル念慮ハ常ニ之ニ伴フモノトス反之數多ノ小銀行ヲシテ銀行券ヲ發行セシムルニ於テハ公益ヲ圖ルノ念慮甚薄弱ナルヲ免レサルナリ且經濟界ノ狀況ニ鑑ミ貸付ノ割引ノ利率ヲ上下シテ以テ銀行券ノ流通額ヲ伸縮スルハ一大中央銀行ニシテ始テ之ヲ行ヒ得ルモノトス

第二 恐慌豐稔來セルニ際シ小銀行ハ皆其影響ヲ被ルカ故ニ割引ノ貸付ヲ縮少シ資金ノ回收ヲ圖リ以テ債務ノ辨償ニ備フルハ自衛上已ムヲ得サルナリ然ルニ中央銀行ハ其信用依然トシテ強大ナルカ故ニ或預金ヲ引出シ或ハ銀行券ノ引換ヲ請求スルカ如キモノ甚少シトス且其發行スル銀行券ハ流通毫モ滯セサルカ故ニ貸付ノ割引ノ請求ニ應ジテ續續之ヲ發行シ以テ恐慌ヲ鎮靜スルコトヲ得ルモノナリ

第三 不換紙幣ノ發行ハ國家危急ノ際之ヲ避クルコト難ク而シテ其弊害ヲ少カラシメント欲セハ其流通額ヲシテ常ニ社會ノ需要ニ超過セシメサルヲ要スルコト曠ニ述ヘタルカ如シ故ニ平日ニ於テ銀行券ノ發行ヲ一大中央銀行ニ集中シ不換紙幣ノ發行已ムヲ得サルニ至ラハ銀行券ノ兌換ヲ停止シ之ヲ以テ直ニ不換紙幣ト爲スヘキナリ

正貨ヲ準備セシテ銀行券ヲ發行スルハ無利息ノ資金ヲ借入ルルニ異ラス此利益ハ一私立會社ノ株主ノミ之ヲ享有スヘキモノニ非サルカ故ニ中央銀行ハ國有ト爲シ銀行券ノ發行ヨリ生スル利益ハ國家之ヲ收ムヘキナリト爲ス者アリ然レトモ純然タル國有銀行ハ政府財政トノ關係密接ニ過キ銀行獨立ノ行動ヲ制肘スルコト多ク且私立ナリト雖相當ノ監督ヲ施ストキハ銀行ノ當局者カ社會ノ公益ヲ顧ミサルコトナキナリ是ヲ以テ今日諸國ノ中央銀行ハ私立ナルモノ多ク而シテ寬嚴ノ差アリト雖殆皆特別ノ監

督ヲ施行シ銀行ノ利益ハ其一部ヲ政府ニ上納セシムルノ方法ヲ採ルナリ例之我日本銀行ハ保證ニ據リ發行スル銀行券ノ每一箇月ノ半年發行高ニ對シテ其發行稅トシテ一箇年千分ノ十二半ノ割合ヲ以テ政府ヘ納稅スルモノトス

銀行券ニシテ其流通毫モ滯滞セザラント欲セハ其價格常ニ其代表スル貨幣ノ價格ト同一ナラサルヘカラス而シテ銀行券カ貨幣ト同一ノ價格ヲ有スル所以ハ何時ニテモ之ヲ引換フルヲ得ルコト之カ主因タルヲ以テ引換準備ノ制度ハ甚重要ナルモノトス引換準備ニ關スル諸國ノ制度ハ區區ニシテ一ナラサルカ故ニ悉之ヲ列舉スルヲ得本邦ノ制度ヲ述ヘテ二三ノ外國制度ト比較對照セシム

兌換銀行券條例第二條ニ曰ク「日本銀行ハ兌換銀行券發行高ニ對シ同額ノ金銀貨及地金銀ヲ置キ其引換準備ニ充ツヘシ但銀貨及地金ハ引換準備總額ノ四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス」日本銀行ハ前項ノ外特ニ一億二千萬圓ヲ限リ政府發行ノ公債證書大藏省證券其他確實ナル證券又ハ商業手形ヲ保證トシ兌換銀行券ヲ發行スルコトヲ得「日本銀行ハ市場ノ景況ニ依リ流通貨幣ノ増加ヲ必要ト認ムルトキハ大藏大臣ノ許可ヲ得テ前二項發行高ノ外更ニ政府發行ノ公債證書大藏省證券其他確實ナル證券若クハ商業手形ヲ保證トシ兌換銀行券ヲ發行スルコトヲ得此場合ニ於テハ其發行額ニ對シ一箇年百分ノ五ヲ下サル割合ヲ以テ發行稅ヲ納ムヘシ但其割合ハ其時大藏大臣之ヲ定ム」ト第一項ノ準備ヲ普通ニ正貨準備ト稱シ第二項ノ準備ヲ保證準備ト名ク第三項ニ據テ發行スルモノヲ制限外發行ト謂フ要之日本銀行ノ引換準備制度ハ正貨準備ヲ原則トシ特ニ一定ノ制限額ヲ定メテ保證準備ヲ許シ更ニ必要ナル場合ニハ制限發行ヲ許可スルモノトス故ニ大要獨逸ノ制度ニ同ク而シテ獨逸ノ制度ハ英國ノ制度ニ淵源スルヲ以テ少シク其沿革ヲ述ヘン

千八百四十四年ノ法律ニ依リ英國銀行カ政府貸上金、政府發行ノ證券ヲ引換準備ト爲シ以テ發行シ得ル銀行券ノ最高額ハ一千四百萬磅(現今ハ千八百四十五萬磅)ニ限リ其以上ニ銀行券ヲ發行スルトキハ必同額ノ正貨ヲ準備スルヲ要スト爲セリ然レニ爾後恐慌ノ起ルニ際シ之ヲ鎮靜スルカ爲ニ制限外ノ銀行券ヲ發行シ以テ銀行條例ヲ破ルコト三四ニ及ヘリ獨逸ハ之ニ鑑ミ千八百七十五年帝國銀行ヲ設立スルヤ同行カ正貨準備ヲ有セシテ發行シ得ル最高額ヲ二億五千萬馬克(現今ハ四億五千萬馬克)ニ限リ此額ヲ超エタル發行額ニ對シテハ同額ノ正貨ヲ備フルコトヲ要シ而シテ必要ナル場合ニ臨ミ正貨準備ト爲セリ是所謂屈伸制限法ナルモノニテ日本銀行ノ制限外發行ハ之ヲ模倣セルナリ

而シテ獨逸ノ制度ト本邦ノ制度トヲ比較スルニ第一、獨逸ハ保證準備ヲ短期ニシテ確實ナル割引手形ニ限リ我國ノ保證準備ハ公債證書、大藏省證券等ヲ含ムモノニシテ理論上獨逸ノ制度ヲ以テ勝レリト謂ハサルヘカラス何トナレハ公債等ハ資金ヲ固定スルノ惡アルニ反シテ割引手形ハ資金ノ回收甚速ナレハナリ然レトモ善良ナル手形ノ少キ我國ノ現狀ニ於テハ獨逸ノ制度ヲ採用スルヲ得サルナリ第二、獨逸ニ於テハ銀行券發行總額ニ對シ少クトモ其三分一ニ相當スル正貨ヲ保有セサルヘカラス是即所謂比例準備法ナルモノナリ發券銀行ノ數多キニ於テハ此方法モ亦銀行券ノ濫發ヲ防クノ效アルヘシト雖中央銀行ニ對シテ却テ其行動ヲ制肘スルノ惡アルヲ以テ我國ニ於テ此制度ヲ採用セザリシハ當ヲ得タルモノト謂フヘキナリ第三、制限外發行額ニ對スル課税ハ獨逸ニ於テハ年五分ト定ムルニ反シ我國ニ於テハ最低年五分ト爲シ其割合ハ時時大藏大臣ノ定ムル所ト爲スナリ此課税ノ目的ハ銀行券ノ濫發ヲ防クニ在ルヲ以テ時宜ニ應ジテ上下スルノ餘地アルヲ以テ可ナリト爲ササルヘカラス

其他白耳義國立銀行ニ於テハ銀行券ノ發行額並ニ即時辨償ノ債務ニ對シテ四割ノ正貨ヲ保有スルヲ要シ佛蘭西銀行ニ於テハ其定款ニ於テ銀行券ノ發行額ハ正貨並ニ割引手形ノ保有額ト相當ノ權衡ヲ保テ以テ引換ニ差支ナカラシムヘシト爲スニ過キサレトモ其常ニ有スル正貨準備額ハ他ノ中央銀行ニ遠ク及ハサル所ナリ又合衆國ノ國立銀行ニ於テハ合衆國ノ公債證書ヲ預入レ其額面價格ト同額ノ銀行券ヲ受領シテ之ヲ發行シ其發行額ハ銀行資本金額ニ超過スルコトヲ得サルモノトシ往時我國立銀行カ銀行紙幣ヲ發行セシ制度ハ米國ノ方法ヲ模倣セルモノニシテ明治九年ノ改正國立銀行條例ニ據レハ國立銀行ハ其資本ノ八割ニ相當スル公債證書ヲ大藏省ニ預入レ之ト同額ノ紙幣ヲ受領シ以テ之ヲ發行セルナリ

右ニ述ヘタル如ク諸國ノ制度其軌ヲ一ニセスシテ得失亦同カラスト雖米國制度ノ如ク公債ヲ主タル引換準備ト爲スハ善良ナル制度ト稱スルヲ得サルナリ何トナレハ引換請求續續相踵クキハ公債ヲ賣却シテ請求ニ應スルコト甚タ難ケレハナリ反之相當ノ正貨準備ヲ置キ其以外ハ辨償確實ナル短期ノ債權殊ニ割引手形ヲ以テ引換準備ニ供スルヲ普通ニ銀行の準備ト名ツラグナル之ヲ稱揚シテ日理論上並ニ實際上正當ナル準備法トシテ此方法ニ優ルモノナシ歐洲大陸諸國ノ中央銀行ハ其間ニ多少ノ差異アリト雖實際此制度ヲ採ルモノ多シトモ我國ニ於テモ手形ノ流通真正ノ發達ヲ爲スニ至ラハ日本銀行ノ保證準備ハ主トシテ割引手形ヲ用ヒサルヘカサルナリ

以上述フルカ如ク引換準備ノ制度成立スト雖更ニ之カ安全ヲ保障スルカ爲ニ銀行ノ業務ヲ制限スルモノ多シトモ例之株式ノ賣買ノ如キハ巨利ヲ博スルコトアルト共ニ又損失ヲ招ク處多キカ故ニ發券銀行ノ行フヘキ業務ニ非サルナリ又不動產ヲ抵當トシテ長期ノ貸付ヲ爲スハ一見甚タ確實ナルカ如シト雖

是亦發券銀行ノ本質ニ反スルモノナリ何トナレハ銀行券ハ發行ノ日ヨリ引換ノ請求ニ應セサルヲ得タルニ反シ貸付ハ期限ニ至テ始テ回收スルコトヲ得ルモノナレハナリ而シテ銀行カ其抵當不動産ヲ所有セサルヲ得タルカ如キ場合ニ遭遇セハ資金ノ固定ヲ來スヤ必セリ反之短期確實ナル手形ノ割引ヲ行フニ於テハ資金ノ運轉甚速ニシテ引換準備ノ伸縮亦容易ナリトス以是諸國ノ中央銀行ハ多クハ法律ヲ以テ業務ヲ制限セラレ我日本銀行條例モ亦第一一條ニ於テ日本銀行ノ行フヘキ業務ヲ規定シ第一二條ニ於テ特ニ行フヘカサル業務ヲ列舉セリ其他ノ規定ヲ述フレハ

第一 中央銀行ヲシテ常ニ營業ニ關スル公告ヲ爲サシムルコトヲ要ス蓋公衆ヲシテ中央銀行ノ動靜ヲ監視セシムルハ有效ナル一種ノ監督ニシテ且銀行券發行額、正貨準備額ノ増減等ハ金融市場ニ至大ノ影響ヲ與フルモノナルカ故ニ世人ヲシテ常ニ其狀況ヲ知ラシメサルヘカラス

第二 銀行券ヲ法貨ト爲スヤ否ヤヲ定メサルヘカラス發券銀行ノ數多キトキハ引換停止ヲ行フモノアルカ故ニ信用薄弱ナル銀行ノ發行セル銀行券ニモ強通カ付與スルハ甚危險ナリトス然レトモ鞏固確實ナル中央銀行ノ發行セルモノニ至テハ如此憂ナキカ故ニ初ヨリ法貨タル效力ヲ與ヘテ其流通ヲ圓滑ナラシムルニ如カサルナリ

第三 銀行券ノ券面金額ヲ定メサルヘカラス券面金額ノ小ナル銀行券ヲ難スル者ハ曰小額ノ銀行券ハ社會ノ下層ニ流通シ而シテ細民ハ銀行ノ信用如何ヲ鑑別スルコト能ハサルカ故ニ不換紙幣ノ如キ弊害ヲ醸スヘシト若夫發券銀行ノ數多シテ引換停止ヲ行フ者アルカ如キ場合ニハ論者ノ言實ニ理アリト雖中央銀行ノ發行セル銀行券ノ流通スルニ當テハ蓋杞憂ト謂フヘキナリ又硬貨ノ流通ヲ以テ貨幣制度ノ維持ニ必要ナリトシ爲ニ小額ノ銀行券ヲ禁止セシコトヲ主張スル者アリト雖一國ニ存在スル貨

幣ノ數量ニハ自ラ制限アルモノニシテ硬貨ノ民間ニ流通スルコト盛ナレハ中央銀行ノ正貨準備ハ必ス大ニ減少スルヲ以テ硬貨ノ流通盛ナルモ中央銀行ノ正貨準備額小ナルニ於テハ貨幣制度之カ爲ニ一層鞏固ナリト謂フコトヲ得ザルナリ故ニ銀行券ノ券面金額ハ必シモ大ナルヲ要セス宜シク其國情ニ照シテ之ヲ定ムヘキナリ

第五章 信用取引及信用機關

第一節 信用取引ノ意義及其種類

物品ヲ以テ物品ニ交換シ若クハ貨幣ヲ以テ物品ヲ買入ルルニ於テハ提供ト報酬トハ即時ニ行ハレテ取引ハ直ニ結了ヲ告クルモノトス此種ノ取引ノミ行ハルルトキハ他人ノ有スル物品ヲ得ントスルモ之ニ對シテ交換スヘキ物品若クハ貨幣ヲ現在所有スルニ非サレハ其目的ヲ達スルコトヲ得ス其不便大ナリトス是即信用取引ノ起ル所以ナリ

信用取引トハ財貨又ハ其他ノ有價物件ノ授受ニ關シ當事者一方ノ行爲ハ現在ニ存シ之ニ對スル他方ノ行爲ハ將來ニ屬スル取引ノ謂ヒニシテ之ヲ信用取引ト稱スルハ先財貨又ハ其他ノ有價物件ヲ與フル者カ後日必ス其返償ヲ受クルコトヲ信認スルヲ以テナリ而シテ信用ナル語ハ主トシテ此信認ヲ意味スト雖信用取引ノ意義ヲ以テ用ヒラル場合亦少カラサルナリ

信用取引ヲ廣義ニ解スルトキハ貸貸借ノ如キモノヲモ包含スヘシト雖狹義ノ信用取引ハ所有權ノ移轉ヲ生スルモノニ限り賣買ノ一部ト所謂消費貸借トヲ包含スルモノニシテ本章ニ於テ述ヘントスルハ狹義ノ信用取引ナリトス而シテ賣買ノ一部トハ即買主カ直ニ其代金ヲ支拂ハシテ之ヲ後日ニ約スルモ

ノヲ謂ヒ現今此種ノ取引ハ盛行ハレ次節ニ述フル爲替手形、約束手形ハ主トシテ此種ノ取引ニ基因
スルモノトス又消費貸借ハ特定物ノ返償ヲ要セサルモノニシテ例之米一俵ヲ借り而シテ後日同種ノ米
一俵ヲ返償セシコトヲ約スルカ如キ是ナリ而シテ貨幣ハ隨意ノ數量ニ於テ借受クルコトヲ得其使用方
法ハ借主ノ意ニ任セ而シテ返償ノ時期來ルトキハ容易ニ之ヲ集ムルコトヲ得ルカ故ニ最消費貸借ニ適
合スルモノニシテ消費貸借ハ主トシテ貨幣ヲ以テ行ルナリ然レトモ信用制度發達スルニ從ヒ貨幣貸
借モ亦實際貨幣ヲ授受セス小切手等ヲ用フル場合多キニ至ルナリ
信用取引ハ種種ニ區別スルコトヲ得ルモノニシテ其重要ナルモノヲ舉クレハ第一、債務者カ債權者ニ
自己ノ動産又ハ不動産ヲ提供シテ返償ヲ擔保スルトキハ之ヲ對物信用ト名ケ反之債權者カ債務者ノ性
質、能力等ヲ信認シテ取引ヲ爲ストキハ之ヲ對人信用ト稱シ債務者ノ財產、境遇、關係等ヲ信認シタル
場合モ亦一種ノ對人信用ナリトス第二、債務者カ信用取引ニ因テ得タル物件ヲ不生産のニ使用シ其返
償ニ關シテハ別ニ財源ヲ求メサルヘカラサルモノヲ消費信用ト稱シ反之債務者カ農商工業等生産事業
ニ必要ナル資金ヲ借入ルル場合ニハ之ヲ生産信用ト名ケ第三、信用取引ニ於テ債務者カ國家又ハ其他
ノ公共團體ナルトキハ之ヲ公信用ト謂ヒ私人間ノ信用取引ハ之ヲ私信用ト稱スルナリ

第二節 手形

前節ニ述ヘタルカ如ク信用取引ニ於テハ一方ノ提供ト之ニ對スル他方ノ報酬トカ其時ヲ異ニスルモノ
ナルカ故ニ債權者、債務者間ノ關係ヲ明ニスル方法ナカルヘカラス以是信用取引ニ關シ種種形式行ハ
レ就中簡單ナルハ口頭ノ約束ニシテ其次ハ帳簿ノ記入ニ止マルモノトス其他ニ至テハ證券ノ作成ヲ要
シ此等ノ證券ニシテ一定ノ金額ヲ表示シ裏書又ハ引渡ニ依リ他ニ讓渡シ得ヘキモノヲ信用證券ト稱ス
ルナリ

信用證券ノ主ナルモノハ國家又ハ自治體ノ發行スル公債證券、會計ノ發行スル債券、銀行券手形等ナ
リトス本節ニ於テハ手形ニ付ラ少シク説明セント欲スルナリ

手形ニ三種アリ爲替手形、約束手形及小切手是ナリ爲替手形ハ甲ヨリ乙ニ宛テ丙又ハ其指圖人(若クハ
手形持參人)ニ一定ノ金額ヲ支拂フコトヲ要求スル證券ニシテ甲ヲ振出人、乙ヲ支拂人、丙ヲ受取人ト
謂ヒ而シテ丙其手形ヲ乙ニ呈示シテ乙之カ支拂ヲ引受ケタルトキハ乙ヲ引受人ト稱ス爲替手形ニ記名
式(指圖式)ト無記名式トアリ記名式(指圖式)トハ例之ハ「丙(又ハ其指圖人)へ御支拂可被成候」ト記ス
ルヲ謂ヒ無記名式トハ例之「此手形持參人へ御支拂可被成候」ト記スルヲ謂フ又手形ノ支拂期日即満期
日ヲ定ムルニ四種アリ即(一)締定期日(二)日附後定期日(三)一覽拂又ハ參著拂(四)一覽後定期日是ナ
リ

爲替手形ハ裏書ニ依テ他人ニ讓渡スコトヲ得ルモノナルカ故ニ支拂期日ノ到著スルマテ數多ノ人ノ間
ニ轉轉スルコト稀ナラサルナリ而シテ裏書ニ記名式(指圖式)ト無記名式(白地式)トアリ例之丙カ其手
形ヲ丁ニ讓渡サントスルトキ「表面ノ金額丁又ハ其指圖人ニ其支拂可被成候也」ト書スルカ如キハ是記
名式(指圖式)ノ裏書ナリトス然ルニ何等ノ文句ヲモ記載セス單ニ裏書人カ署名ノミヲ爲ストキハ是即
無記名式(白地式)ノ裏書ニシテ此場合ニ於テハ爾後爲替手形ハ引渡ノミニ依テ之ヲ讓渡スコトヲ得ル
ナリ而シテ手形ノ支拂人、満期日ニ於テ支拂ヲ爲ササルトキハ手形ノ所持人ハ裏書人及振出人ニ對シ
テ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

爲替手形ハ元來住所ノ相隔リタル商人間ノ取引ニ用ヒラレタルモノニシテ今日モ國際取引ハ主トシテ爲替手形ニ依リ決算セラルルモノトス故ニ如何ナル場合ニ爲替手形カ作成セラルルカヲ見ルニ例之東京ノ甲、大阪ノ乙ニ一箇月後ニ代金受領ノ約束ヲ以テ千圓ノ物品ヲ賣渡セルニ當リ同期日ニ大阪ニ於テ千圓ノ支拂ヲ要スル丙ノ求ニ應シ丙ヨリ千圓ヲ受取リ丙ヲ受取人トセル乙宛ノ爲替手形ヲ作ルカ如キ場合多シトス

約束手形ハ甲ヨリ乙ニ宛テ乙又ハ其指圖人(若クハ手形持參人)ニ一定ノ金額ヲ支拂フコトヲ約スル證券ニシテ甲ヲ振出人乙ヲ受取人ト稱ス而シテ記名式、無記名式ノ區別、支拂期日ノ種類其他裏書、償還請求等總テ爲替手形ト同一ナリ而シテ約束手形ノ成立モ亦賣買ニ原因スルコト多シ例之甲ハ乙ヨリ千圓ノ物品ヲ買入レタルモ直ニ其代金ヲ支拂ハスシテ乙ニ宛テ六十日後拂ノ約束手形ヲ振出スカ如キ是ナリ

小切手ハ當座勘定ノ契約アル者カ其取引銀行ヲシテ券面記載ノ金額ヲ呈示次第受取人又ハ其指圖人(指圖式小切手)又ハ持參人(持參人拂小切手)ニ支拂ハシムル手形ニシテ其性質ハ一覽拂ノ爲替手形ニ酷似スルモノナリ我商法ニ於テハ小切手ノ支拂人ハ必シモ銀行タルヲ要セサレトモ銀行ナラサル支拂人ハ實際例外ニ屬スルモノトス又小切手ノ所持人カ之ヲ呈示シテ其支拂ヲ求ムヘキ期間ニ關シテハ諸國ノ法律規定ヲ一ニセサレトモ要スルニ其期間ハ皆短ク我國ニ於テハ日附ヨリ一週間以內トシ其間ニ呈示ヲ爲ササルトキハ償還請求ノ權利ヲ失フモノトス故ニ指圖式ノ小切手ハ裏書ニ依リ持參人拂ノ小切手ハ引渡ニ依リ他人ニ讓渡スコトヲ得レトモ他ノ手形ノ如ク永ク轉流通スルモノニ非サルナリ小切手ノ表面ニ二條ノ平行線ヲ畫キ其內ニ單ニ銀行ト記載シ又ハ特定銀行ノ稱號ヲ記載スルコトヲ

リ前者ヲ普通線引、後者ヲ特別線引ト稱ス普通線引ノ場合ニハ支拂銀行ハ銀行業ヲ營ムモノニ對シテノミ支拂ヲ爲シ特別線引ノ場合ニ於テハ其特定銀行以外ニ支拂ヲ爲ササルナリ蓋持參人拂ノ小切手ハ之ヲ竊取スル者ト雖銀行ニ於テ支拂ヲ受クルコトナシトセス然ルニ線引ト爲シ銀行ニノミ支拂ヲ爲ストキハ如此危險ナキヲ得ルナリ

手形ハ所謂抽象的債務ヲ生スルモノニシテ一度之ヲ發行スルトキハ手形ヲ作成セル原因ノ性質又ハ存否如何ハ敢テ問フ所ニ非ス而シテ債務不履行ノ場合ニ於テハ手形ノ署名者ニ對シテ所謂手形訴訟ナルモノヲ提起スルコトヲ得サラシムルカ故ニ手形ニ署名スル者ハ其責任ノ其重大ナルヲ知ラサルヘカラス而シテ如此手形上ノ債務ハ極テ嚴格ナルモノナカ故ニ諸國ノ法律ハ手形ノ形式ニ重キヲ置キ苟法定ノ形式ヲ具備セサルモノハ手形タルノ效力ヲ失ハシムルモノトス以是手形ヲ授受スル者ハ手形ノ形式ニ深ク注意セサルヘカサルナリ

第三節 銀行

經濟ノ狀態進歩スルニ隨ヒ一方ニ於テハ貨幣ヲ貸與セント欲スル者、他方ニ於テハ之ヲ借用セントスル者増加シテ兩者直接ニ信用取引ヲ行フコト少カラサルナリ然レトモ數多ノ場合ニ於テ何人カ貸サント欲シ又何人カ借ラント欲スルハ互ニ相知ルノ機會ナク且貸主カ借主ノ支拂能力ヲ鑑別スルコト容易ナラサルノミナラス貸與若クハ借用シタル貨幣ノ數量、辨濟ノ時期及利率ニ關シテ兩者ノ意思全然一致スルコト難シトス故ニ兩者ノ間ニ立チテ雙方ノ冀望ヲ達セシムルモノアラハ其便益鮮少ナラサルナリ而シテ今日主トシテ此職務ヲ竭スモノハ銀行ナリトス

蓋近代ノ銀行業ハ貨幣ノ兩替又ハ貨幣ノ保管ニ淵源シ此種ノ業務ハ今日モ仍銀行ノ行フ所ナレトモ現今銀行ナルモノノ主タル業務ハ信用ノ授受ニ在リトス即銀行ハ之カ排他ヲ將來ニ約シテ他人ノ貨幣ヲ得ルト同時ニ之カ返濟ヲ他日ニ期シテ其有スル貨幣ヲ他人ニ與フルモノニシテ前者ニ於テハ銀行債務者ト爲リ後者ニ於テハ銀行債權者ノ地位ニ立ツモノトス故ニ銀行ノ業務ハ之ヲ受信的業務即チ他人ヨリ信用ヲ受クル業務ト授信的業務即他人ニ信用ヲ與フル業務トニ區別シ得ルモノニシテ先受信的業務ニ付テ説明セントス

第一 銀行券ノ發行

銀行券ノ發行ハ現今諸國ニ於テ多クハ中央銀行ノ獨占ニ屬スルコト前章ニ於テ述ヘタル如シト雖其銀行業務ノ一タルヤ明ナリ而シテ其受信的業務タルハ他ナシ銀行券ノ所持人ニ對シ銀行ハ債務ヲ有スルモノニシテ其流通スル間ハ世人ヨリ信用ヲ受クルモノナレハナリ

第二 預金

「ワグネル」カ曰ヘル如ク預金ハ信用制度、銀行組織ノ大ニ發達セル國ニ於テハ受信的銀行業務ノ最重要ナルモノニシテ遂ニ銀行券發行ノ業務ヲ凌駕スルニ至レリ例之英國銀行ノ銀行券發行額ハ千八百七十年以來著シキ増加ヲ見サルニ反シ其預金ハ次第ニ増加シテ銀行券流通額ニ二倍スルニ至レリ其他倫敦諸銀行ノ預金ハ非常ノ巨額ニ達シ隨テ此等諸銀行ノ利益配當額ハ少クモ一割以下ニ下ラス多キハ殆

二割ニ達スト云フ

如何ナル目的ヲ以テ世人カ銀行ニ預金ヲ爲スカヲ見ルニ

(一) 手許金ヲ自ら保管スルトキハ盜難、火災ノ憂アルノミナラス授受ノ際多少ノ手續ヲ免レサルヲ以

テ之ヲ銀行ニ預入レ銀行ヲシテ己ニ代リテ支拂ヲ爲サシムルモノ

(二) 自己業務ノ狀況世上一般ノ景氣等ニ依リ一時運用ノ途ナキ資金ヲ預入ルルモノ

(三) 資本ノ金額小ニシテ單獨ニ使用スルノ方法ニ乏シキモノ又ハ其金額ハ甚小ナラザルモ所有者自ラ生産的ニ使用シ置ハサルヲ以テ之ヲ預入ルルモノ

ニシテ第一ノ場合ニ於テハ其出入頻繁タルヘキカ故ニ其預金ハ何時ニテモ拂戻ヲ受クヘキヲ要シ第二第三ノ場合ハ然ラス是即拂戻ノ時期ニ關シ預金ニ當座預金ト定期預金トノ區別ヲ生スル所以ナリ

抑銀行カ預金ヲ爲スハ利益ヲ得ルカ爲メニシテ利益ヲ得ント欲セハ之ヲ運用セサルヘカラサルナリ然ルニ當座預金ノ如キ請求次第何時ニテモ拂戻ノ義務ヲ負フトキハ其全部ヲ舉テテ運用スルコト能ハス常ニ相當ノ準備金ヲ備ヘサルヘカラス反之定期預金ニ於テハ拂戻ノ時期定マレラ以テ之カ運用ノ期間大ニシテ準備金ノ必要モ亦少シトス以是預金ニ附スル利子ノ割合ハ定期預金ニ高クシテ當座預金ニ低カラサルヲ得サルナリ加之當座預金ハ其目的元來利殖ニ在ラサルヲ以テ無利息ナルモノ不可ナク諸國ノ中央銀行カ當座預金ニ對シテ利子ヲ附セサルハ言フヲ俟タス英吉利、蘇格蘭等ニ於テハ普通ノ銀行ニ於テモ亦無利子ナルモノ少カラスト云フ而シテ定期預金ニ對シテハ銀行ハ預金證書ヲ交付シ滿期ニ至リ證書引換ニ預金ノ元利ヲ支拂フヲ通則トシ當座預金ハ通常前節ニ述ヘタル小切手ヲ以テ引出スモノトス

當座預金ニ對シテ小切手ヲ振出シ以テ現金支拂ニ代フルハ其利便少カラサルヘシト雖小切手ノ所持人カ銀行ト取引ナキトキハ却テ不便ナシトセス又縱令小切手ノ所持人カ銀行ト取引アリト雖所謂振換制度及手形交換制度ナクンハ未以テ其便益ヲ全通スルコトヲ得サルナリ例之茲ニ一銀行アリ甲乙丙丁等

ハ皆此銀行ニ當座勘定ヲ有スルニ當リ甲乙ニ若干ノ金額ヲ支拂ハントスルトキハ甲銀行ヨリ現金ヲ引出シテ乙ニ支拂フヲ要セス乙ニ與フルニ小切手ヲ以テスヘシ乙之ヲ銀行ニ呈示スルモ多クハ現金ヲ受取ラス自己ノ當座勘定ニ記入セシムルモノトス故ニ銀行ハ毫モ現金ノ出入ヲ爲サズ單ニ帳簿上ノ振替ヲ爲スノミ而シテ甲乙間ノ貸借ハ決算セラルルナリ其他丙丁間モ異ナルナク同一ノ銀行ニ當座勘定ヲ有スルモノハ皆然リトス是即振替制度ナルモノナリ現今振替制度ノ最發達セルハ獨逸ニシテ即獨逸帝國銀行營業所ノ數三百餘ニ上リ當座勘定ノ華客一萬五千ニ達シ其間ニ於ル支拂ハ振替ヲ以テ之ヲ行ヒ其取扱高ハ非常ノ巨額ナリトス

振替制度カ至大ノ便益ヲ與フルコトハ言フヲ俟タスト雖其範圍一銀行内ニ限ルカ故ニ他銀行ニ對スル貸借ノ決算ハ手形交換ノ制度ニ依ラサルヘカラサルナリ例之甲乙丙丁各其取引銀行ヲ異ニスルニ方リ甲乙ニ第一銀行宛ノ小切手ヲ與フレバ乙ハ通例之ヲ己ノ取引スル第二銀行ニ持參シテ預金ト爲スヲ以テ第三銀行ハ第一銀行ニ對シテ之ヲ取付ケサルヲ得ナルナリ丙丁更ニ第三、第四ノ銀行ト取引ヲ有スルトキハ又前記ノ如キ關係ヲ生スルヲ以テ銀行ノ數増加シ小切手ノ使用盛大ナルニ至テハ銀行間ニ於ル債權債務ノ關係縱橫ニ錯雜シ各銀行箇箇別ニ其決算ヲ爲スニ於テハ勞費決シテ尠ナラサルナリ然ルニ毎日一定ノ時間ヲ以テ諸銀行ノ手代一所ニ會シ他銀行宛ノ小切手又銀行支拂ノ手形ハ各其支拂銀行ノ出張員ニ交付シ同時ニ自行宛ノ小切手又ハ自行拂ノ手形ヲ他銀行ノ出張員ヨリ受取り而シテ其差額ノミヲ支拂ヒ若クハ受取ルトキハ勞費ヲ省略スルコト大ナリトス殊ニ交換組合ノ諸銀行皆中央銀行ニ當座勘定ヲ有シ交換差額ノ受拂モ亦中央銀行帳簿上ニ於テ振替アルトキハ更ニ便利ヲ加フルナリ此手形交換制度ハ英國ニ濫觴シテ現今諸國ニ行ハレ其交換高ノ大ナリシハ倫敦ナリシモ近時紐育ノ凌

駕スル所ト爲レリ我國ニ於テモ東京、大阪、京都等ニハ此制度行ハルモノトス

第三 債券ノ發行

資金吸收ノ爲ニ債券ノ發行ヲ爲スモノハ所謂不動產抵當銀行ナリトス所謂不動產銀行モ亦此方法ヲ採ルモノアリト雖普通ノ銀行ニ至テハ絶無ト謂フモ不可ナキナリ蓋不動產抵當銀行ハ主トシテ農業ノ信用機關ニシテ農業者ノ資本ハ利率低ク借用期限長キヲ要スルカ故ニ預金ノ如キ短期ノ資本ヲ以テ其需ニ應スルコトヲ得ス是即返済期限ノ長キ債券ヲ發行スル必要アル所以ナリ而シテ不動產抵當銀行ノ發行スル債券ノ擔保ハ銀行カ其貸付ノ抵當トシテ保有スル不動產ニシテ其抵當價格高キニ失スルコトナキニ於テハ債券ハ甚確實ナルヲ以テ低利率ヲ以テスルモ世人ハ之カ募集ニ應スルナリ不動產銀行モ亦工業會社等ニ貸付ヲ爲スヤ其期限普通ノ割引貸付ヨリモ長キヲ以テ債券ノ發行ニ依リ資金ヲ集ムルヲ得ハ利便甚少カラス現今我國ニ於テ債券ノ發行ニ關シ特典ヲ有スルハ日本勸業銀行、農工銀行、北海道拓殖銀行及日本興業銀行ナリトス

第四 手形ノ割引

授信の業務ニ於テ第一ニ述ヘント欲スルハ手形ノ割引ナリ手形ヲ割引ストハ手形ノ支拂期日前ニ於テ割引ノ當日(若クハ翌日)ヨリ期日マヲノ利息ノ額面金額ヨリ控除シ其殘額ヲ以テ手形ヲ買入ルノ謂ナリ前ニ述ヘルカ如ク現今商工業者間ニハ信用取引行ハルコト少カラス例之一製造家カ其製造品ヲ賣却スルヤ直ニ其代金ノ支拂ヲ受ケス買主ニ對シ爲替手形ヲ振出し若クハ買主ヨリ約束手形ヲ受取ルモノトス而シテ製造家ハ銀行ニ就テ此手形ノ割引ヲ依頼スルトキハ直ニ之ヲ現金ト爲スコトヲ得レトモ若割引ノ方法ナカランニハ製造家ハ必資本ノ缺乏ニ苦ムヘキナリ其他卸賣商、小賣商等ノ間ニ於

ヲモ手形ノ授受行ハレ此等ノ手形ハ多クハ銀行ニ依テ割引セラルモノニシテ手形ノ割引カ商工業者ニ與フル便益ハ決シテ尠ナラサルナリ「ロッシェ」曰ク手形ノ流通ハ割引ノ便アルニ因テ非常ニ増加スト次ニ銀行ノ側面ヨリ之ヲ觀ルニ手形ノ支拂期限ハ通常三箇月以下ナルカ故ニ割引ニ使用セル資金ハ手形ノ満期ト共ニ復歸シ隨テ資本固定ノ憂少ク而シテ手形ノ成立スル原因ハ多クハ賣買取引ナルカ故ニ普通ノ場合ニハ手形ノ債務者ハ期日ニ其支拂ヲ爲スヲ得ルモノトス殊ニ商業上ノ德義健全ナル社會ニ於テハ手形ノ不渡ヲ以テ非常ノ恥辱ト爲シ全力ヲ盡シテ之ヲ避クルモノトス然レトモ手形遂ニ不渡ト爲ルトキハ銀行ハ手形ノ署名者ニ對シテ嚴格ナル手形訴訟ヲ提起スルコトヲ得ルナリ又普通ノ銀行ハ割引手形ノ支拂期日未到著セザルモ他ノ銀行殊ニ中央銀行ニ依賴シテ再割引ニ付シテ現金ト爲スコトヲ得ルナリ之ヲ要スルニ手形ノ割引ハ銀行ノ授信ノ業務中資金回收ノ最迅速ナルモノニシテ銀行券ノ發行又ハ預金ヲ以テ主タル授信ノ業務ト爲ス銀行ニ於テハ手形ノ割引ハ特ニ重要ナル業務ナリトス然レトモ手形ニモ所謂融通手形ナルモノアリ此種類ノ手形ハ不渡ト爲ルコト多キヲ以テ十分ニ注意セザルトキハ損失ヲ來スコトアリトス

第五 貸付

貸付モ亦一ノ授信ノ業務ニシテ通常ノ銀行カ行フ貸付ハ主トシテ短期ノ動産擔保貸付及當座貸越ナリトス動産擔保貸付ニ用ヒラルル擔保品ハ多クハ有價證券殊ニ公債、株券、債券ニシテ商品ト雖品質變更ノ憂少ク價格ノ激變稀ナルモノニ至テハ貸付ノ擔保タルニ適シ確實ナル倉庫會社カ預證券（及質入證券）ヲ發行スルニ於テハ殊ニ然リトス當座貸越トハ當座預金ヲ爲ス者カ銀行ノ許諾ヲ得テ擔保品ヲ差入レ協定セル極度金額ニ達スルマテハ預金ナキト雖恰預金ニ對スルカ如何時ニテモ小切手ヲ振

出シ得ルモノヲ謂フ此契約ヲ有スル者ハ何時ニテモ必要ナル金額ヲ借出シ爾後其一部ト雖隨時之ヲ返償スルコトヲ得ルヲ以テ無益ニ利息ヲ支拂フコトナク其便益大ナリトス然レトモ銀行ノ方面ヨリ之ヲ觀レハ貸越約定ノ數多クシテ其金額亦大ナルニ於テハ金融逼迫ノ際窮境ニ陥ルコトナシトセザルナリ不動産モ亦貸付ノ擔保ニ適スルモノナリト雖流込ノ際之ヲ賣却スルコト容易ナラサルカ故ニ長期ナル不動産擔保ノ貸付ハ勸業銀行、農工銀行等ノ如キ特種ノ銀行ヲ要スルナリ蓋農業者カ地所ノ買入、土地ノ改良等ニ投スル資本ハ僅少ノ時日ヲ以テ之カ回收ヲ望ムコトヲ得ス且農業ノ收益ハ通常大ナラシヲ一時ニ巨利ヲ博スルモノニ非サルカ故ニ農業者ノ要スル資本ハ低利率ニシテ借用期間甚長且年賦償還ノ方法ヲ用ヒ得ヘキモノタラサルヘカラサルナリ故ニ不動産擔保銀行ハ此必要ニ應スルヲ目的ト爲シ例之勸業銀行ハ五十箇年以内、北海道拓殖銀行、農工銀行ハ三十箇年以内ニ於テ年賦償還ノ方法ニ依リ不動産ヲ抵當トシテ貸付ヲ爲スコトヲ得ルナリ

第六 爲替

例之東京ノ甲、大阪ノ乙ニ對シテ千圓ヲ支拂フヘキ義務ヲ負フト同時ニ東京ノ丙、大阪ノ丁ヨリ千圓ヲ請求スルノ權利アルニ於テハ甲ハ丁ニ宛テタル千圓ノ手形ヲ丙ヨリ譲受ケ之ヲ乙ニ送付スルトキハ乙ハ此手形ヲ以テ丁ヨリ千圓ヲ受取ルモノトス是即爲替ナルモノニシテ甲乙丙丁ハ百餘里ヲ隔ツト雖其間ノ借借ハ一片ノ信用證券ヲ以テ之ヲ決算シ爲ニ通貨輸送ノ危險ト勞費トヲ避クルコトヲ得而シテ實際何人カ大阪ニ支拂ヲ爲シ又大阪ヨリ支拂ヲ受クルヤ互ニ相知ルコト難ク又縱令之ヲ知ルト雖其金額及支拂期日一致スル場合ハ甚タ稀ナルヘキヲ以テ銀行カ其間ニ立テテ媒介ヲ爲スノ必要大ナリトス然レトモ銀行ハ一方ヨリ買取リタル手形ヲ直ニ他方ニ賣渡スモノニ非ス自ラ爲替手形ヲ作成シテ之ヲ

爲替依頼人ニ買渡シ買入レタル手形ハ支拂ノ支店若クハ約定銀行ニ送付シ期日ノ到來ヲ待テ之カ取立ヲ爲サシムルモノトス故ニ爲替ハ授信ノ業務トフ併セ行フモノト謂フヘキナリ
爲替業務ハ一國內ニ於テ甚重要ナルコト右ニ述ヘタルカ如シト雖國際貸借ヲ決算スルニ於テ殊ニ然リトス抑數多ノ邦國相交通スルニ當リ其間ニ支拂ノ義務及支拂要求ノ權利成立スルハ自然ノ結果ニシテ此等ノ貸借ヲ決算スルカ爲ニ金銀ヲ輸出スルハ比較ノ少額ニ止マリ其他ハ皆爲替ニ依ルモノトス即外國ニ對シテ支拂請求ノ權利アル者手形ヲ作成シテ之ヲ賣出シ外國ニ對シテ支拂ノ義務アル者ハ外國宛ノ手形ヲ買取り之ヲ債權者ニ送付シ以テ正貨ノ輸送ニ伴フ危險ト費用トヲ避クルナリ以テ外國宛ノ手形ハ一種ノ商品ト爲リ其價格ハ需要供給ノ關係ニ因テ高低ヲ來シ以テ爲替相場ナルモノヲ生スルニ至ル而シテ手形買賣者ノ間ニ立チ一方ニ於テ手形ヲ買フテ之ヲ支拂地ニ送付シ一方ニ於テ手形ヲ作成シテ之ヲ賣渡ス者ハ主トシテ銀行ナリトス

外國宛手形ノ金額ハ通常支拂地ノ貨幣ヲ以テ表示スルモノナレトモ之カ買賣ハ賣買地ノ貨幣ヲ以テスルカ故ニ手形ノ買賣セラルルハ直ニ外國貨幣ト自國貨幣トノ交換比例現出スルモノトス是即爲替相場ニシテ其建方ニ二種アリ即一定ノ自國貨幣ヲ以テ標準ト爲スモノ及一定ノ外國貨幣ヲ以テ基礎ト爲スモノ是ナリ前者ヲ受取勘定ノ相場ト稱シ後者ヲ支拂勘定ノ相場ト名ク
受取勘定ノ建方ニ於テ爲替相場騰貴スト謂フトキハ手形ノ價格下落シテ外國貨幣ニ對スル我貨幣ノ價格上騰セルナリ反之爲替相場下落スト謂フトキハ手形ノ價格上騰シテ外國貨幣ニ對シテ我貨幣ノ價格下落セルナリ而シテ爲替相場平價(法律ニ規定スル品位・量目ニ依リ各國ノ本位貨幣カ含有ヘキ貴金屬ノ分量ヲ比較シテ其相當價格ヲ表示セルモノ)ヲ法定平價ト云フ)以上ニ上ルトキハ之ヲ順若クハ利

ト謂ヒ平價以下ニ下ルトキハ之ヲ逆若クハ不利ト云フ蓋受取勘定ニ於テ爲替相場ノ上騰ハ通常手形ノ供給潤澤ニシテ外國ヨリ支拂ヲ受クルコト多キヲ示シ爲替相場ノ低落ハ手形ノ需要盛ニシテ外國ニ支拂ヲ爲スコト大ナルヲ表ハスモノトス故ニ第一ノ場合ニハ正貨輸入セラレ第二ノ場合ニハ正貨流出スルノ結果ヲ生スヘキヲ以テ其金融上ニ及ス影響ニ依リ順・逆又ハ利・不利ノ名稱ヲ下スナリ

爲替相場ハ手形ノ需要供給ノ關係ニ依テ上下スルモノナレトモ其變動ニハ自ラ制限アルモノトス即手形ノ價格其シテ上騰スルニ於テハ外國ニ支拂ヲ爲サントスル者ハ手形ヲ買入レスシテ正貨ヲ輸送シ又手形ノ價格著シク下落スルトキハ手形ノ所持人ハ之ヲ支拂地ニ送付シ正貨ノ回送ヲ請求スルニ至ルヘキナリ而シテ之ヲ實際ニ徵スルニ爲替相場ノ變動ニ乘シ正貨ノ輸出入ヲ行フハ主トシテ銀行ナリトス即此等ノ銀行ハ手形價格ノ上騰著シキトキハ正貨ヲ輸出シ之ニ對シテ自ラ手形ヲ振出し以テ手形ノ供給ヲ増加スルカ故ニ手形ノ價格ハ上騰ヲ止ムルナリ又手形ノ價格大ニ下落スルトキハ手形ヲ買入ルル同時ニ外國ノ支店若クハ約定店ヲシテ正貨ヲ輸送セシメ之カ支拂ハ買入レタル手形ヲ以テスルナリ如此爲替相場上下ニ制限シ以テ正貨ノ輸入若クハ輸出ヲ促スニ至ル境界點ヲ正貨輸送點ト稱シ爲替相場ハ上騰スルモ低落スルモ通常之ヲ超ユルコトナキナリ然レトモ金貨國ト銀貨國トノ間ニ於テ爲替相場ハ金銀比價ノ變動ノ爲ニ激變ヲ生スルモノニシテ正貨輸送點ナルモノナク金銀貨國ト紙幣國トノ間ニ於テ爲替相場モ亦然リトス

以上述ヘタルハ參著拂手形即手形振出地ニ著次第直ニ振出人ヨリ其支拂ヲ受クル手形ノ相場ニシテ定期拂ノ手形ノ相場カ參著拂手形ノ相場ニ對シテ有スル差違ハ主トシテ支拂期日ノ長短ト手形支拂地ニ於ル利子比合ニ基クモノトス即參著拂手形ニ比シ支拂ノ遅ル日數ノ利息ヲ參著拂手形ノ價格ヨリ控

除セルモノニシテ手形支拂地ノ利子歩合ヲ標準トスル理由ハ他ナシ定期拂ノ手形カ支拂地ニ到著スルモ支拂期日ノ未達セサルニ當リ之ヲ現金ニ引替ヘント欲セハ其地ノ銀行ニ就テ割引ヲ請ハサルヘカラス而シテ銀行ハ其所在地ノ利子歩合ヲ以テ割引ヲ爲スヘケレハナリ又手形ノ種類ニ依テ其價格同シカラス其最高キハ所謂銀行手形即内國ノ銀行カ外國所在ノ支店若クハ約定銀行ニ宛テ振出シタルモノニシテ商業手形之ニ次キ其最低キハ擔保品附手形即所謂荷爲替手形ナリトス

銀行業務ノ重要ナルモノハ以上述ヘタルカ如シ而シテ此等ノ業務ハ一銀行悉之ヲ行フモノニ非ス各其性質ニ應ジテ選擇スル所ナカルヘカラス之ヲ要スルニ一方ニ短期ノ受信的業務ヲ行フ者ハ他ノ一方ニ於テ短期ノ受信的業務ヲ營ミ長期ノ債務ヲ負フ者ニシテ始テ長期ノ貸付ヲ行フヘキナリワグチルハ銀行營業上ノ一大原則ヲ示シテ曰ク「銀行ノ受信的業務ノ性質ハ其銀行ノ行フヘキ受信的業務ノ性質ヲ決定ス」ト

第四節 信用ノ利害

以上數節ニ縷述セル信用取引、信用證券、信用機關ハ相待テ如何ナル利益及弊害ヲ一國ノ經濟ニ與フルモノナルカ先之カ利益ヲ述ヘシ

第一 信用取引ハ財貨ノ移轉ヲ容易ナラシメ隨テ一國ノ生産ヲ進歩スルコト大ナリトス試ニ信用取引禁止セラレタル場合ヲ想像センニ農工商業者ハ一方ニ於テハ資本ヲ得ルコト能ハス他ノ一方ニ於テハ其產出物ヲ賣却スルコト極テ困難ナルヘキナリ

第二 有爲ノ才能ヲ抱ク者ニシテ資本ヲ缺ク者少カラス故ニ信用ニ依リ之ニ資本ヲ給シ以テ資本ト勞

雜 錄

○大審院判例要旨

- 六〇 地上權ノ效力ニ關スル特約 地上權者ハ恰所有者ノ如ク土地ヲ使用シ其土地ノ性質ヲ轉換セタル範圍ニ於テ自由ニ修理シ得ヘキモノニシテ所有者ハ其修理ヲ擔任スル義務ヲ負ハサルヲ通例トスレトモ敢之ニ異ル特約ノ締結ヲ妨ケス殊ニ所有者カ篤志ヲ以テ幾分ノ修理ヲ加フルモ亦其自由ナリトス(三十七年十一月二日第二民事部)
- 六一 民法施行前ノ永小作權 民法施行前ト雖永小作權ハ特約ナキ以上地主ニ於テ隨意ニ之ヲ消滅セシメ小作地ヲ引上ケ得タルコトハ一般ニ認メラレタル慣習ナレハ裁判所ハ其存在ノ根據ニ付特ニ說明ヲ加フルヲ要ナシ(同年十一月十六日第二民事部)
- 六二 騙取ノ意義 刑法第三九〇條第一項ノ財物若クハ證書類ノ騙取トハ人ヲ欺罔シテ錯誤ニ陥ラシメタル結果其財物又ハ證書類ノ占有ヲ奪ヒ之ヲ移付セシムルノ義ニシテ犯人自身カ其占有ヲ得タルヤ否ヤハ犯罪ノ成立ニ關係ナシ(同年七月八日第一刑事部)
- 六三 委託金費消罪ノ成立 委託金費消罪ハ金錢ノ委託ヲ受ケタル者カ其委託ノ本旨ニ違ヒ擅ニ之ヲ費消スルニ因テ成立ス而シテ他日之ヲ辨償スル意思ノ有無ハ犯罪ノ成否ニ關係ナシ(同年八月二十二日第一休暇部)

○無賞討論會 去一月二十八日午後六時ヨリ本校第一講堂ニ於テ無賞討論會ヲ開キタリ出題者富井

110

第一等賞

第二等賞

第三等賞

リ毎月二回發行月謝金五拾錢トス

第七卷
第十七號
一月十五日發行

每月一回十五日發行
定價一冊拾貳錢
郵稅壹錢
郵稅拾錢
共錢

(第六十五號)

○新年ノ辭

最近判例批評其二	訴訟行為順序二	因果連鎖中斷責任更新力	律師令憲法上關係理論	領土割讓ノ法性	討論批評及自家ノ見解
勝本勘三郎	中村勘三郎	美濃部達吉	岡部俊吉	仁田部達吉	梅田謙次郎
法學博士	法學博士	法學博士	法學博士	法學博士	法學博士

露國新手法(十二)	佐竹三吾
錯謬カ手形行爲ニ及ホス效力	松本蒸
前戶主ノ配偶者ト實家ニ偶者シタル前戶主ノ妹トノ相續順位	掛下重次郎
	法律學士

舉國一致中毒
如是我聞

水去堂主
公平慨史

大審院新判決例・五十八件

明治三十八年迎○皇孫御命名○東京地方裁判所事件總數○好訴狂○最近兩年間
於ケル火災ノ統計○妙ナ詐偽取財○裁判所支那廢止ト區區裁判所ノ權限擴張○軍人軍屬
ノ刑事裁判管轄○法令ノ公布
○信濃支部總會○大學部演習科ノ開始○學生忘年會○校友茶話會兼忘年會○實業懇話
會○校友異動○校友死亡○圖書購入費資金金附者○寄贈書目

會○校友異動○校友死亡○圖書購入費資金寄附者○寄贈書目○信託支部總會○大學部演習科ノ開始○學生忘年會○校友茶話會兼忘年會○實業懇話

二月

法政大學

○廣告

法政速成科講義錄

每月二回發行
第一號 二月五日發行

○清國公使楊樞氏頭辭
○總理梅博士肖像
○譯者 氏上奏文
○言

○法學通論及民法
○國際法
○經濟地
○政治

法學博士 梅克次郎
法學博士 岡田進郎
法學博士 山崎浩一
法學士 野村浩一

○維錄 ○法政速成科規則 ○法政大學沿革略 ○日本之大學 ○和豐紡紗有限公司

○木講義錄總以漢文記述法律政治經濟等之學科者也 ○校外生月謝金五十錢 ○一冊代金三十錢

二月 法政大學

(明治三十七年十一月十日第三種郵便物認可)
每月三回 五日 十五日 二十五日發行

明治三十八年二月二日印刷
明治三十八年二月五日發行

(定價金三十錢)

編輯者

萩原敬之

印刷者

小宮山信好

印刷所

金子活版所

東京市麴町區富士見町六丁目十六番地

發行所 司法省 法政大學

(電話番町百七十四番)